
ノベルアンソロジー
黄雷のガクトゥーン
Novel Anthology
～ What a shining braves ～
―Brightness, the thing of which it thinks much. ―What who envies
―However, nobody's fingertip had touched it until now.



カバーイラスト：千枚葉

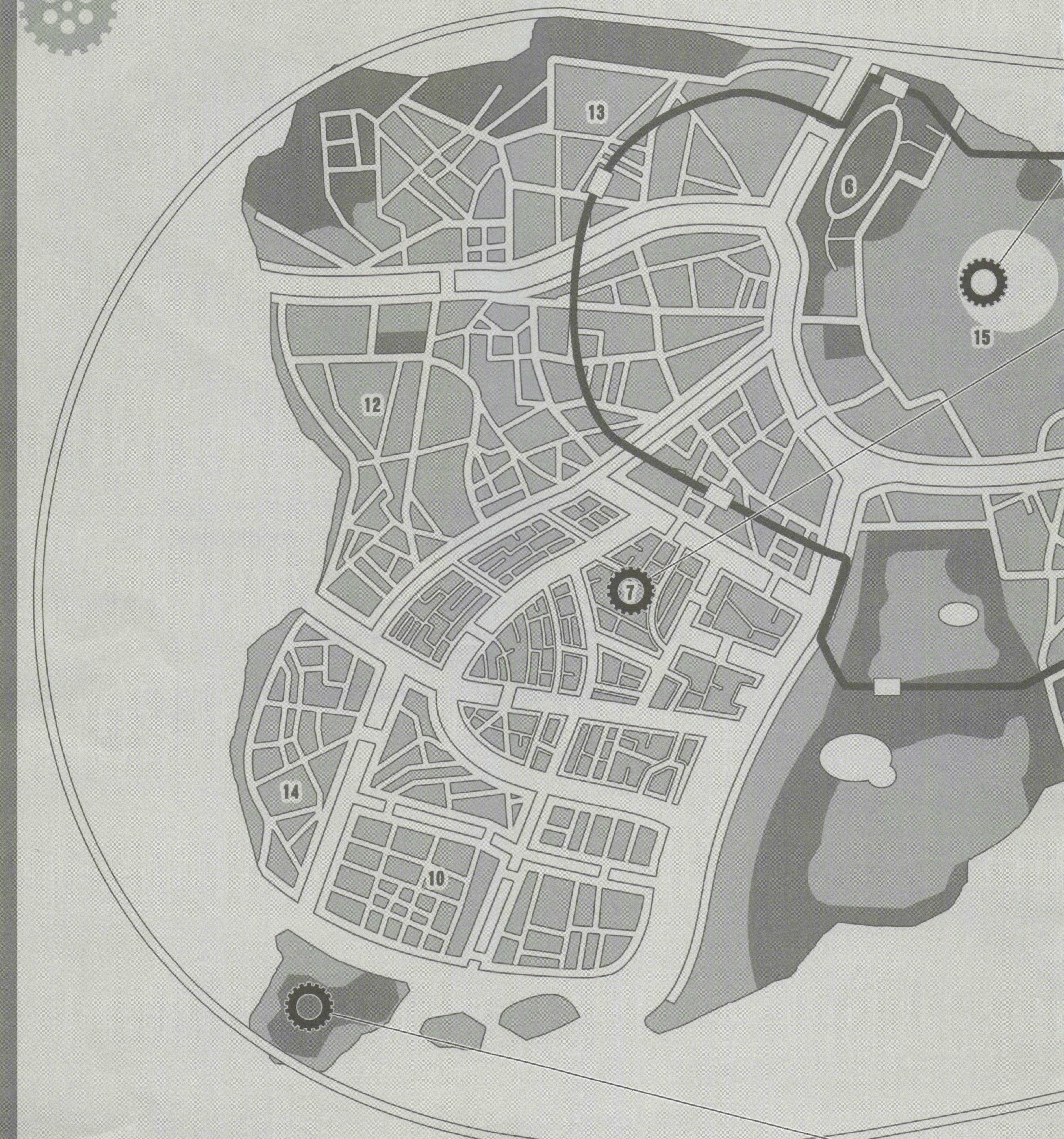

黄雷のガクトゥーン
ノベルアンソロジー
Novel Anthology
~ What a shining braves ~
—Brightness, the thing of which it thinks much. —What who envies
—However, nobody's fingertip had touched it until now.

Gahkthun Novel Anthology
黄雷のガクトゥーンノベルアンソロジー

MARSEILLE OFFSHORE ACADEMY


9
2
5
4
1
3
11
8

マルセイユ洋上学園都市全図



1：思弁的探偵部（テスラ邸）
2：教育区域
3：学生街
4：落第街（地下）
5：都市中央東部
6：統治会領域
7：潮騒通り
8：ベルタ別荘
9：倉庫街
10：手工業工場群
11：農林水産プラント
12：重工業プラント
13：空港
14：合同カテドラル
15：ディフの塔・統治塔

本誌は２０１２年にライアーソフトから発売されたＰＣゲーム『黄雷のガクトゥーン』のノベルアンソロジーです。本編プレー後にお読みいただくと一層お楽しみいただけます。

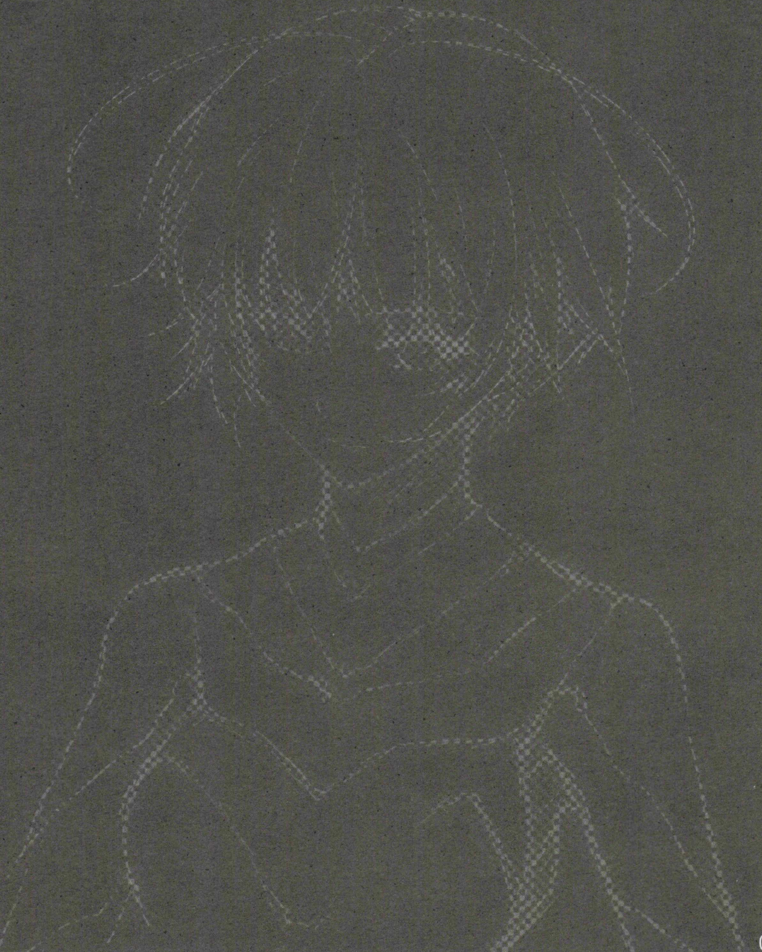
スチームパンクシリーズポータルサイト
http://www.steampunkseries.com/
ライアーソフトウェブページ
http://www.liar.co.jp/（18歳未満閲覧禁止）

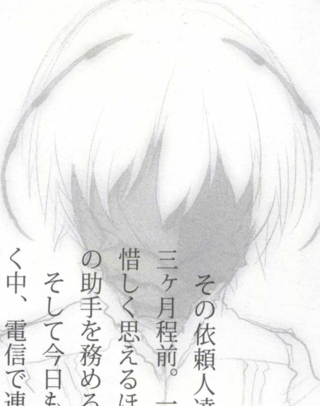
幼虫夢寐

~La Belle au bois dormant~

文・加納京太

画・東麻姫





その依頼人達が最初に旧英国大使館の扉を叩いたのは、今から三ヶ月程前。一九〇八年、九月半ばの夕暮れの頃。夏の暑さが名残惜しく思えるほどに冷たい小雨が降った日だったと、思弁的探偵部の助手を務める少女ネオンの記録簿には書かれていた。
そして今日もまた、雪にならないまでも凍えるような雨がパラつく中、電信で連絡があった通りの時間に呼び鈴のベルが鳴った。
「メーリアンの初版が見つかったって本当なのっ？」
扉を開けるや冷気と共にエントランスへと飛び込んで来たのが、十歳程の少年だったことにネオンはまず驚いた。ここマルセイユ洋上学園都市で子供の姿を見るのは希有なことである。
そしてその少年の顔を覆っているのが、幼虫の顔を切り取ったような、奇妙で不気味な仮面であることに小さく息を呑んだ。
「兄さん、挨拶もせずに恥ずかしいですよ」
邪気のない少年を『兄』と呼び、窘(たしな)めたのが、機関式単眼鏡を装着した背の高い青年だったことも驚きだ。
（噂は本当だったんだ）
少年の不作法に理知的な顔をしかめる男性を目の前にしてもネオンには信じ難い。
あの日はそう、夕食の買い物のために近くの商店まで足を伸ばしていたため、彼女自身はこの二人――ジャン・アントワーヌ・エミール・ファーブルと、ポール・アンリ・ファーブルの兄弟とは会っていない。だから、顔を合わせるのは初めて。
目を白黒とさせているネオンを見て、青年は落ちつかない兄を捕まえたままに、紳士的な微笑を浮かべた。
「これは失礼しました。はじめまして、マドモワゼル。私は連絡を入れておきました、ポール・ファーブルです。そしてこちらが兄のジャン」
「こんにちは！　テスラはどこっ？」
「落ち着いてください、兄さん。ふぅ、全く……」
弟の大きな手に肩を掴まれたままの小さな兄は、顔を上げてネオンへと挨拶をしたが、好奇心は奥の客間から離すことはできずにうずうずとしている。
話には聞いていたから、名乗られずとも誰かはすぐに分かった。ちぐはぐな兄弟の噂。
博物学、特に昆虫の分野において功績を残すファーブル兄弟。
彼らを前にすると、様々な異能事件(アート)――超常現象と向き合ってきたネオンであっても戸惑いを隠すことが出来なかった。
それ故に反応が遅くなってしまうのも仕方がないことなのだが。
「何をしている。玄関先で客人を待たせるとは、助手の務めがなっていないぞ」
「マ、マスター」
いつの間にか奥から姿を現していた全身白ずくめの改造制服姿の男性、マスター・テスラに叱られて、ネオンはハッとした。
相手がどんな人物であっても関係はない。
思弁的探偵部部長であるテスラのたったひとりの助手として、しなくてはならぬことを疎かにしたことに違いはない。
「御無沙汰だな。連絡した通り約束の品は入手した」
「やった！　見せてっ！　早く見せてっ！」「兄さんっ！」
「寒かったでしょう？　温かいお茶を入れますから中へどうぞ」
「そうしてくれ。用意に多少の時間がかかる」
（いらっしゃることは分かっていたのに、マスターったら用意していなかったの？）
ネオンは呆れかけたが、マスターの不可解な行動は今日に始まったことではない。兄弟が気を悪くした風には見えなかったこともあり、彼女は二人を客間へと案内した。

◆　◆　◆

「このお菓子、美味しいね！」

もぐもぐ、と。ジャンは仮面の下の隙間から焼き菓子を口へと運び、夢中になって食べている。
(うん、そう。隙間から食べているのよね。ちらちら変な触手が見えてる気がするけど、きっと気のせい)
気になったところで『それは何ですか?』と問える程、ネオンは図々しくはなれない。
そんな彼女の気を知らず、無邪気に食べ続けていたジャンであったが、階上から何やら音が聞こえてくる度、そばだたせていた耳をピクリと反応させて、ソファから立ち上がろうとする。
「兄さん」
それをポールは慣れた調子でソファへと引き戻し、大人しく座らせた。
(どう見ても逆……よね)
小さな兄と大きな弟。噂好きの友人を通して、そんな彼らの話をよく聞いていたにも関わらず、部屋の隅に立って二人を見ていたネオンには、違和感しか持てなかった。
昆虫の生態だけでなく、環境学や社会学にまで多岐に渡り論文を発表し評価されてきた。知る人ぞ知る有名人。
兄のジャンは、通常授業の免除及び単位の確保、そして研究棟における独自研究室の貸与という特別待遇で招聘された天才少年だったらしい。
本来ならばとっくに卒業するか、研究部に進学してもおかしくはないのに、異能の影響で彼は年を取ることなく、十年近くもの間、在学し続けているとの話だった。
静かに紅茶を啜っているポールは今年度卒業予定の五年生。
二人目の母親の子で、腹違いの弟だという。破天荒で天才的な兄と違い、秀才として有名で教師からの評判も高い。
『入学してからずっとお兄さんのお世話をしていてね、苦労しているせいか、いつも苦虫を噛んだような顔をしているんだって』
——とは、ネオンの友人イズミの言である。下世話なゴシップのようなノイズも混じっていたが、概ね間違ってはいないようだ。
(でも、不思議な異能。年を取らないで、いつまでも少年のままでいるってどういうことなんだろう? ……あ、いけない。あまりじろじろ見るのは失礼かな)
ネオンが視線を外した時、丁度階段を下りてくる音が聞こえてきた。今日までに何度も聞いてきたマスターの足音。それがいつもよりもゆっくりで大きい。何か重たいものを持っているようだった。
『依頼されたものを探してくる。気が進まんが』
今回の依頼についてネオンが知っているのは、依頼人がファーブル兄弟であることを除けば、その程度だ。
何を探しているのかもマスターは教えてはくれなかった。きっと追求すれば教えてくれたかもしれない。けれど説明がないということが彼なりの彼女への気遣いだと分かってからは、あまり意識しないようになっている。もう少し器用な気の遣い方があると思っているけれども。
(……それに、今回の調べ物ではキザイア先生も関わっているみたいだし)
彼が好意を抱いていないと知ってはいても、美人の教師と何やら秘密めいたやり取りをしているのを見るのは、あまり気持ちが良いものではなかった。
(別にいいんですけどね。マスターがどこで誰と密会していようとも、あたしには関係ないことだし)
矛盾する気持ちを心の中で呟いている内に、マスターが階段を降り切ったのが分かったので、ネオンは内側から扉を開いた。勝手に扉が開いたことに軽く驚いたような顔をしている彼を見て、ネオンは軽く勝ち誇った表情を見せる。
「気が利くな。だが、この程度で客人を玄関で待たせた失敗は償えないぞ」
「分かっています」
お客様に聞こえないような小声のやり取り。顔には出せないので、

彼女は心の中で小さく舌を伸ばした。
「待たせてしまい、すまなかったな」
不遜な態度で謝罪した後、テスラがテーブルの上に置いたのは、樫材を用いて作られた重そうな木箱だった。その蓋を慎重に開けると、厚い革表紙に守られた大きな判の図録が姿を現した。
「わぁっ！　――もっ……もがー、もががーっ！」
「これが、メーリアンの『新花図譜』の初版なのですね」
飛びつきそうになった兄を膝の上に捕えたポールは、暴れるのを抑えながら、至極当然な顔で冷静にテスラへと問うた。テスラも面を食らうことなく頷く。
「正確には彼女が描いたスケッチブックの複製だ。お前達兄弟が求めている、一般には出回っていない――《人に見えざる妖蟲》までもが記録されている、唯一の版だ」
「《人に見えざる妖蟲》……ですか？」
「そうだ。これの作者マリア・シビラ・メーリアンという女性は、十七世紀の自然学者であり、画家でな。特に植物や昆虫に対し、並々ならぬ観察眼を持っていた。だが、その人並外れた観察眼を持つが故に、本来ならば認識することの叶わん《この世ならざる蟲》までをも観察してしまった。そしてそれが記録されている出版されなかったはずの真の初版が、ここの旧図書館に所蔵されていたこの図譜だ」
なるほどとネオンは思う。
昆虫を専門に扱っているファーブル兄弟にとっては興味をそそられる本だろう。キザイア先生が絡んだのは旧図書館が関することだったから？　しかし、人が認識できない妖蟲とは……。
「……危ないものですか？」
経験上、マスターがこのような物言いをする時、何かしら危険が付きまとうものだとネオンは認識していた。
恐る恐る訊ねた助手だが、主人は表情を変えない。
「不明だ。私の手に届いてからの一ヶ月、調査を続けてみたが、この本自体から異能めいたものは感じられない。ごくごく普通の図録に見える。ただ――」
「これでラ・ニンフォウズだー！」
腕を振り解いてジャンが飛びつこうとしたので、慌ててポールも捕まえ直す。
「ニンフォウズ……蛹化……？」
「……ええ。この本は、兄さんの幼虫期を終えるための鍵だと言うのです」
蛹化？　幼虫期？
ネオンには馴染みの浅い博物学用語が続けざまに出てくる。
本に触れるだけで何かが変わる？　人生を変えた一冊と言う言葉を聞いたことはあるが、そういうことなのだろうか？
「早く、早く見せてよぅ！」
見せても良いかと問うように、テスラから目配せをされたポールは、ゆっくりと首を横に振った。
「まずは私が確認をさせていただきます」
「えー、なんでだよー！　ずっこいぞジャン！」
「私も研究者の端くれですから、メーリアンの図譜は可能な限り目を通してきています。専門家ほどとは申せずとも、真贋を見極めることはできるでしょう」
「それが良いだろう」
膝の上で暴れているポールのことは気にもせず、青年二人は話をつけた。
すっと立ち上がったマスターは優雅な歩みでテーブルを回り込むと、ポールの腕からジャンを抱え上げてしまう。
「わーっ！　離してよーっ！」
「依頼人に対し些か悪いとは思うが、こうでもせねばポールも確認することはできんだろう」
「う～！」
軽く会釈をし、ポールは『新花図譜』の初版へと向き合った。
ごくりと、生唾を飲み込む音が聞こえたようにネオンには思えた。

門外漢の自分には本当の価値までは分からないことだが、それほどまでに貴重な一冊なのであろう。
『Neues Blumenbuch』と書かれた表紙をゆっくりとめくると、文字で埋め尽くされた頁があった。ネオンの立つ位置からはハッキリと見えたわけではないが、仏語の本ではないようだ。『Der』という文字も見えたから、独語だろうか？
ポールがその部分をさっと読み飛ばしてしまったために、彼女はそれ以上確かめることは出来なかった。
そして目録。大きく三つの段落に分けられており、最初の二つの段落には十二ずつ、そして最後の段落には十三の小項目が含まれていることが、ネオンにも分かった。
何故それが分かったかといえば、ポールがひとつずつ確かめるように、指で確認しながら項目を数え上げていたからだ。
彼は三段落目の十三個目の小項目で指を止めた。恐らくそれこそが、ジャンの求めている項目で間違いがないのだろう。
それを確かめたポールは、覚悟を決めた厳しい表情となって頁をめくる。
「わあ……」
ネオンが思わず感嘆の声を漏らしてしまうほどに、目にした花環のスケッチは美しいものだった。
赤や黄色、白に青。色とりどりの花々を集め作られたガーランド。色彩がふんだんに使われて見るも鮮やか。写実的、けれど幻惑的な魅力もあって惹きこまれてしまう。不作法と分かっていても、首を伸ばして覗きこまずにはいられなかった。
幾度も眼にしているはずのポールでさえ、十秒程の間、それに魅入られていたくらいだ。彼は取り繕うように殊更姿勢を正すと、先へと進んだ。
次は、紫のヒヤシンスと黄色いスイセンが描かれているだけ。
けれど、花環のような派手さこそないがシンプルであるが故に、より印象深く感じられる。よく見れば、ヒヤシンスには黄色い蝶が止まっていた。
次の絵も、その次の絵も、植物だけでなく、虫が一緒に描かれていることが多い。しかも蝶のように美しいものだけでなく、気味の悪い幼虫や蜘蛛などもいる。
（どうしてだろう？　虫なんていない方が綺麗なのに）
「メーリアンは昆虫学者でもあったと言ったはずだ。彼女が求めていたのは美しさではなく、真実の姿なのだろう。篆刻写真などがない時代だからな、自ら描くしかなかった」
ネオンの不満気な表情から何を考えているかを読み取ったか、テスラが付け加える。
なるほど、そう言われれば彼女にも納得ができる。
「それに虫って可愛いし！」
「あ、あはは……そう……かな……？」
けれど、更に付け加えられたジャンの「可愛い」という言葉を受け入れるのは難しい。蠢く幼虫や脚の多い虫が可愛いとは……やはり思えなかった。だから虫のいない絵の方が目にしてホッとする。
「…………」
ポールはそんな三人のやり取りを気にもせず、図録の頁をめくっていた。これまでに三十六のスケッチの確認を終えている。
残るは一頁。いよいよ彼らが求めているという《人に見えざる妖蟲》が描かれた頁が待っている。
「ポール！　早くページめくってよ！」
「こら、暴れるな」
ジョンなどは我慢しきれなくなってじたばたと暴れていた。テスラであっても扱いに困っているほどだ。
目だけを上げてそんな兄の様子を見たポールは、めくろうとした指を止めた。そして図録を手に持つとソファーから立ち上がる。
「ずるいー！　一緒に見せてよー！」
「私の確認が終わってからです」
そうして壁際に立ち、自分にだけ見えるように『新花図譜』を開

き直した。
——瞬間、ポールの目が大きく見開かれる。手から力が抜け落ち、本は滑り落ちそうになったが、それはかろうじて防がれた。
中身を確認し終えたポールは図録を閉じると、ゆっくりと息を吐き出した。
「……確かに、これこそがメーリアンの『新花図譜』の初版だ」
そこには美しい芸術品に触れた人間が見せる、特有の満ち足りた表情がある。
（……あれ）
けれど、それだけではないようにネオンには思えた。どこか落胆したような、諦めにも似た暗い表情が混じっている気がする。そのような感情を浮かべる理由は何であるのか、彼女が見定めようとした時だった。
「誰も、近寄らないでください」
「え、え……」
本を抱えた彼が見せているのは、虚ろに淀んだ瞳。病的で、何かに取り憑かれているかのようでさえある。
「何する気だよ、ポール！」
テスラの腕から逃れたジャンの叫びに、ポールは弱々しい笑みを見せた。
「ミスター・テスラ。依頼料は払う。弁償もしよう」
「そういった問題ではないと思うが、君はどうだ？」
「分かっている。だからこそ私は——」
上着の衣嚢から取り出されたものが小型の機関式着火器であることは、ネオンにもすぐに分かった。JJが煙草を吸う時に用いているもの。それを取り出すことが何を意味するか……これまでの彼の言動から想像するに難くはなかった。
「——これを燃やさねばならないんだ！」
「ポールっ！」
「『僕』にはこうするしかないんだよ、兄さん！」
「だめっ！」
ネオンは飛び出したが、間に合わない。赫い火が点る。点ってしまう。それは古びて黄ばんだ印刷紙へと移され、そして兇暴な炎と変わる。はずだった。
「あ——」
噴きあげたのは炎ではなく、闇だ。
漆黒の蔓が図録より溢れだし、部屋は瞬く間にどこまでも深い闇に呑みこまれていった。

◆ ◆ ◆

——夢を見たのだと、これまでに見たことがない笑顔で言った。
メーリアンの『新花図譜』によってボクは蛹になるのだと、朝焼けが入りこむベッドの上、残務を終えて眠りについたばかりの僕に馬乗りとなって、兄さんは訴えた。
その言葉を最初に聞いた時、信じられないと思うのと同時に……ついにその日が来たのだと、僕は絶望した。
兄の着想、集中力、そして昆虫より愛される天稟は、僕には到底持ちえないものだ。
どれだけ野外調査を重ねて昆虫と触れ合い、貪るように文献と向き合い、夜を徹して権威と語り合おうとも、凡才である僕では決して得ることが出来ぬ、特別な輝きを放っていた。
そんな兄を僕は尊敬していたのだ。
そしていつか、背中を見つめるだけではなく、横に並び立ち、共に同じ世界が見られることを夢見ながら——……だが、それは叶わぬ夢だったのだ！
あの笑顔に、僕はもう追いつけない！
兄の手には止まるのに、僕の手には止まらなかったあの蝶のように、ひらひらと飛んで行ってしまうのだ！　虫の考えも分からぬ僕

では触れることはできない！
僕は兄に……捨てられてしまう！
そう思った時、『私』は決意していた。
兄を私の手の届く距離に、虫籠に入れてしまうことを――

◆　◆　◆

（これが兄さんの求めていたもの……僕とは違う世界）
南米の密林のように生い茂っているのは、闇の植物。
それはポールが最後に見た、失われた一頁に良く似ていた。
人の世界には有り得ない光景。兄が見ようとしていた風景。
「……馬鹿げたことをしたものだ」
粘糸に四肢の自由を奪われたポールは自虐的な笑みを浮かべる。
異能が憑いたと思しき魔書の世界。昏き植物を這う妖蟲が吐く糸に、このまま縛られて、生きながら食われるのも悪くはないだろう。
（そうすれば、魂だけでもこの世界の……兄さんが求める世界の一部になれるかもしれない……）
「何これ、い、いやぁ！　何だかべとべとしてるっ！」
その声に顔を向けて見れば、探偵の助手をしている少女が見えた。
私と同じように糸によって縛られてしまっていた。
……そういえば彼女もいたのだった。
様々な異能事件を解決してきたと噂されるニコラ・テスラならば、何が起きても問題はないと思っていた。
兄は……兄もきっと大丈夫であろう。闇の中に溶けているため姿を見ることはできないが、彼は虫を愛し、愛されている存在だ。きっとそれはこの世ならざるものにも通じるはず。確信めいたものをポールは持っていた。
（だが、私と同じただの人間であるこの少女は……）
「……すまない、マドモワゼル。貴女を巻き込んでしまって」
「あたしは……いいえ、あたしは大丈夫。ポールさん、あなたも大丈夫ですよ。きっと、マスターが助けにきてくれますから」
窮地に追いやった当人を前にして、強く、ネオンは励ました。
その反応にポールは驚く。普通の少女であれば、恐怖に悲鳴を上げるか、ただ震えるくらいしかできないだろう。なのに、彼女は違っていた。
「貴女は……貴女達は、強いのだな」
それは彼には持てなかったものだ。
「私は駄目だよ。こんな度し難いほどに愚かな弟である私は……」
「そんなこと、ないです」
少女の眩しさから逃げるように、瞼を閉じようとしたポールだったが、ネオンに断定の口調で否定され、目を開き直す。その視界に飛び込んできたものは――！
「――ポールッ！」
自分へと向けて手をいっぱいに伸ばす、兄の姿だった。
「兄さん、どうして……」
「今、助けるからな！」
だが、それは許さぬと言うように、妖蟲達がジャンへと激しく糸を噴きかける。
「く……うっ……！」
少年の細い四肢が悲鳴を上げた。
その光景にポールは耐えることが出来ず、声を振り絞り叫ぶ。
「やめてくれ！　私のことは構わなくていい！」
「そんなことできるもんか！　ポールは……ボクの大切な弟だ！」
「――っ！　っ、兄さん……っ？　兄さんっ！！」
粘糸が、一重二重とジャンの全身に幾重にも絡みついていく。
小さな体を完全に覆い尽くし、今や巨大な黒き繭と化していた。
そしてそれで終わりではない。更に吹きつけられる糸はそのまま彼を締め付けていく。
「兄さんは、お前たちの敵じゃない！　敵は僕だろう！」
されどポールの、人の声は妖蟲には届かない。八方から噴きつけ

られる糸に、今や寸断されそうになっている。
「やめろ、やめろ……僕はどうなってもいい、だから兄さんだけは……っ！」
「——そんなこと言うな、バカポールっ！」
繭が、断ち切られていた。
外側からではない、内側から縦一文字に分断されている。
その内側から飛び出してくるのは、眩いばかりの輝き！
「ポール、手を伸ばせ！」
闇の中、黒の侵食を許さぬ光を纏いしジャンが腕を伸ばす。
兄が無事だったことにポールは安堵しかけたが、それ以上の驚きが、奇跡の光景がそこにはあった。
「……その……姿は」
光の衣が剥がれる。そこには素顔のジャンがいた。
ジャンの顔を覆っていた仮面の半分が割れていた。
初めて見る真実の顔。
それは少年のものではなく……少女のものであった。
顔だけではない。少年であったはずの体もまた変化している。
羽化をする直前の蛹が持つような、琥珀色の光沢が、少女の丸みを帯びた体を覆っていた。
「そうか……兄さんは幼虫期を終え……蛹になれたんだね……」
「ああ、そうだよっ！　だから、これからもポールと一緒にいられるんだ！」
え——
それは声となり、ポールの口から洩れたかは分からない。
ただ、信じられぬ言葉に彼は呆けたようにジャンを見た。
「一緒に学園都市を卒業しようっ！　そして、二人でカダスに行くんだっ！」
その言葉に、ポールは大粒の涙を流していた。
粘糸により拘束された腕を前へ……兄が差し伸べてくれた手へと、力の限り伸ばす！
「……うん、行こう。一緒に行こう、兄さん！」
二人の指先が触れ合う。妖蟲の魔力に負けぬ引力で、二人は惹き合い、そして手が結ばれる——
「——よくやった、若人よ」
稲妻が常闇の世界を照らした。
青白く激しい。なのにこんなにも胸が温かくなる、優しい雷光。
「なればこの電刃、茨の道を切り拓く！」
青い白光が巨大な刃となり昏い世界を裂く——

◆　◆　◆

——ボクは、早く蛹になり、成虫になりたかった。
人工的とはいえ、自然が豊富なこの学園都市に生息する昆虫は、実験区画も含めれば、狭い範囲にかなりの種類が集まっていた。
それに外の世界に比べてここは安全で、ボクは朝から夜まで……時には徹夜をして、自由に昆虫の観察をすることが許されていた。
だから、ここにいることを不満に思うことはなかったんだ——ポールに出会うまでは。
彼は、ボクを見続けてくれた。
特別なものとしてではなく、ボクの行うことの全てを。
弟として尊敬の眼差しと、愛を持って。
それは学園都市に入学してから約十年間、誰からも注がれたことのない温かなもの。
とても気持ちが良くて……だから、彼が今年で卒業をしてしまうと思うと、胸が苦しくなって、張り裂けてしまいそうで。
……そんな時だ。夢を見たのは。
幼虫の仮面が外れ、蛹となる夢。
ポールと一緒に広い世界へと飛び立つ夢。
その時、思ったんだ。ポールなんだって。

ボクをずっと、ずっと見続けてくれる人は、間違いない。
ポールなんだ――

◆　◆　◆

「兄さん……僕はあなたに置いていかれることが怖かった……！」
「誰も置いていきやしないよ。ポール、キミはボクの大切な弟なのだから」
　元に戻った旧英国大使館の客間で、ポールは少女の姿となったジャンの胸に抱かれ、泣きじゃくっていた。
　その姿を見て、ネオンはぽかんと口を開けてしまう。
「で、でも、マスター。男の子が、女の子になるなんて……」
「口を閉じろ。莫迦に見えると前にも言ったろう」
「そういう異能もあるだろう」
（そんな一言で済ませていいの？）
　ネオンの中にはまだ何かを言いたい気持ちもあったが、幸せそうな兄弟の……いや、今や姉弟か。その姿に微笑をこぼしてしまう。
「……それにしたって、マスターひどいです」
「何がだ？」
「本に危険はないと言っていました」
「私は不明と言ったぞ。夢の話は聞いていたからな。ジャンが触媒になる可能性は考慮に入れていた」
「大事なことはきちんと口にして下さい！　依頼人の前ですからがんばったけど、本当に怖かったんですよ！　ねばねばだし！」
　依頼人には聞こえないように、小声で責める。しかしテスラは全く動じず。
「あの妖蟲はこけおどしに糸を吐くだけだ。お前の体に傷がつく前に助け出せる自信は勿論あるとも」
「自信って……」
「大切なお前を傷付かせるものか」
「た、大切なって――っ……う、ううぅ……」
　赤くなって下から睨みつけるネオンをよそに、テスラは姉弟へと視線を戻した。
「ともあれ、これにて一件落着だろう。これで彼らの父君との約束も果たされた」
　その穏やかな表情に、彼が満足できる結果に終わったのならば良いかと、ネオンはこれ以上口にするのを止めた。
　その代わり、今度潮騒通りに行った時に何かご馳走してもらおう。
（……そう、蜂蜜いっぱいのふっくらパンケーキが良いな）
「ふむ、雨が止んだな」
　そんなことをネオンが考えていると知ってか知らずか、テスラは窓の外を見て、そんなことを呟く。
「……本当だ」
　窓硝子の向こうに見える雨上がりの空は、美しい紫色の闇に染まっていた。

◆　◆　◆

　――それから。
　それから、ネオンとテスラの間にも色々とあって。
　改めてファーブル姉弟へときちんと挨拶をする機会が得られたのは、一九〇九年三月の卒業式の後、遥かなるカダスへと出立する二人を見送る場となってしまった。
「もう行ってしまわれるんですね」
「うん。式が終わり次第出発するって決めていたから」
　ジャンは、もう女性の姿をしているのだから、男性名であるジャンと呼ぶのも変な感じがすれど――彼女は少年のように笑う。
「姿は変わっても、せわしさは変わらないみたいです」
　そんな兄……姉の隣で、ポールは優しく微笑んでいた。
　噂されていたような刺々しい感じはもうしない。柔らかくて、温

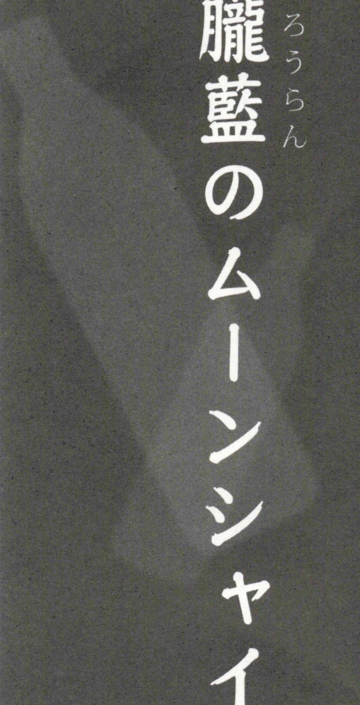
かな空気に包まれている。
　そんな彼らの姿を見て、心より良かったとネオンは思う。
「ミスター・テスラも、有難うございました。カダス行きのチケットの手配までしていただいて」
「気にすることはない。ちょっとしたお節介（アフターサービス）だ。カダスはお前達二人の博物学的好奇心を満たすに十分な場所だろう。青春を謳歌しろよ、若人」
　尊大なマスターの態度に、もう少し違った言い方もあるのではないかとネオンは思うが、同時にきっともう治らないだろうと諦めてもいる。
　ファーブル姉弟が笑ってくれているのが救いだ。
「それと、ポール。お前は詩の腕も磨くといい。大ファーブルに負けぬ美的観念を持っている。フレデリック・ミストラルとの交流は続けた方が良い。精進したまえ」
「……貴方は本当に何でもご存じなんですね」
　詩？　詩って、あの詩？　ポールさんが詩を書くの？
　まさか別れ際にそのような驚きの新事実を教えられるとは。
「お前の詩集が出る日を楽しみに待っていよう」
「ええ。もし出版する機会に恵まれましたら、必ずお送りします」
「ボクも手紙を出すから、返事をちょうだいね」
「ええ、もちろん」
　そうして二、三の言葉をかわしている内に、別れの時刻となってしまった。
「名残惜しいですが、これでお別れですね」
「もし、カダスに来ることがあったら連絡してね」
「お二人も、お元気で」
「ふむ。こう言う時、カダス風の挨拶に良いものがある」
　いざ出立する二人の姿に、思い出したようにマスターが呟いた。
「良き青空を」
　良き青空を！

　その言葉を、ネオンは不思議と気に入ってしまった。
　言葉にだけ聞いたことがある、カダス地方に存在する奇跡の空の名前！　青い空！　これから向かう二人の前途を祝す言葉としては、ぴったりな気がする――
「良き青空を！」
　その言葉にファーブル姉弟は満面の笑顔を見せてくれた。
　もし、カダスの空を見たことがある人間がその表情を見たならば、きっとこう例えることだろう。
　蒼天のような笑顔だった――と。




HORE ACADEMY

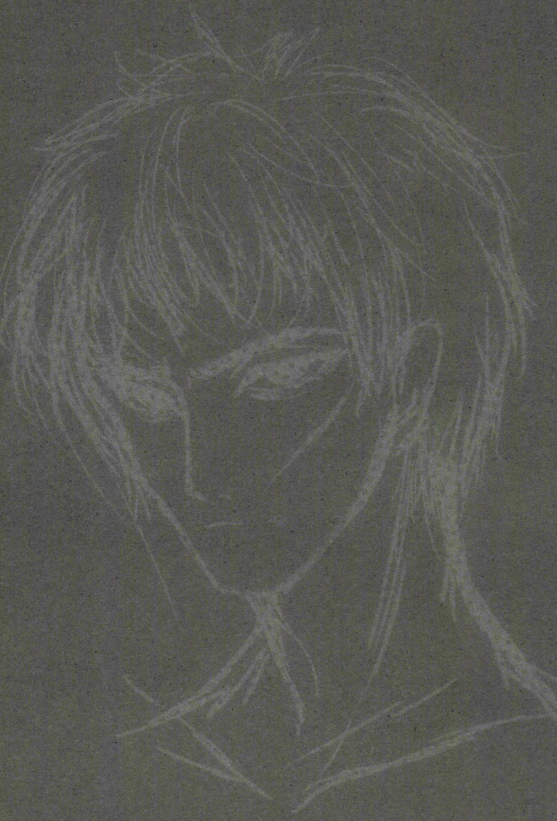




朧藍（ろうらん）のムーンシャイン

文・禾刀郷

画・霧生実奈



プロローグ

薄墨を幾重にも塗り重ねたような空の下、かき混ぜた絵の具の筆水の如き暗灰色の海に四囲された陸地に、緑の斑紋が点在する。

それは、この人工島――マルセイユ洋上学園都市（アカデミア）のそこかしこに造成された植樹域の木々が、わずかな陽光を頼りに息づき、健気に放つ、生命の証の色彩だ。

その淡緑の領域の中のひとつ、教育区画第三〇号教育棟のほど近くに位置する第二三小公園に、一人の男が足を踏み入れた。

昼休みに入ったばかりの公園に、彼以外の人影はまだない。

「ちょいとばかり早かったかね」

周りを見渡した男はそう呟くと、公園内のベンチへと歩み寄り、「やれやれ」と大儀そうな溜め息をつきつつ、腰を下ろした。

世界中の才気溢れる若者たちが集う学園都市におよそ似つかわしくない、ひどく疲れた、若々しさに欠ける仕草だった。

実際、無精ひげを生やした男の相貌は、とても学生のものには見えなかった。恐らくは三十歳前後、少なく見積もっても二十代後半には差し掛かっているだろう。その上、男の左眉と顎に斜めに走る傷跡が実年齢以上の貫禄を彼に与えていた。

「ったく、うちの上官殿の人遣いの荒さったらねえな……。こっちの歳ってもんも、ちったあ考えて欲しいもんだ」

男はコートの襟元に無造作に手を突っ込み、くしゃくしゃになった紙巻き煙草の包装を取り出すと、口で咥えて一本引き出した。

男の纏う灰藍色の生地に白の前板を縫いつけ黄色の縁取り（パイピング）を施した独特な意匠のアルスターコートは、彼が教職員ではなく学生、それも校紀を司る風紀警察の所属であることを示していた。

ジャン・ジャック主任衛視。近しい者――それが味方か敵対者かは問わない――は、彼をＪＪと呼ぶ。今しがた彼が口にした直属の上司である女性一人を除いては。

燻（くすぶ）り出した煙草をひと喫（す）いすると、紙巻きの頭が熾火（おきび）のように輝いた。一拍の間肺に泳がせた煙を吐き出す彼の顔には、なんとも情けない表情が滲み出していた。

「なんだって合成煙草ってヤツぁ、こう味も素っ気もないのかね。これじゃ紙束燃やして吸ってんのと変わりゃしねえ」

悪態をつきながら消し潰すでも放り棄てるでもなく、彼はそのまま燻らせ続ける。そして煙と共にまた一つ、深い溜息をついた。

「まぁ、どうにかこうにか、今年も無事始まったかね」

ここ数週間、彼ら風紀警官は休日返上で職務に従事せざるを得ない状況が続いていた。一九〇八年度新入生受入経路保全ならびに入管検査関連警備、式典にまつわるＶＩＰ護衛任務、新入生向け校則講習会、『新入生狩り』と称される違法部活勧誘の取り締まりに、新入生歓迎会の名を借りた無軌道な乱痴気騒ぎの後始末、等々――

「まあ、それでもあの頃に比べたら、な」

十数年前から学園都市に根を張り、その来し方を見守ってきた彼――傍観者としてではなく、常に最前線にその身をさらし続けてきた彼にとって、それは甘受すべき類の激務と疲労ではあった。

確かに不合理や理不尽の類は未だ学園の端々に息づいている。違法学生（イリーガル）問題や異能犯罪も尽きる気配はない。

それでも、数年前までの状況と比べれば。

学園都市、そして彼の所属する風紀警察は、秩序と理性の下に整然と制御され、粛々と運営されているといえるだろう。

「そういや……、ぼちぼち、あれから二年か」

ＪＪは、自ら吐いた煙のその先に、灰青色の双眸（そうぼう）を向けた。

見つめるのは頭上に広がる薄墨色の空ではなく、とある事件に彼が身を投じる発端となった、二年前のある日の光景だった。

シーン1／マイク・ドーセット

「失礼します」
金髪(ブロンド)の女性に続いてマホガニー製の重厚な扉を無言でくぐったJJは、鼻腔を襲った刺激臭に顔をしかめた。
学園都市の公序と安寧とを守護する城砦たるべき風紀警察本部。その全権を一身に掌握するはずの上級保安官の執務室は、もうもうたる紫煙に押し包まれていた。
ヤニ臭さだけならまだしもアルコール臭まで芬々(ふんぷん)とさせた煙だ。それが視界も怪しくなるまで部屋中に立ち篭めていると来ては、予め心構えしていても耐え切れるものではない。
「ごほっ……、失礼。アンヌ・ベアール上級衛視、ならびにジャン・ジャック主任衛視、ただいま出頭いたしました」
彼の直属の上司アンヌ・ベアール上級衛視が、煙にむせるのを堪え眦(まなじり)に涙を微かに滲ませつつ、部屋の主に敬礼と報告を送った。
「ご苦労」
部屋の主――マイク・ドーセット上級保安官は、デスクの上に投げ出した脚を交差し、椅子の革製の背もたれに仰け反って、太い葉巻(シガー)を吹かした姿勢のまま、鷹揚にそれに答えた。
「敬礼はどうした、JJ？　おまけになんだ、その面(ツラ)は？　言いたいことがあるって顔だな。違うか？」
アンヌの一歩後方で後ろ手を組み憮然とした顔で直立するJJにドーセットが早速噛みついた。
「別に。まぁ強いて申し上げるなら、相変わらずあんたの葉巻の趣味は最悪だと、そう再認識したというくらいですな」
「それが上官に対する態度か？」
頬を引きつらせる彼の口先で太い葉巻が踊った。
これ見よがしに吹かすその葉巻は、遠くキューバから輸入された何とかというラムフレーバーの最上品らしいが、その強烈な酒精臭たるや、煙に巻かれた下戸が宿酔いしそうなほどだ。
「質問されたからお答えしたまでですがね。でなきゃ、こんな息の詰まる場所で好きこのんで口なんざ開きゃしませんよ」
挑発の響きを言葉に込めつつ、JJが肩を竦めて見せた。
彼とて煙草をこよなく愛し、酒も人並み以上には呑む。
とはいえ、風紀の長が執務中に嗜むものとして、それは不謹慎極まりないものといえた。その上常日頃から反目しあう相手がそれを喫しているとなれば、不快さも数段跳ね上がろうというものだ。
「貴様、今でも俺を部下か何かだと勘違いしちゃいないか？」
ゆっくりと脚を下ろし、デスクの上に身を乗り出して凄むドーセットに、JJが追撃の舌鋒を飛ばした。
「まさか。五年前ならいざ知らず、今や風紀の長たる上級保安官殿を掴まえてドープ(まぬけ)呼ばわりなんざ恐れ多くてできませんて」
昔の渾名で呼ばれたドーセットの顔が瞬時に紅潮した。わななく口から葉巻がこぼれ落ち、鏡の様に磨き上げられたデスクの天板に無残な焦げ目をつける。反撃の言葉も浮かばぬまま眼下から立ち上る煙に惨事を認識し慌てて葉巻を取り上げた彼は、それを灰皿に押しつけるとJJの代わりとばかりに憎々しげにひねり潰した。
彼らのつきあいはかれこれ五年に及ぶ。ドーセットが下級衛視だった頃はJJもなにくれとケツ持ちをしてやったものだ（もっとも彼の世話になったことのない風紀警官もそうはいないが）。
『ドープ』の渾名は当時失態続きだったドーセットに周りの衛視たちがつけたもので、JJがそう呼んでいた訳ではなかったが。
「……閣下、ジャン・ジャック主任衛視との旧交を暖め合うために呼ばれたのでしょうか？　でしたら職務時間外に酒場なり、どこか相応しい時と場所で仕切り直されることをお勧めいたしますが」
不毛な会話を打ち切るべくアンヌが横合いから口を挟むと、ドーセットは鼻を鳴らした。
「ふん。部下も部下なら上司も上司だな。口の利き方を知らん。……まあいい、今日はお前らに特別任務をくれてやる」

言いつつデスクに投げてよこした資料をアンヌが拾い上げる。
突如、彼女の蒼い瞳に氷より冷ややかな輝きが宿った。
「生活委員会提供の最新の出欠統計だ。学園広報なんぞに掲載される加工済みの奴じゃない、生のな。そいつを見ればわかるように、前年度後期から現在にかけ、学園全体で無断欠席件数が加速度的に増加している。特に昨年度末には出席日数が足らず留年した者が相当数に及ぶ。この由々しき問題の実態を調査してもらおうか」
ドーセットのその言葉に、まだ資料へ目を通していないＪＪも、彼女の眼光の変化の理由を察した。
「……任務内容は把握しました。それで、本捜査を遂行するにあたって、ご許可いただける投入人員規模は？」
感情を押し殺しながらアンヌが任務遂行条件を確認する。
「本件は非常に繊細な問題だ。初動から大動員してブン屋にでも嗅ぎ付けられてみろ。学園の風紀紊乱（びんらん）の有様を白日の下に晒すことになる。従って一定の目処が立つまでは貴様ら二名のみの専任任務とする。増員は相応の確証を得てからだ。異議はあるか？」
彼らに拒否権がないことを承知の上でドーセットが確認した。
強権を盾に精神的余裕をやや取り戻した彼は、葉巻入れ（ヒュミドール）から新たな葉巻を取り出すと、鼻歌交じりにシガーカッターで吸い口の封葉（ラッパー）を切り落とした。
「……いえ、承知しました。ですが代わりに各委員会上級職への協力要請をご許可願います。レベル四以上の秘匿情報アクセス権保有者に限れば、ご懸念の機密漏洩の恐れもないかと愚考します」
（ほう……）
ＪＪはアンヌの交渉手腕に感心した。下された不利な捜査条件を従容と受け入れつつも、制約が課せられた理由である機密保持性を逆手に取り、限定的ながらも外部支援許可を要求するとは。自ら先に挙げた名分だけに、ドーセットもこれは拒否しにくかろう。
「……まぁ、いいだろう。だが現段階では統治会ならびに公安委員会への協力要請、および捜査情報の開示はこれを禁じる。当該組織にはその必要が認められた際、俺が直接折衝に当たる。いいな？」
やり込められた感覚に顔を苦々しく歪ませながらも、ドーセット上級保安官は強く念を押した。
「拝命しました。早速捜査に取り掛かります。失礼しても？」
アンヌは言下に答えた。条件交渉が終わったとなれば、こんな場所には一刻たりとも用はないと言わんばかりの冷めた声だった。
「構わん。さっさと行け。……ああ、ちょっと待て、ＪＪ」
「……なんでしょうか、上級保安官殿？」
面倒な響きにＪＪはげんなりとした顔で振り返った。
「貴様、何年居座ったら満足する気だ？　阿呆過ぎて単位が取れんのなら俺が統治会の連中に頭を下げてでも卒業させてやる。貴様を厄介払いできるなら安いもんだ。その気になったら教えてくれ」
アンヌに上手くやり込められた腹いせか、先刻のやりとりをまだ根に持ってか、ドーセットが嫌らしい笑みを投げてよこした。
「ご親切様で。ですが遠慮しときましょう。閣下もぼちぼちご退官でしょう？　あんたと肩を並べて仲良くご卒業なんざ、ご免被りたいですからな。なに、お互いあと一年足らずの辛抱ですよ、閣下」
嫌悪の響きを込めて切り返すと、ドーセットの顔が見る間に再点火した。手の中の葉巻に引火するかと思われる程の勢いだった。
「とっとと失せろ、この万年主任衛視！　せいぜい手柄の一つも挙げてくるんだな！」

シーン２／捜査開始

ＪＪたちが退出した途端、扉の向こうに何かが叩き付けられ砕け散る音が聞こえた。デスク上にあった硝学製硝子の灰皿だろう。
「やれやれ。一組織の長としては、せめて我々の足音が消えるまで癇癪を抑える程度の威厳と分別と忍耐力は欲しいもんですな」
「先輩……、あまり挑発しないでください。冷や冷やしましたよ」
本部の廊下を進みつつ、アンヌが苦笑混じりの溜息を漏らす。

「そいつは失敬。ところで分別といえば、いい加減『先輩』扱いは辞めていただけますか、上級衛視殿。あんたはとっくに俺の上司なんだ。いつまでもそれじゃ他の部下に示しがつかんでしょう？」
「……許せ、つい、昔の習慣でな。気をつけよう」
「まあ、奴のように地位を笠に着られても困りますがね」
　言い交わしつつ微笑した二人の顔が、俄に引き締まった。
「しかし……。今さら何をか言わんや、という話でしたな」
「新年度に入り最高幹部会が開かれたばかりだ。大方、統治会や公安にでも突き上げを喰らったのだろう。わざわざ接触禁止を明言するあたり底が知れるが、組織の長の無能は冗談事では済まんな」
　二人の声の端々には今や抑えがたい怒りの色が滲んでいた。
「尻に火がついてやっと重い腰を上げたってとこですか。どうせならもっと早くに奴の汚いケツを炙ってくれてたらと思いますよ」
　何ヶ月も前にその兆候を見いだし、彼女らが度々上申した捜査計画書を握りつぶしたのは、他でもないドーセット自身だった。
　上級衛視へと着実な昇格を果たした後も実績を重ね、下級衛視たちの信望も集めるアンヌへの警戒心と嫉妬故か、それとも単なる怠惰故か。上級保安官は何かと理由をつけてはその上申を退けた。
　もっと早く対応に踏み切れていれば今回程の大規模留年者は出さずに済んだかもしれない——そう思うと悔やまれてならない。
　語弊はあるが、話が一般学生の留年に終始するならまだ良い。
　より深刻な問題は、公式には存在していないはずの二級学生にあった。彼らは規定単位を失うことでその仮初めの学籍を喪失する。それは即ち学園内での自らの存在その物の消滅を意味していた。
　学生寮の居住権を失った彼らは、自然、落第街の奥底へと沈む。そうなれば再び学園の表舞台へと浮かび上がる目はまずない。
　現代の奴隷と称される二級学生以下の存在と成り果てるか、無法を働く違法学生（イリーガル）と化すかの、二つに一つだ。どちらに転んでも、それは学園の暗部、闇の勢力の拡大を意味した。
　実際、年度をまたいで行方知れずとなった元二級学生とおぼしき学生は千人を超すものと目されている。
　事態の悪化をただ指をくわえて座視しなければならなかった彼らは、今日までひたすら忸怩（じくじ）たる想いを募らせていた。
「だが、いかなる経緯にせよ捜査権限が与えられたのは僥倖（ぎょうこう）だ。これでようやく関係各所に正式な協力要請が通せるというものだ」
　いつでも捜査を開始できるよう、彼女は各方面に非公式な根回しを行ってはいた。だが公式な協力を引き出すには、相応の権限が必要だった。今回の任務発令に伴い、彼女の風紀用携帯端末には、それを証明する捜査権保有情報が送信されているはずだ。
「さて、どこから手をつけるとしますかね」
　実のところ、無断欠席問題の直接原因に関しては、彼らの業務の合間を縫った地道な調査により、おおよその目星はついていた。
「無断欠席常習者人数の推移と、我々が注視していた風紀警察の路上泥酔者検挙件数には、やはり明確な相関が見て取れる。まずは両データを精査し、重複者の抽出から始めるとしよう。保健委の緊急搬入記録まで広げれば該当者は更に増えるはずだ。彼らの欠席日前後の路面機関車の乗降記録を追跡すれば、生活パターンやその行動範囲も把握できるだろう。過剰飲酒増加と無断欠席問題の因果関係は、それらの情報から概ね立証可能なはずだ。だが——」
「問題は、大規模な泥酔者を生み出す程大量の高濃度アルコール飲料が、なぜこの学園内に出回っているか……ですな」
「その通りだ」
　学園内に流通している酒類は、学生向けに度数調整が施された低量アルコールか、疑似アルコールが大半を占める。そんなアルコールもどきでは泥酔する前に腹が膨れるのが関の山だ。
　高学年生や教員向けとして『本物』のアルコールが輸入されてはいるが、運輸委員会が流通量を厳しく制限している。その上、特別関税が掛かるため、学内ではそれなりに値の張る高級品となる。
「運輸委員会の一部が関与すれば確かに密輸は可能だろうな。だが

問題の規模や対象者を勘案すると、それが主体とは考え難い」
「……ですな。例え関税抜きで正規価格より安く提供できるとはいえ、原価や密輸の手間代以下にゃ、どうしたってならん道理です。二級学生がおいそれと痛飲できる代物じゃあないでしょうな」
「とすれば……やはり、密造の線か」
「恐らくは。そちらの線は自分が探ってみましょう。上級衛視殿は先ほどの線から因果関係の立証を進めていただけますか？」
「別行動を取るというのか？」
風紀警察においても捜査の基本は二人一組のバディ制にあった。単独行動では万が一捜査員の身に不測の事態が起きた際、対処が取れないからだ。だが、JJは今回その鉄則を破るという。
「なにしろ捜査員が我々だけですからな。一緒に動いてたんじゃ埒が開きません。ま、情報処理要員程度なら各委員会も都合つけてくれるでしょう。それに自分はどうも書類仕事って奴が苦手でして」
風紀警察の前身である風紀委員会時代から奉職する彼が、一向に主任衛視から昇格しない一因に、捜査手続きでの横紙破り——換言すれば、組織の枠組みからはみ出した独断行動にあるともいえた。
だが、それが時として有効であることは、これまで彼と長らく行動を共にしてきたアンヌもよく知るところであった。
今回は彼の言う通り、正攻法だけでは埒が開きそうにもない。
「……わかった。ではそちらは主任衛視に任せよう。だが、定時報告は欠かさないように。よろしいか？」
「無論です。それじゃ、早速取り掛かるとしましょうかね」

シーン3／機関酒場（エンジン・バー）

学生街の一隅にひっそりと佇む機関酒場（エンジン・バー）がある。
その店内は音楽演奏機関（ミュージック・エンジン）から流れ出す、南仏特有の賑やかな楽の調べで常に満ちていた。
静かに歓談するには少々不向きだが、聞き耳を立てられたくない類の会話を交わすには、むしろ好都合な店といえる。
口開けの時間だけに客の数はまだまばらで、テーブル席に一人とカウンター席に一人がいるだけだ。カウンター席の人物が待ち合わせ相手であると認め、JJは隣のスツールへと腰を下ろした。
「待たせたか」
「それほどでもないさ。まだ一杯目だって空いちゃいない」
カクテルグラスを軽く掲げて応じたのは一人の女子学生だった。言葉通り杯の底には薄緑色の液体が一口分だけ残されている。
無言でJJを迎えた店主が彼の前にコースターを差し出した。
「こいつは俺につけといてくれ。あと、俺にも同じ物を」
JJが女性のグラスを親指で指すや、彼女は残りをくっと呷り、空になった杯を店主の側に差し返した。
「あたしにも、もう一杯。ここまでは彼持ちで」
「はっ。ちゃっかりしてやがる」
「そうでもなきゃこの商売、務まりゃしないさ」
くすりと笑う彼女の髪が小さく揺れた。癖の強い灰生成り色（グレージュ）の髪は、本人も始末に負えず跳ねるに任せていると見える。フレームの細い眼鏡を小鼻にかけ、青いシャツの上に裾丈の長い男性用ベストを羽織る姿は一見少年風（ボーイッシュ）な印象を与えるが、それが逆に彼女の整った顔立ちの奥の女性らしさを際立たせていた。
楽の調べにシェイカーの躍るような攪拌音が伴奏を始める。
程なくして薄緑色の液体に満たされた杯が二人の前へと静かに差し出された。気泡で薄く白みがかった液面に細かな薄氷が煌めく。
JJはグラスの脚（ステム）をつまむと、一口流し込んだ。
果実シロップ（コーディアル）の甘みの中に緑柑橘（ライム）特有の酸味が広がる。学生用低量アルコールがベースだが、隠し味程度に『本物』を混ぜ込んでいるのか、ジンらしい松の臭いとキックもそこそこ感じられた。
「なんだ。ジン・アンド・ライムか、こいつは？」
「いや、ギムレットさ。同じ寄宿学校（パブリックスクール）出の悪い先輩に教わってね。確かに元は英国海兵（ライミー）が呑むような代物だけど。こうすると、ちょっ



と別物みたいだろ？」
「俺にはこの手の酒の味の違いなんざ分からん。だが、いかにも お前ら英国人（ジョンブル）が好きそうな酒ではあるな」
「英国人って呼ばないでくれるかな。前にも言ったろ、あたしは合衆国シカゴの生まれだよ。ま、確かに育ちは英国だけどね」
「大差ねえだろ。子は親に似るもんだ」
「言ってくれるね。合衆国を取り上げた産婆はあんたら（フランス）だろ？」
「産婆にゃ子供（ガキ）の躾の面倒までみる義理はねえわな。おまけに厄介な病気（革命）まで感染（うつ）されて、こっちはいい迷惑だ」
「それこそ自業自得って奴さ」
　毒舌を交わす間にも二人は杯を傾ける。こうして喉と舌とをしばし潤してから、ＪＪが本題を切り出した。
「ま、戯れ言はおくとしてだ。頼んでいた件はどうだ、レイ？　わざわざ呼び出したからには、収穫はあったんだろうな？」
　レイ——レイチェル・チャンドラーから連絡を受けたのは、彼らが本格調査に乗り出してから一週間目となる今日の午後だった。
　彼女は第一報道部に新聞記者として所属する傍ら、個人的に情報屋としても活動しており、ＪＪは彼女の常連の一人だった。
「もちろんさ。でも……、よかったのかい、こんな案件あたしに任せてさ。情報管制が敷かれてるんだろ？」
　彼女の様な情報屋は便利な存在だが、時としてこちらも手札を晒さざるを得ない。いわば諸刃の剣だ。機密漏洩の危険性を承知で接触を図る者は、今の風紀警察にはＪＪの他まずいないだろう。
「事態収拾の目処がついてからなら、好きに書いてくれて構わん。その辺の勘所は弁えてるだろ」
「信用されてると思っておくよ」
「下手打つタマならとうに縁も切れてるさ。で、収穫ってのは？」
「密造の線、恐らく間違いないね。去年の秋口から冬にかけて主要穀物部（メジャー・グレイン）の倉庫火災が相次いで起こったのは覚えてるかい？」
　主要穀物部とは学園内の穀物需要の大半を担う、大手部活（ビッグ・テン）と称される有力部活（クラブ）の一つである。
「ああ、去年の冬は妙に多かったな。おかげで未だにパン代が高騰したままだ。だが、まさか……そいつが？」
「そのまさか、さ。倉庫には大量の備蓄用穀物——小麦とか大麦なんかが貯蔵されてたはずだけどね。実は出火前に倉庫の中がほとんど空だったんじゃないかってネタがあってさ」
「横流しの証拠を消すために倉庫ごと燃やした、か……。確かにありそうな線だが、情報の確度は？」

「保健委員会消防局の最古参(ベテラン)の勘って奴さ。倉庫いっぱいに穀物があったにしちゃ、火勢も煙も少なすぎたってさ」
「なるほど、な……」
　信じるに値するネタだと風紀警官としての長年の勘が告げていた。
　だが同時に。それが本当だとすると、大手部活の内部、それも相応の実力者に一連の犯罪への協力者が存在していることになる。
（いや、大手部活だからこそ、か）
「で、消えた穀物の行方は？」
「さすがにそこまではね。後ろ暗い物を隠すなら落第街ってのが常道だとは思うけど、確かなネタはまだ何も。調査は続けるよ」
「助かる。ここまでの情報料は？」
「つけとくよ。後で表稼業でも回収させてもらうしね。もっとも、そのためにはちゃんと真相解明してもらわないといけないけど」
「信用払いなんて珍しいな。どういう風の吹き回しだ？」
「ん。ま、ちょっとね……」
　レイが視線を杯に落とし、言葉を濁した。こんな歯切れの悪い彼女はＪＪもあまり覚えがなかった。だが、理由を訊いたところではぐらかされそうな気配も感じ、敢えて触れずにおいた。
　それに、聞きたいことはもうひとつある。
「ところで、レイ。後ろのちっこいのは、お前の連れか？」
　振り返りもせず背後のテーブル席を親指で指した。そこにはレイよりも年若い——あどけなさすら残した少女が座っていた。
「ああ。よくわかったね」
「なんだ、今さら俺を試してんのか？」
「そんなつもりじゃないさ。アナベス、こっちおいで」
　レイがスツールの上で身を捻り、背後の少女を手招きした。
「報道部の新入りか？」
「そうじゃない。ま、簡単に言えば押しかけ弟子って奴かな」
「初めまして。ジャン・ジャック主任衛視殿だね。僕はアナベス・マードック・Ｊｒ。アナベスって呼んでくれて構わない」
　二人の前に歩み出た少女は、ＪＪに握手を求めた。
　自動蒸気二輪用ゴーグルをヘアバンド代わりに押さえた金髪の下で、薄く翠がかった碧眼が輝いていた。好奇心の強そうな目だ。
「情報屋志望だ？　やめとけ、割にあわんぞ」
　差し出された手を無視し、ＪＪは眉をひそめながら忠告した。
「本当の目標は探偵部設立さ。で、今はその準備中。手始めに報道部にコネが欲しくて調べてたら、レイ先輩が副業で情報屋開いてるって小耳に挟んでね。修行も兼ねて弟子入り志願したってわけ」
「やれやれ、探偵小説かぶれと来たか。だが、新入早々レイの裏家業に辿り着いただけでも、まあ大したもんだ」
「あたしも少し驚いた。案外化けるかもしれないし、あたしも今年で卒業だからね。後釜にどうかなって思って……必要だろ？」
「そりゃそうだが……。こいつはちょっとばかし目端が利くだけで務まるもんでもねえからな」
「だから尚のことさ。少し様子を見てやろうと思ってね」
「様子ねえ……」ＪＪが胡乱げな目をアナベスに向ける。「で、さっきから修行がてら聞き耳立ててたってわけか、嬢ちゃん？」
「アナベスだってば。それに何も聞いちゃいないよ。それが紹介してもらうための条件だったからね。正直、興味はあったけどさ」
　実際、彼らの会話をこの店の中で盗み聞きするとなれば、盗聴機関か異能が必要だろう。
　だが、彼が知りたかったのは聞こえたかどうかではない。
「ふん、ひとまずは合格だな。情報屋と客の間にも最低限のルールがあるってことを、一応は弁えてるようだ」
「ホント？　やった！」
「お眼鏡に適ったなら幸いだ。せいぜい育ててあげてよ」
「ちょっと待て、俺に子守させるつもりか？　お前の弟子だろ？」
「よろしくね、パパ？」
　ＪＪの腕に抱きつきながらアナベスが悪戯っぽく笑った。
「誰がパパだ？　お前みてえなでけえ子供(ガキ)がいる歳じゃねえ！」

「小さい子ならいるってことかい？　隅におけないなぁ」
「いるかっ！　いちいち揚げ足取るんじゃねえ！」
「もう、パパＪＪったら、ノリ悪いなぁ……」
「紹介はそんなもんでいいだろ。ま、という訳だから。これからは同席させていいだろ、ＪＪ？」
「ちっ……好きにしろ。お前もいつまでひっついてる気だ？」
　アナベスはＪＪの腕を放すとレイを間に挟んだカウンター席に着座した。些かペースを狂わされたＪＪだったが、紙巻き煙草に火を点けて一服すると、元の神妙な表情を取り戻した。
「で。仕切り直したってことは、まだ何かあるってことだな？」
「まぁ……ね。《バグズ》モラン一家は知ってるだろ？」
「ああ、確か落第街の北東地区を根城にする違法学生団（ギャング）の一つだろう。弱小中の弱小勢力だが。それがどうした？」
「情報が古いね。ここ数ヶ月の間に落第街の勢力図は激変したんだよ。今じゃモランが落第街の違法学生を束ねる顔役だって話さ」
「なんだと……？」
　ＪＪとて日頃から落第街の動静に注意を払っている。学内の問題の大半は落第街から疫病の如くに広がるのだ。どれだけ警戒してもし過ぎいうことはない。その彼がそんな大変事を見落とすとは。
「ま、無理もないか。お定まりの抗争ひとつ起こさず、落第街の違法学生団のほとんどを傘下に収めちまったって言うんだからね」
「馬鹿な。いったいどんな手品を使ったんだ？」
「ボス同士の会談で平和裡に……って噂さ。眉唾だけど、実際に血が流れてないことが、その証明とも言えるね」
「簡単に他の組織に頭を垂れる程、殊勝な連中じゃねえだろう」
　違法学生団は大小あるが、一家のボスともなれば皆一筋縄ではいかない。傘下に入れと言われて大人しく従うはずもない。
「相応の利益誘導があれば別だろ。件の密造酒がもたらす莫大な利益がそれだとは考えられないかい？　密造酒が出回り始めたと目される時期と、《バグズ》モラン一家が勢力を急伸張させ始めた時期の一致が、ただの偶然で片付くとは、あたしには思えないんだ」
「確かに、な……だが、それでも不十分な気がしてらならねえ」
「何が引っかかるってのさ、パパ？」
　レイの向こうから、目を丸くしたアナベスが乗り出してくる。
「パパじゃねえっての。ま……なんだ。一口に利益誘導と言うが、金だけじゃ解決できねえ問題ってのも色々とある。勢力下に置く組織の数が増えるほど、その利益調整って奴は難しくなるって寸法だ。殊に落第街って狭っ苦しいシマの中じゃな。それぞれの組織の面子を潰さずに納得させるにゃ、よっぽどの器量が必要だろうな」
「そうなんだ。でも、それって単にそのモランっていうボスが、もの凄い人望（カリスマ）の持ち主だってことじゃないの？」
「入学したてのお前は知らんだろうが、《バグズ》モランって奴は何年も前から落第街の片隅でくすぶってたような野郎だ。そんな輩が今さらいきなり大物に化けるとは、正直考えられんな」
「確かに……ね。それでも、実際に彼はあの暗黒街の顔役に上り詰めた。それだけは、動かしようのない事実さ」
　レイの声がどこか影を帯びて聞こえた。機関灯（エンジンライト）の照り返しの加減だろうか、その瞳が炯々と輝いて見える。
「どうした？　お前にしちゃあ、珍しく妙に熱が入ってないか」
　レイはその質問に黙して答えず、カウンターの向こうでグラスを磨いていた店主へと視線を逃がした。
「……最後にもう一杯、同じ奴を。『本物』だけで」
　店主は黙って肯くと、冷蔵機関（クーラーエンジン）からとっておきのロンドン・ジンを取り出し、氷をきつく詰めたシェイカーへと注いだ。

シーン４／情報交換

『なるほど、な……』
　電信通信器（エンジン・フォン）の向こうからアンヌが得心がいったという声を返してきた。機関酒場を後にしたＪＪは仕入れたばかりの情報を取りまと

め、アンヌに報告を入れたのだ。
『横流しされた原料の行方だが、必ずしも落第街とは限らんな』
「ほう。と、言いますと？」
『醸造にせよ蒸留にせよ酒造には相応の設備が必要だ。アルコールの発酵臭だって簡単に隠し切れるものではない。下手に地下落第街に造るなら、元からある物を使った方が余程楽だし、足もつかん。主要穀物部が噛んでいるとなれば他の部活だって怪しいものだ』
「なるほど……木を隠すには森の中って奴ですか。確かに蒸留プラントを保有する科学系部活はひとつやふたつじゃありませんからな」
『そういうことだ。それに、だ。もし仮に運輸委にも協力者がいたとしたら——誰にも怪しまれることなく堂々と学園内を移動できるだろう。原材料の搬入も、完成品の搬出も、思いのままだ』
「しかしそいつが本当だとしたら、尻尾を掴むのは骨ですな。学園内を走るトラックを全部臨検するってわけにもいきませんし、明確な証拠がなきゃ蒸留プラントの強制捜査だって難しい」
『まあ、な。そもそも、これは私の推測に過ぎんしな。だが、もし私が連中の立場だったら、そういう体制を作るだろう』
　電信通信器越しに、アンヌの小さな溜息が微かに聞こえた。
　充分な人手さえあれば可能性のある施設に捜査員を張り込ませることで、何らかの手がかりを掴めるかもしれないのだが。
　現況、ドーセットが捜査員の増員を許可するとは思えなかった。情報屋からの非公式情報が推理の立脚点とあっては尚のことだ。
「で。そちらの首尾はいかがです？　特に足取り調査の方は」
『初期においては、旧独立学生居住区駅——つまり落第街に乗降が完全に集中していた。密造酒の提供場所が、その時点で落第街内に限定されていたと見て間違いはないだろう』
「というと……、最近は違うってわけで？」
『ああ。ここ二ヶ月程前から、対象の足取りが学生街へ拡散し始めている。比率としてはまだ低いが、密造酒の提供場所が落第街外にまで広がり始めていると見るべきだろうな』
（やれやれ……こりゃ早いとこ、ケリをつけねえとな……）
　事態は思ったよりも深刻化していると見えた。
　敵は学園有数の大手部活を操り、落第街の大半を手中に収め、そして今また学生街へとその魔手を延ばそうとしている。
「で、他に何か手がかりになりそうなものは？」
『ああ、そうだ。保健委から入院患者の中に幾つか気になる症例があると報告があってな。日中、それらの患者と面会していた』
「……どういうことです？」
『身体的症状は確かに重度アルコール中毒患者のそれなのだが、外界からの呼びかけに何一つ反応がない。以前、半ば廃人と化したアル中患者を見たことがあるが、支離滅裂なことを口走るなり、暴れるなりしたものだ。問題の患者は、それとは全く様子が違う』
「ほう……」
『そうだな……こんな例えは好かんが、まるで魔術か何かで魂を抜かれてしまったかのような、そんな印象すら受けた』
「それも、例の密造酒の影響ですかね？」
『可能性は高い。他の病院にも照会したところ同様の患者が多数確認できた。背後に異能が関与している可能性も考慮して、中央病院で今、精密検査と異能鑑定を実施しているところだ。追って結果が出るだろう。主任衛視はどうする？　こちらに合流するか？』
「いや、密造酒とモラン一家の関係について確証が欲しいところです。自分は少しばかり落第街を探ってみることにしますよ」
　密造酒が客に提供される現場を一度直接確認してみたかった。
　まだ宵の口。落第街はむしろこれから盛りを迎える時間だ。数多ある酒場には大勢の客が興を求め押し寄せていることだろう。
『待て、《バグズ》モラン一家が違法学生団を糾合したのが確かなら危険性は今までと比較にならない。単独捜査は許可できん』
　ただでさえ一九〇六年当時は違法学生団の勢力が強く落第街内部に風紀警察の手が及びにくい状況だった。その上、それら組織が結束しているのなら、彼女の言う通り極めて危険な状況と言えた。

「すぐ戻ります。なに、ヘマはしませんよ。伊達に十何年いるわけじゃありませんしね。またこちらから連絡を入れます。以上」
『待て！　主任衛――』
　言い終わるのを待たず、彼は電信通信器の交信を終了した。元より独断行動の多い彼だが、普段の彼なら、ここまで無謀な行動は決断しなかったに違いない。彼を駆り立てたのは、刻々と悪化して行く状況への焦燥か、足枷を課せられた捜査体制への苛立ちか、落第街の勢力変化を見落としていた自分の失態への憤り故か。
　ひょっとすると、先刻レイが見せた《バグズ》モラン一家への不可解なこだわりも、その後押しをしていたのかも知れない。
　だが、彼とて流石に風紀警官姿のまま乗り込むつもりはない。学生街の古着屋でくたびれたトレンチコートを手に入れ、風紀警察学生街分署に官給品のコートや、己の身分が割れそうな装備品を預け渡してから、最寄りの路面機関車駅へと向かった。

シーン5／落第街

　薄暗い、落第街の地下街路。その片隅の一角。
　地下墓地を思わせる、迷宮の如きその果ての果て。
　壁に背中を預けながら、青年は、静かに声を掛けてきた。
「ミスター。ムッシュ。こんなところまで迷い込んで来るとは」
　純白のコートに身を包んだ青年だった。開いた襟元からはオリーブ色のベストと白いネクタイが覗いている。いずれ劣らぬ上等な誂え物であることは、路地の暗がりの中でも一目瞭然だった。
「ここは学園都市の吹き溜まり、その更に奥底だ。まともな人が来るところじゃあない。後ろ暗い自覚があるなら、別だが」
　入念に櫛を入れたと見える艶やかな長髪にしても、その物腰や口調にしても、粗野なところは何一つとして見受けられない。
（違反学生団のチンピラや、子飼いの異能学生って風じゃねえな。あの手の連中独特の饐(す)えた臭いがしねえ。だが――）
　どこか貴族然とした堂々たる風格の持ち主ではあったが、
「言葉を返しゃあ、お前もそのどちらかって意味だな？」
「無論だ。ここを寄る辺とする僕らの誰一人とて例外ではない」
　端正な顔に諦念にも似た一種悲壮な陰がなぜか透けて見えた。
　落第街を根城とする違法学生団以外の勢力。つまり彼は――
「革命学生に事情通がいると聞いた。お前さんのことか」
「なるほど、新しい顧客という訳か。僕の情報は高く、信憑性は薄い。まっとうじゃないものだが……それでも、買うかい？」
　闇雲に落第街を彷徨っていた訳ではなかった。以前、レイから落第街の奥深くにも情報屋がいるという話を聞いたことがある。この辺の路地裏に現れるという噂だったが、どうやら当人のようだ。
《バグズ》モラン一家の店を探している。昨日今日傘下に入ったような新参(にわか)じゃねえ。連中の古巣と言えるよう場所をな」
　ＪＪが求める情報を告げると、青年の目がすっと細められた。
「どうやら今夜は珍客を迎えたと見える。風紀警察の者か？」
「やれやれ。そう簡単に見破られたとあっちゃ立つ瀬がねえな」
　トレンチコートの胸元をばさばさ煽ぎながら苦笑し「隠し切れない気品って奴のせいか？」と口にしかけて、思い留まった。
　青年の前でそれを口にするのは、軽口にしても滑稽に過ぎた。
「確かに外見も口調も、この街に良く馴染んでいると思うがね」
　コート以外に手を加えてない身としては複雑な気分だった。
「痛み入るよ。どうして見抜けたのか後学のために知りたいね」
「落第街の人間にモランの情報を欲する者は最早いない。なにしろ我々の領域の他はほぼ彼の掌中にある。と、なれば後は官憲しかあるまい。もっとも我々と交渉を望む官憲はきみが唯一だろうが」
「なるほどね。で、風紀の犬にゃ情報は売れないってか？」
「いや。同志の利益に反さない限り、僕は取引相手を選ばない。きみの目的が、あのモラン一家にあるのならば、尚のことだ」
「革命学生にとっても、連中は目の上の瘤と見えるな」
「我々とて学園秩序そのものの崩壊を願っている訳ではないという

ことだ。彼の持ち始めた力は、学園にとってあまりに危険だ」
「そんなものかね。で、肝心のネタはいつ教えてくれるんだ？」
「北東十八番街区の奥にある『モリアーティの店』に行くといい。彼らのもぐり酒場(スピークイージー)でも最古の店だ。無論、身の保証はできないが」
「はん、モランにモリアーティと来たか」
　それは英国のホームズとかいう名探偵の自伝的伝奇小説に出てくる、秘密のベールに包まれた悪役の名前だったはずだ。
「つまり、その手の偽悪趣味をこじらせた連中の巣窟ってか？」
　言葉の意味を理解して、青年は初めて表情を崩し、苦笑した。
「いや、ジム・モリアーティーというのが店主の名だ。モラン同様、合衆国から流れてきた。共にアイルランド系移民だという話だ」
「アイルランド系移民……ね」
　合衆国移民の中でもシチリア系と並んで血の気の多い武闘派揃いだとのもっぱらの評判だ。合衆国で血で血を洗う抗争を繰り広げ、相手組織を皆殺しにした例も珍しくないという噂だった。
「せいぜい首を洗っておくとするかね。情報料は幾らだ？」
「ゴールド三枚……と言いたいところだが。一枚としておこう」
「まったく。こっちの懐具合までお見通しかよ」
　ＪＪはトレンチの隠しから虎の子のゴールドチケットを抜き出して青年に手渡す。入れ替わりに青年が彼の手に何かを握らせた。
「世話になったな。もう会うこともないかもしれんが」
　踵を返し、元来た道へと戻ろうとしたＪＪの背に、
「……モラン一家にもだが、背中にも気をつけるべきだろうね」
　情報屋の青年が、そんな意味深な言葉を投げてよこした。
「物好きな奴だ。風紀の犬に忠告しても得にはならんだろ？」
「顧客は大切にする主義だ。無論、同志の利に反さない範囲で」

シーン6／追想　レイチェル・チャンドラー

『本物』の酒を呑んだ日には、必ずあの頃のことを思い出す。
合衆国はシカゴのアイルランド移民街であたし――レイチェル・チャンドラーは生まれた。
いつも薄暗くて、饐(す)えた臭いがこびりついた街だった。
父はアイルランド系移民の子で、母も新たにアイルランドから合衆国へと渡って来た女(ひと)だった。
鉄道技師として働く父は、移民の中では恵まれた境遇にあったのだと思う。昼間の父は勤勉実直と敬虔さを絵に描いたような男だったというが、あたしは父のそんな姿、一度も見たことなかった。
責任の重い仕事だったのか、父の姿が家にあることは希だった。
そして、たまに姿を見たかと思えば、いつも必ず泥酔していた。
致命的なまでに酒癖の悪い、最低の男だった。呑んだくれた時は普段抑えこんでいるものを爆発させるように荒れ狂った。
ある日から急に父が家に入り浸るようになった。理由を母に聞いたことはないが、恐らく飲酒癖が露顕して職を失ったのだろう。
その日から父の母への暴力は日常茶飯事となった。あたしには部屋の片隅で震えながら嵐が過ぎるのをじっと待つしかなかった。
けれど。いくら待ったところで、嵐は通り過ぎやしなかった。
あたしには幼なじみの男の子がいた。彼は、母に振われる父の暴力に怯え啜り泣くばかりだったあたしを、いつも慰めてくれた。
移民街の中でも貧しい家の子でいつもぼろぼろの服を着ていたけれど、彼の藍色の瞳は移民街の何よりキラキラと輝いて見えた。
たぶん、あたしはその子のことが好きだったのだろう。
けれど、別れの日は突然やってきた。
七歳になった頃、父の拳は遂にあたしにまで向けられた。
その日も道端で癇癪を起こした父にあたしは殴られていた。そこへ通りかかった彼が、あたしを助けようとして父に突進した。

「レイを殴るんじゃねえ！」
　年端もいかぬ子供が身体ごと突っ込んだところで、大人にとっては大した衝撃ではなかった。例えそれが泥酔した相手でも。
「んだぁ、手前ぇは？　自分の餓鬼ぃ殴ってぇなぁにが悪ぃ？」
　怒りに血走った父の目が、腰にしがみつく彼を見下ろした。
「自分の子供を殴るような奴は屑だ！　そんなの男じゃねえ！」
「そぉんじゃぁ、手前ぇの餓鬼じゃなきゃぁいいんだなぁっ！？」
次の瞬間、拳が容赦なく振り下ろされた。母もあたしも酔った父に反抗したことはなかったから、余程腹に据えかねたのだろう。
「父さん、やめて！　あたしを殴ってくれていいからっ！」
　あたしは必死にしがみついて止めさせようとしたが、激昂して完全に我を失っていた父は、全く聞く耳を持たなかった。
「やめて、やめてっ！　ジョージが死んじゃう！」
　その時だ。騒ぎを聞きつけてやって来た誰かが、父の手首を掴んだ。次の瞬間、何かが眩く閃いてあたしは思わず目を閉じた。
　少しの後、おそるおそる目を開くと、父は引きつけでも起こしたように身体を震わせながら地面に倒れ込んでいた。
　助けてくれたのが誰だったかは覚えてない。ただ、真っ白な服を着ていたような……そんな印象だけが朧気に残っている。
　気が抜けたのか、あたしの記憶はそこで途切れた。
　幼なじみのジョージと父を見たのは、それが最後となった。
　次にあたしが気づいたのは汽車の中だった。母が選んだのは夜逃げの道だった。あたしはジョージの安否を尋ねた。昏倒していたジョージは母が介抱し、彼の家まで送り届けたと言う話だった。
　あたしは彼に別れも感謝も告げることができなかった。
　けれどぐずぐずしてたら父に気取られていただろう。そうなればきっとあたしたちの命が危なかったはずだ。母の判断は正しい。
　あたしたちは英国にいるという母の叔父の家を頼った。なんとか受け入れはもらえたが、肩身を狭くして暮らす日々が続いた。
　寄宿学校へと入学できた時は何もかもから解放された思いだった。苦労して学費を賄ってくれた母への感謝と共に、一人だけ解放された後ろめたさを抱きつつも、あたしは学校生活を謳歌した。
　卒業も近づき将来への不安を抱いていたあたしに一つの奇跡が訪れた。そう、マルセイユ洋上学園都市に招聘されたのだ。
　入学してしばらくが経った。同じ寄宿学校出身の悪い先輩に勧められた酒の味に、いつしかあたしはすっかり魅了されてた。
　所詮、あたしもあの父の子供だということだろう。
　誰よりも酒を憎んでいたはずの自分が、酒から離れられない。
　忘れたいはずの記憶を、逆に求めるように杯を傾けている。
　違う。そうじゃない。思い出したかったのは、あの輝きだ。
　灰色の街の中でたった一つの宝物だった、彼の藍色の瞳。
　母に仕送りするために報道部の活動の傍ら情報屋を始めたあたしの耳に、やがて《バグズ》モラン一家の名前が聞こえてきた。
　落第街に巣くう無数の違法学生団の泡沫の一つとして。
　シカゴのアイルランド移民街の出身であることはすぐに調べがついた。居場所も捜す気ならできたはずだ。時間も手段もあった。
　でも、あたしはそうしなかった。
　もしそれが本当に『彼』だとしたら。
　あの瞳がその輝きを失っているのが見たくなかった。
　いや、違う。
　見せたくなかったのだ。父と同じように酒に憑かれた自分を。
　それなのに、なぜ今さら、あたしは落第街にいるのだろう。
　それなのに……。
「本当にあんたなの、ジョージ……？」
　ジョージ・クラレンス・モラン。それが幼なじみの名前だった。
　あたしは彼の居場所を知るだろう人物を求め裏路地を歩いた。
「ミス。マドモワゼル。こんな場所まで迷い込んで来るとは」
　闇の中から若い男の声が聞こえてきた。
「後ろ暗い自覚があるなら、別だが。きみは、どうかな？」
　暗がりに目を懲らすと白いコートの青年がそこに立っていた。

シーン7／もぐり酒場（スピーク・イージー）

落第街の奥底、機関外灯一つない人通りの絶えた裏路地に、もぐり酒場（スピーク・イージー）『モリアーティの店』への入口はあった。

表通りをけばけばしく彩る機関外灯の反射光だけが、辛うじてその路地に視界をもたらしていた。店の存在を知らぬ者ならば袋小路に迷い込んだと思い、そそくさと来た道を戻って行くだろう。

だが、よくよく目を凝らせば、路地奥の壁沿いに黒塗りの鉄柵が立っていることに気付いたはずだ。

鉄柵に囲まれた石段を降りて行くと、すぐに分厚そうな鋼鉄製の扉に突き当たった。階段の上からは気付かなかったが、脇の壁には小さな機関灯が申し訳程度に明滅していた。

（はん。いかにもって造りだな）

ＪＪが鉄扉をノックすると間もなく覗き窓がスライドし、隙間から鋭い眼光を放つ双眸が現れた。なるほど、脇の機関灯は訪問者を歓迎するための物でなく、こうして品定めするためにあるのだろう。そして招かざる客ならば、扉は閉ざされたままという寸法だ。

「シカゴのアイルランド街から友人に会いにやって来た」

ＪＪが告げた途端、覗き窓がぴしゃりと閉ざされた。

（ガセを掴まされたか？）

一瞬冷やっとしたが、すぐに閂が外される音が聞こえ、内心ほっと胸をなで下ろした。確かに正しい入店の符丁だったようだ。

情報屋の青年に対価の紙幣を支払った時、引き替えに渡された小さなメモには、この店への道筋とこの符丁が記されていた。

鉄扉が重苦しい音と共に開かれ、いかにも用心棒然とした強面の男が姿を現した。そして簡単な所持品確認（ボディチェック）の後、ＪＪを店内へと招き入れた。背後で鉄扉が再び閉ざされる。

「好きな席に座ってくれ」

そこはカウンターに六席ばかりの、ひどく狭い店だった。

今や落第街の違法学生団を束ねるという《バグズ》モラン一家の出発点としては、それはささやかに過ぎるとも思えた。

だが数ヶ月前までは、これが一家の地力（うつわ）だった。

先客が二人ほどいたが、いずれもこの界隈にたむろする違法学生という風体だ。ＪＪは彼らとの間に空席をひとつ空けて陣取った。

「なんにしやす？」

背の低い男がきついアイルランド訛りの英語でカウンター越しに訊ねてきた。彼が店主のジム・モリアーティーなのだろう。

「ウィスキーを。銘柄はあんたのお勧めでいい」

目の前に空のグラスがまず置かれ、簡素なラベルの貼られた瓶から褐色の液体がそこへなみなみ注がれた。止め時を誤ったのか、それがこの店の流儀なのか、溢れ出た酒がカウンターを濡らす。

「アイリッシュか？」

「そうだと言いてぇが、生憎とフレンチでさ」

フランスで産するウィスキー銘柄は皆無ではないが、ほとんど世に知られていない。要するに学園製という意味なのだろう。

つまり、これが彼の探し求める密造酒の現物ということだ。

「銘柄は？」

「月光の雫（ムーンシャイン）でさ」

「月なんざ、生まれてこの方見たことねえ。こんな色なのか？」

機関革命がもたらした煤煙により月が夜空から姿を消して久しい。近年、《隙間》と呼ばれる謎の現象が発生した重機関都市（メガエンジンシティ）の一部で、様々な条件が整った時にのみ観測されるというが、一般の人間にとってもはやそれは空想上の存在だった。

「さあてね。誰も見たことねぇなら、どんな色してても文句言う奴ぁいねぇでしょうよ」

「なるほどな。確かに言ったもん勝ちだ」

話を合わせるように苦笑しつつ、ＪＪはグラスを手に取った。

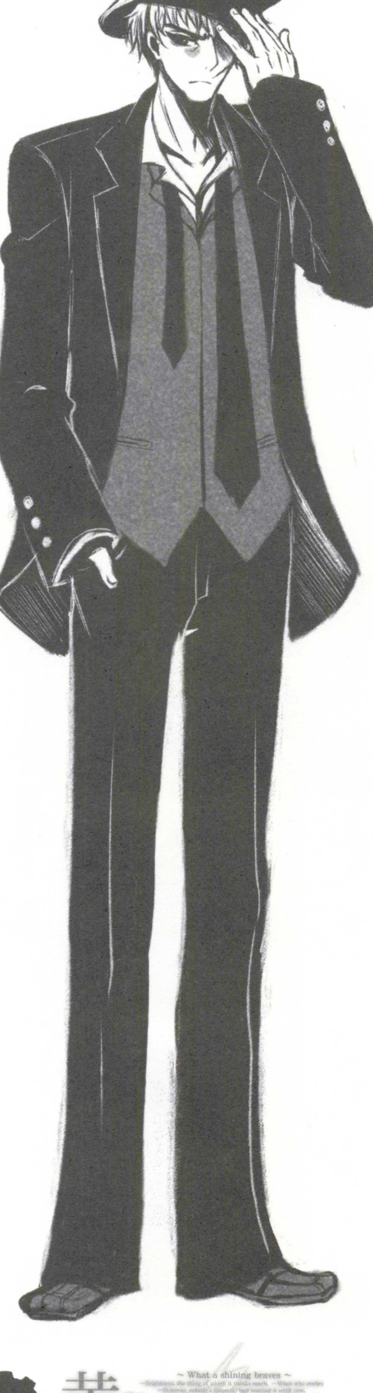
鼻先に近づけ香りを確かめる。樽香は抑えめで生のアルコール臭に近い。熟成が乏しい若い酒という印象だ。その割に色が濃いのは

恐らくカラメルを添加してるのだろう。安酒に良くある手口だ。
「旦那は酒を頭や鼻で呑むクチですかい？」
「久々に『本物』の酒なもんでな。ま、ゆっくり呑らせろや」
　口に運ぼうとした途端、彼の全感覚が強烈な違和感を訴えた。
（こいつぁ……やっぱり黒か？）
　それは長年、風紀警官として活動する間に身についた嗅覚と言おうか。平凡な人間でもたまに他者からの視線を感じ取ることがあるように、彼は異能の発する気配を察知することが希にあった。
　先端科学部が今試作中の携帯式異能検知器が反応する異能特有の何かを、第六感的に知覚しているのかも知れない。
「どうしやした？　うちの酒に問題でも？」
「……いや。せっかく注いで貰ったとこすまねえが、ちょいと野暮用を思い出した。釣りはチップだ。取っといてくれ」
　シルバーチケットを三枚程、カウンターに滑らせ席を立つ。
「まあそう言わず、ゆっくりしていってくだせぇや」
　カウンターの向こうではジムがにやにやと笑っていた。
「もったいねぇな。ぐっと呷っていきゃいいじゃねぇか」
「なんなら、俺たちが手伝ってやろうか？」
　カウンターを陣取っていた客二人が立ち上がり、彼を押し包むように歩み寄ってきた。
「なあジャン・ジャックの旦那。万年主任衛視のＪＪさんよ？」
「ちっ！？」
　先刻承知というわけか。情報屋の青年に売られた可能性が真っ先に脳裏を掠めたが、即座に否定した。彼に名は告げていなかったし、自分を敵対勢力に売ったところで、彼の利は少ないだろう。
　それに、あの青年はそんな手に出ることはあるまいという、根拠のない信頼感のようなものすら覚えていた。
『……モラン一家にもだが、背中にも気をつけるべきだろうね』
　別れ際の青年の言葉が脳裏に蘇る。
（ああ、そうだ。俺を売りたい奴なら他にいるさ）
身に覚えはありすぎた。なぜ今頃になって捜査許可が下りたのか。事件の重大性に反してなぜ彼とアンヌのたった二人にそれが命じられたのか。なぜこいつらが俺の名前や素性を知ってるのか。
『とっとと失せろ、この万年主任衛視！』
　その男の脂ぎった顔がＪＪの脳裏にありありと浮かんできた。
「なるほど……なっ！」
　ＪＪは瞬く間に違法学生の一人の懐に入り左腕を絡め取り、連れの男に向かって投げ飛ばした。それを受け止めた男はカウンターを背にすることで辛うじてこらえた。が、間髪入れずにＪＪが蹴り込むと、二人は一塊となってカウンターを乗り越え、棚の酒瓶を盛大に割り散らしながら沈んでいった。
　直後、横合いからごつい拳が唸りをあげてＪＪに襲いかかった。入り口を守っていた用心棒が放ったものだった。ＪＪは咄嗟に跳び退って躱したが、姿勢が大きく崩れ、左手と右膝を床につくことで辛うじて転倒を免れた。用心棒は無造作に間合いを詰めてくる。
「ちっ！」
　体勢を整え拳を構えようとした瞬間、ＪＪを衝撃が襲った。視界に星が飛び散り、鼻腔に金気臭い刺激臭が広がる。ＪＪの後頭部めがけて酒瓶が振り下ろされていた。ジムの仕業に違いなかった。
（ったく……何が『ヘマはしねぇ』だ。糞野郎が……）
　遠のく意識の中、彼はアンヌへ向けた己の言葉に失笑した。

シーン８／虜囚

　頬に冷たいものを感じ、ＪＪはゆっくりとまぶたを開けた。どこかの床の上に転がされているようだ。身じろぎすると砂混じりの石肌が軽く頬を削った。彼は砂を払いつつ上体を起こした。
　頭の芯に痛みが残っていたが、幸い出血はなさそうだ。
　視界は黒一色に塗り籠められていたが、闇に目が慣れてきた。
　彼の周囲には木箱がうずたかく積まれており、更に奥の壁面には

天井まで届く大棚が設えられ酒樽がずらりと並べられていた。
「密造酒の熟成庫兼保管庫ってところか……」
昏倒している間に運び込まれたのだろう。だが、何のために？
「まだ生かされてるってことは、何か用があるってことかね」
それも時間の問題だろうが、と自嘲気味に口を歪めた。
手足は縛られていない。逃げ場はないという意思表示だろう。
「……ま、あるわけねえか」
懐をまさぐったが、携帯電信通信器（エンジン・フォン）は取り上げられていた。
風紀警官用の専用携帯端末や特殊警棒、鎮圧銃と行った装備品は制式コートと共に予め風紀警察の学生街分署に預けてきていた。
「こうなったら、腹をくくって待つしかなさそうだな」
覚悟を決めると急に煙草が欲しくなり懐をもう一度あさった。
「ちっ。煙草もライターもねえとはな。恐れ入るぜ」
だが相手にしてみれば、倉庫の酒に放火されでもしたら堪ったものではない。当然の対処だろう。
「う……ん……」
背後から呻き声が聞こえた。暗闇の先に横たわる人影が見える。どうやらご同輩がいたようだ。声色からして恐らく女性だろう。
「どこのどいつだ……？」
ＪＪは慎重に歩み寄った。最初に制服のスカートが見えてきた。青いシャツの上に丈の長い男物のベストを羽織っている。癖の強い灰生成り色（グレージュ）の髪が跳ねているのまでを認めて、彼は絶句した。
「レイ……！？　お前、なんだって……！」
機関酒場で別れたはずだ。なのにどうしてこんな所にいる？
「しっかりしろ、レイ！」
深く昏倒しているためか返答はない。ざっと目視確認したが、これといった外傷はなかった。ＪＪは安堵の溜息をついた。
だが、非常にまずい状況であることに変わりはない。自分一人ならともかく、まさかレイまでもが捕えられていたとは。
（腹くくってる場合じゃねえ。なんとか連れて逃げねえと……）
しかし遅かった。倉庫の入口が軋む音に続いて、闇の向こうから複数の足音が響いてきた。直後、強烈な機関灯の明かりがこちらに向けて投げかけられ、ＪＪは堪らず顔の前に手をかざした。
「大仰な歓迎だな。もっと慎ましくしてもらって構わねえんだが」
ゆっくりと目を慣らし、投光機の前に立つ影に目を凝らした。
「今ごろ風紀の犬にブン屋がお出ましと聞いてな。どんな物好きかと面（ツラ）拝みに来てやったが、まさかこんな老犬とはな」
中央に立つ男が口を開いた。ボルサリーノとダークグレーのスーツに身を包み、開襟したシャツにはネクタイを引っ掛けている。
「余計なお世話だよ。お前が《バグズ》モランか……？」
「知ってどうする。明日には魚の餌になるかも知れん身がよ？」
斜に被った帽子のつばの影から飢えた狼のようにギラついた眼光



が一瞬のぞいた。左頬には大きな傷跡が走っているのが見えた。

違法学生団のボスというよりも、本場合衆国のギャングスター——

——それも、一匹狼の殺し屋といった印象だった。

「そうかい。魚が腹ぁ壊さねえことを祈ってるぜ」

「大した肝だな。虚勢だとしても立派なもんだ」

「それで、俺になにか用か？　ただ嬲るためだけにわざわざ生かしておいたってんなら、また随分と悪趣味なことだがな」

「生憎、趣味の悪さは昨日今日始まったもんじゃなくてな。お陰で知っての通り《狂気の（バグズ）》なんて二つ名を頂戴した程だ」

「っ……」

彼の背後から衣擦れの音が聞こえた。息を呑む声も。

「フン。そっちの姉ちゃんもお目覚めか。運の無ぇ奴だ。俺はブン屋ってのが大嫌いでな。こっちの男と一緒に沈んでもらおうか」

ＪＪは慌てて背後を振り返った。しかし、そこには彼が危惧していたような恐怖や動揺の色ひとつ、浮かんではいなかった。

「ジョージ……。やっぱり、あんただったんだね……」

レイが男に向けて静かな微笑を送った。それは、どこまでも深い哀しみの色彩で塗り上げられた、果てしなく虚ろな微笑だった。

「誰だ、お前……？　なんで俺の名を知ってる……？」

《バグズ》モランの不敵な表情が、やにわに崩れた。

「レイ、知ってるのか、こいつを？」

「レイ……、だと？　お前……、まさか、レイチェルかっ？」

二振りの短剣の如く鋭いモランの双眸が、驚愕に見開かれた。

シーン９／詰問

異能鑑定の結果を受け取ったアンヌは風紀警察本部へと急ぎ舞い戻った。じき日付も変わろうかという時間にも関わらず、ドーセット上級保安官は珍しく彼の執務室に在室していた。

「……以上の観点から、一連の問題は落第街を根城とする違法学生団《バグズ》モラン一家の密造酒にあるものと断定いたします」

彼はアンヌがデスクの上に捜査資料を並べるのを、ただ無言で見守っていた。葉巻の頭が彼の呼吸にあわせて明滅する。

「そしてこちらが、保健委員会異能分析班の手による、件の密造酒常習患者たちの精密検査、ならびに異能鑑定の結果です」

報告書に曰く、アルコール成分と密接に結びついた異能因子が飲用者の体内に菌糸様に展張、いわば精神寄生体とも言えるネットワーク網を形成、宿主の精神活動に強力な干渉力を行使することが確認された。またこの異能因子の配列を制御することにより、宿主の精神への干渉に特定の指向性を持たせること——いわばメスメル学的意識の刷り込みを可能とするであろうことが充分予見される。

体内に取り込まれた異能因子は時と共に漸減するも、寄生体の自己修復本能とも言うべき反応が宿主に精神的飢餓感を誘発せしめ、これが強い常習性および禁断症状を引き起こす主因と目せられる。また重度常用者の中に一定率で見受けられる心神喪失状態は、前述の精神寄生体の過干渉に対し宿主の精神が飽和状態に陥った結果であるものと考察され、云々——

ドーセットはその報告書を面白くもなさげに流し読みした。

「本事件は学園に風紀紊乱をもたらすだけに留まりません。学園秩序、ひいては体制転覆をも究極的な目的とした重大異能犯罪です。閣下、直ちに《バグズ》モラン一家への対応行動のご許可を！」

事態の重大性を説くアンヌの発する熱量に相反して、ドーセットの反応はどこまでも冷静、いや冷淡だった。

「……ご苦労だった。今回の調査結果は俺から統治会へ報告する。以後は彼らの裁定を待つこととしよう。対応の要ありと判断されれば、いずれ先方からその要請があるだろう」

「いずれでは遅すぎます！　裁可を求めるなら直ちに折衝を！」

詰め寄る彼女の懐でコール音が響いた。携帯電信通信器からだ。

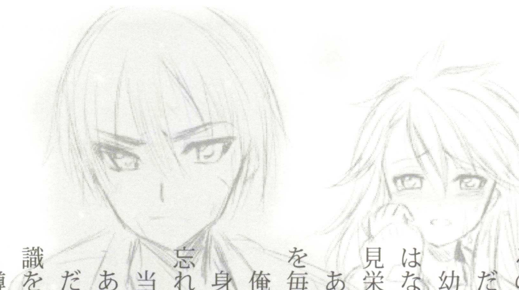
「誰だ？　私は今忙しい。緊急の用でなければかけ直せ」

回線を繋いだアンヌは、苛立たしげに通話相手に告げたが、

「……何だと？　貴様は何者だ！？　待てっ！！」
　通信器から発せられた言葉にアンヌの目が見開かれた。相手は一方的に用件を告げ終えると、通話回線を切断した。
「どうしたね？」
「……匿名の通報です。落第街のもぐり酒場へ潜入したジャン・ジャック主任衛視が《バグズ》モラン一家に捕らえられたと……」
「ふむ……」
「もはや一刻の猶予もありません。閣下、緊急出動の発令を！」
　アンヌはデスクに手をつき、身を乗り出した。
「まあ、待て、ベアール上級衛視。貴官の報告によれば、落第街はその《バグズ》モラン一家とやらの勢力下にあるのだろう？」
　葉巻の煙を悠然と吐き出すと、ドーセットはいつになく上官然とした口調で、諭すようにアンヌに言い聞かせた。
「貴官は、勇み足で違法学生の巣窟に脚を踏み入れた無謀な男一人を助けるために、多くの部下をあたら危険に晒せと言うのかね？」
「では、ジャン・ジャック主任衛視を見殺しにせよと？」
「人聞きが悪い物言いだ。簡単な損得勘定の問題だろう」
　彼は立ち上がり、葉巻を燻らせながらアンヌに背を向けた。
「貴官は将来が嘱望されている。だが、ここで組織の人員に多大な損害を与えては折角の経歴に傷がつくというものだ。一方、ＪＪの如きはぐれ者一人消えたからといって、貴官を糾弾するものは誰もおるまい。どちらが貴官の得になるか考えるまでもあるまい？」
　ドーセットは向き直り葉巻を灰皿に置くと、サイドボードの中からウィスキーボトルを引き出し、グラスに縁切りまで注いだ。
「失礼するよ。規程の執務時間外だ、五月蝿く言わんでくれ」
　そう言ってグラス一杯の液体を一息に呷った。喉を鳴らし嚥下する彼の眼が爛々と輝き出すのを見て、アンヌは全てを察した。
「なるほど……、そういうことでしたか」
　以前から落第街の犯罪取締りに消極的過ぎるとは思っていた。それが単に彼自身の怠慢や、彼女への警戒心故であってくれたなら、腹立たしくはあるが、まだマシだったのだ。
「どうした、もっと楽にしたまえ。貴官も一杯飲るか？」
　一息に飲み干したドーセットが、空のグラスを掲げて見せた。
「酒くさい息で戯れ言を吐くな！」
　彼女は腰の剣を抜き放ち、切っ先をドーセットへと向けた。
　この男は《バグズ》モラン一家に抱き込まれていたのだった。
　おおかた最初は金銭での買収でももちかけられ、交渉の席で汲み交わした酒の力で完全に取り込まれたに違いない。
　そして身体の芯まで染み込んだ魔酒の臭いを隠すため、あの葉巻の煙を常に身に纏っていたのだ。
「貴様のやってきたことは全学園に対する愚劣な背信行為だ！　同じ風紀警察に身を置く者の一人として、絶対に許せん！」
　憤るアンヌを見つめ、裏切り者は面倒そうな溜息を吐いた。
「ジムの阿呆めが。ＪＪなんざ泳がせておけば良いものを、小物相手に盛りやがって。もう少し待てば大魚が網にかかるところだったというのにな。お陰で余計な面倒が一つばかり増えちまった」
　ドーセットは懐から抜き出した銃をアンヌへと向けた。風紀警察の鎮圧銃ではない、実弾が込められた拳銃だ。
「やはり貴様はドープだ、ドーセット。まぬけ(ドープ)の上にヤク中(ドープ)のな！」
「聞こえんな。貴様はＪＪと共に違法学生団に内通していたのを暴かれ、逆上の末剣を抜いた……と、死亡退学書に書いておこう」
「死亡退学者など誰も出させはしない。私も、ＪＪも、部下たちも……例え、貴様でも。絶対にだっ！」
　己の命を奪おうと銃を向ける男に対し、彼女はそう宣言した。
　次の瞬間、銃弾と剣閃とが交差した。

シーン10／追想　ジョージ・クラレンス・モラン

　アイルランド移民のド底辺の家に俺は生み落とされた。
　ジョージ・クラレンス・モラン、貧乏人の倅にゃ過ぎたご大層な



名前だろう。俺が命の他に親から貰った唯一の物だ。
俺にとって、その日のパン代を稼ぐためにスリやかっぱらいをするのは当然の事だった。そうでもしなきゃ餓えて死ぬだけだ。
だが、そんな姿を見せたくない奴が、俺にも一人だけいた。
幼なじみのレイ、なぜかあいつにだけはそんな自分を知られたくはなかった。野良犬みたいな餓鬼にも、女の前で格好つけたいって見栄があったんだろう。我ながらマセた餓鬼だ。
あいつはいつも泣いていた。酒癖の悪い親父に母親が殴られるのを毎日目の当たりさせられて、恐れ、泣きじゃくっていた。
俺はいつかこいつをそんな境遇から救ってやると息巻いてた。
身の程を知らねぇ馬鹿な野郎だ。手前が薄汚ぇコソ泥だってのも忘れて正義の味方なんざ気取りやがって。いけすかねぇ餓鬼め。
当然、俺にそんな力があるわけもなかった。
ある日俺は道端でレイを殴りつけていた親父に挑みかかった。
だが結果は散々だった。打ちのめされた俺は歯を何本か折って意識を失い、気付けばあいつと母親は姿をくらましていた。
噂じゃレイは通りすがりの誰かに助けられて無事だったそうだ。
誰だか知らねぇが、どこかのお節介野郎に感謝したもんだ。
その後の俺はお定まりのコースを歩いた。ノースサイドを牛耳るオバニオン一家の杯を貰って、めでたく鉄砲玉の一丁上がりだ。
ダイオン・オバニオンの表の顔は花屋だったが、裏では密輸品や横流し品を商っていた。邪魔になる奴は容赦なく始末させた。
親父は冷酷な男だったが、一方で着る物や食う物に困った貧民連中に儲けた金をばらまきもした。それに売春だけは絶対に手を出さなかった。それがアイリッシュギャングの誇りだと言っていた。
だが間もなく親父はくたばった。NYを根城にするある組織といざこざを起こした報復で、敵の鉄砲玉に呆気なく撃ち殺された。
俺は兄貴分のハイミー・ヴァイスと一緒に組織を立て直した。しばらくは順調に事が運んだ。組織は大きくなり、俺たちは新進のギャングスターと煽て上げられ、すっかりのぼせあがっていた。
NYのあん畜生の薄汚ぇ手がすぐそこまで忍び寄って来てることに全く気づきもせずに。とんだ間抜け野郎だ。
その日、俺は取引のために、ある倉庫へ向かうところだった。
だが、その途中で妙な野郎に呼び止められた。
確か……そう、白い服を着た男だった。ボロボロの糞長ぇ黒い襟巻を巻いていたのを覚えてる。
なのに、そいつと何を話したのかまでは、全く覚えてねぇ。
だが、たまたまそいつと話して遅れたお陰で、俺は助かった。
俺が倉庫に足を踏み入れると、そこには血の花が咲いていた。
ブン屋どもは『聖バレンタインデーの虐殺』なんて洒落た名前で事件を飾り立てやがった。さぞかし部数が伸びたことだろうよ。
だが、どんなに飾っても中身は変わりゃしねぇ。後に残ったのは肉屋にだって売れやしねぇ、鉛玉喰った血塗れの肉の塊の山だ。
糞ったれ、そいつはみんな俺の弟たちだ！
ヴァイスは、襲撃の狙いは俺だったと告げた。いつのまにかNYのあいつの恨みを買っていたらしい。復讐戦をぶち上げようとする俺に、ヴァイスは身を隠してほとぼりを冷ませと諭した。
俺は反対したが、俺がここに残ってたんじゃ手打ちの落とし所がねぇとヴァイスに頭まで下げられて、俺は仕方なしに従った。
悔しいが、真っ向からぶつかって勝てる相手じゃなかった。
そして俺はここ、マルセイユ洋上学園都市に放り込まれた。
二級学生なんて扱いだと知ったのは着いてからの事だった。そうだ、ここでも俺は端から真っ当な人間としちゃ扱われなかった。
だが、学園にいればどこの政府も組織も手が出せねぇのが有り難かった。卒業する必要はねぇ、時間さえ潰せりゃ良かった。
そして、すぐにあれが起こった。そうだ、《大消失》だ。
野郎の死に様が拝めなかったのは残念だったが、清々した気持ちだった。すぐにもシカゴから迎えがくると、そう信じていた。
ジムが命からがらシカゴから密航して来るまでは、だ。
《大消失》の日、ヴァイスたちは手打ちのためにNYへ出向いて

いた。そして誰一人帰って来なかった——そう、ジムは告げた。

ヴァイスを失ったノースサイドの一家(ファミリー)は、瞬く間に他の組織に飲み込まれ、跡形もなく消えちまったそうだ。

全てが空しくなった。ジムがなけなしの金をはたいて開いたもぐり酒場にたむろし、クダを巻くだけの日々がしばらく続いた。

だが——去年のことだった。奴が生きている事を知ったのは。

奴はヴァイスと一緒に吹き飛んだと、そう思い込んでいた。

俺は理解した。あん畜生は最初から全部知ってやがったんだ。あの日、NYが吹き飛ぶことを。そしてヴァイスを呼び出して、手前ぇの手を汚さず消し去ったって寸法だ。奴らしい汚ねぇ手口だ。

アル・カポネ！　あの腐れ外道の向こう傷(スカーフェイス)！

俺はあの野郎に親父を殺られ、兄貴を消され、弟たちも皆殺しにされ、挙げ句の果てに帰る場所まで奪われた。

そして俺はこうして落第街の吹きだまりで腐って行くのか？

いいや、それじゃ絶対に気が収まらねぇ！

俺は求めた。あの悪魔——今もどこかでのうのうと生きてやがるあの腐れ外道(カポネ)に復讐するための力を、強力な一家(ファミリー)を得る手段(すべ)を。

そして——ガクトゥーンの《鐘》は、俺の願いに応えた！

シーン11／朧藍の月(ブルームーン)

レイが姿を消して後、己が辿ってきた道をモランは語った。

「ガクトゥーンの……《鐘》……応える……？」

レイが言葉の意味を図りかねて思わず訊ねた。

声がか細く震えていた。想像を超えたモランの陰惨な人生と、彼を狂気に導いた不可解な言葉が、彼女の心を千々に乱れさせた。

「そうだ。それは選ばれた者しか聞くことのない鐘の音だ。全ての異能の源だ。この学園都市がもたらす祝福とやらだそうだ」

彼の顔には凄絶なまでの笑みが浮かんでいた。

「やっぱりあれはお前の異能か。あの糞っ垂れな密造酒と同じ、嫌な『臭い』がお前からもぷんぷん漂ってくるぜ」

「そこまで知っているなら話が早ぇ。そうだ、こいつが俺に与えられた異能の力——《月光の雫(ムーンシャイン)》だ！」

モランが両腕を左右に広げると、彼の全身から朧げな藍色の燐光が立ち昇った。それと呼応するように、酒瓶を収めた木箱や樽の継ぎ目の奥で、彼から発せられるのと同じ色の燐光が明滅した。

『朧藍の月(ブルームーン)』という言葉が、その昔この世界にはあった。それは『決してあり得ない物』を意味したという。

その光は、まさにこの世のものならざる光だった。

「俺の光を浴びて魔酒は熟成する！　魔酒(そいつ)をしこたま喰らった奴ぁ、魂をひっ掴まれ、俺にゃ絶対に逆らえなくなるのさ！」

己の異能を披露するモランの背後で、彼の部下たちが身じろぎせず立ちつくしていた。彼らはあまりにも情動がなさすぎた。

理由を察し、JJが倉庫の床に唾を吐き捨てた。

「俺は異能って奴がどうも気に入らねぇ……。だが、こいつはその中でも最悪の糞っ垂れだ。反吐の臭いで鼻が曲がりそうだぜ」

「言いたいことはそれだけか、風紀のおいぼれ犬？」

モランが脇下の拳銃嚢(ホルスター)から獲物を抜きかざし彼に狙いを定めた。

「はん。酒の力なんぞで操ってる傀儡人形のような部下どもが、お前の一家(ファミリー)だって？　とんだお笑い草だ——」

言い終わるや否や、銃声が轟いた。

「ぐあっ！？」

銃弾がJJの額をえぐり、鮮血が床に飛び散った。

「ただでさえ短ぇ余生だ。これ以上縮めることもねぇだろ？」

「JJっ！」

傷口を手で覆い前のめりによろめいた彼にレイが駆け寄った。

「だ、大丈夫だ……。ちょいと掠めただけだ……」

「既に俺の手は学園全土に広がっている。違法学生団、大手部活、委員会、至る所にだ。今に統治会にだって届いてみせる。そして……その時、学園の全ては俺の物になる！」

「はっ……、誇大妄想狂って言葉が今のお前にゃぴったりだぜ」
　したたる血に顔を染めつつも、ＪＪが悪態を吐きかけた。
「そうか？　この力が本当に学園の祝福だっていうなら、学園が俺に支配されることを望んでいるっていう証だろうが？」
「ジョージ……。もう……、やめて……」
　応酬するＪＪとモランの間に、レイがゆっくりと歩み出た。
「レイ……」
　モランの瞳で爛々と輝く藍色の光が彼女に注がれる。その狂気に満ちた輝きが彼女には正視に耐えず、一瞬、彼から顔を背けた。
　だがモランはそれに気付かず、彼女へ向けて手を差し伸べる。
　もう片手に、ＪＪに撃ち放った黒鋼の拳銃を握りしめたまま。
「レイ……。俺がお前にまた会えたのも、きっと学園の祝福ってやつだろう。さあ……、俺の許へ来い」
　レイが唇をぎゅっと引き結び、意を決して彼に向き直る。
　その瞳に、大粒の涙をたたえながら。
「あたしもね、ずっと会いたかったんだ。でも、怖くて会えなかった。あんたがこの学園にいるって知っても、ずっと逃げてた」
「レイ……？」
「あの頃のあんたの瞳はね、宝石の様に輝いてた。それは、あたしにとってたった一つの宝物だった……。それが、そんな風に哀しい色に変わり果ててるとこ、見たくなかった……」
「何を言ってるんだ、レイ？　俺は何も変わっちゃいねぇ」
　レイは俯いてかぶりを振った。頬を伝っていた涙が闇に舞う。
「ううん、変わったのはあんただけじゃないんだ。あたしもあれだけ苦しめられたはずの酒なんかに、すっかり飲み込まれてさ……。だからあたしも今のあたしを、あんたには見られたくなかった」
　哀しいすれ違いだった。共にそれを憎んでいたはずなのに、その魔力に囚われてしまった女と、己の復讐の道具に選んだ男との。
　レイは泣きはらした赤い目を彼に向け、哀しい微笑を送った。
「ねえ気付いてる、ジョージ？　殺したい程憎んでる相手に復讐するためなのに、あんたはそいつと同じ事をしてるのさ。今のあんたはまるで、あいつ(カポネ)の合わせ鏡だ。その向こう傷(スカーフェイス)までね」
　官憲を腐敗させ意のままに操るのがカポネの手口だった。それは今、彼が異能の力で為していることと、何ら変わりはなかった。
「ジョージ、あんたが本当に望んだのは復讐の力だったの？」
「……黙れ」
「本当に欲しかったのは帰るべき場所(ホーム)だったんだろ？」
「違う……黙れと言ってる」
「あんたはただ、その《鐘》ってのに躍らされてるだけなのさ」
「五月蝿ぇ——っ！！」
　激昂したモランは銃を握った拳でレイを殴りつけた。
　倒れ行く彼女の姿がモランの目にスローモーションで映った。
　父親に殴られていた子供の頃のレイの姿が、それに重なった。
「俺は……、お前を……、一家を……、力を……」
　モランは自らの所業に戦慄いて目を見開き、肩を震わせた。
「どうしてこうなっちまうんだ……？　みんな俺の手からすり抜けていっちまう……。レイも……、仲間も、何もかも全部だ……」
　狂気に染まった瞳が、昏倒するレイを抱き留めたＪＪの、血まみれの顔へと注がれる。
「手前ぇか……手前ぇがレイに何か吹き込みやがったんだな？」
　モランがゆらりと銃をもたげた。狙いは明らかにＪＪの頭だ。
　撃鉄が引き起こされる音が静寂の中に響いた。
（万事休す、か……）
　刹那、金属が挙げる悲鳴と衝撃とが倉庫を激しく揺すぶった。
　倉庫のぶ厚い扉が蒸気自動車(ガーニー)の突入によって弾け飛んだ。
「風紀警察だ！　全員手を挙げろ！！」
　蒸気自動車から降り立った人影が、剣を抜きかざしつつ叫んだ。
　背後から注ぐ光に金色の髪が煌めいた。アンヌ・ベアールだった。
「手入れ(レイド)だとっ……！？」
「ドーセットの野郎は何してた？　落第街の連中は！？」



「倉庫は完全に包囲されている！　大人しく投降せよ！」
　モランが驚愕に目を見開いた。アンヌ率いる風紀警察の突入隊が倉庫へ次々と雪崩れこんで来る。
「形勢逆転かね……？」
「そうかな。所詮、風紀など異能も持たんクズどもの集まりだ」
　モランが指を鳴らすと、背後に控えていた彼の部下たちが風紀警官たちへ飛びかかった。いずれも異能学生だった。
　彼らが放つ尋常ならざる力に、風紀警官たちは圧倒された。
「くっ……持ちこたえろ！」
　先頭に立つアンヌが敵の攻撃を凌ぎながら部下を鼓舞する。
「じょっ、上級衛視殿――これ以上、無理ですっ！」
　その時、天井を突き破って倉庫内に舞い降りたものがあった。
　闖入者は鳶色の髪をなびかせつつ、異能学生の一人を巨大な機械斧の柄で一撃し、叩き伏せた。続けざま横凪に振われた斧の巻き起こす旋風が、異能学生を更に数名、吹き飛ばした。
「待たせたね。あんたらの相手は、このあたしさね」
　統治会ソロリティが一人、ジョセフィン・マーチ――秘密兵器（ウェポンズ）の異名を戴く、異能持ち揃いの統治会でも最大脅力を誇る女性だった。
「貴様……統治会の……どうしてここに！？」
「統治会の諜報能力を侮って貰っちゃ困るさね」
　床に突き立てた機械斧に片足を乗せ、ジョウが不敵に笑った。
「最近、風紀警察から上がってくる情報の確度がどうも低くてね。最高幹部会でその辺つついてものらくらとはぐらかすばかりでさ。で、内偵を進めてたところに、ちょうどこの騒ぎってわけさね」
「統治会の諜報能力とやらが聞いて呆れる。匿名の通報がなければこのねぐらの特定も難しかったろうに」
　異能学生の一人をようやく下したアンヌが彼女の隣に進み出て、半ば呆れたように言い放った。
「ご挨拶だね。ヴァルター君がここまでの通り道、作ってくれたから一気に来れたんじゃないのさ」
　緊急招集された風紀警官たちは完全武装を整え落第街へ突入したが、随所から湧いて出る違法学生たちの激しい抵抗に遭い行く手を阻まれた。銃弾が雨あられと注がれ、進退窮まったかに見えた。
　だが、そこへ現れたのがジョセフィン・マーチとヴァルター・リッツの二人だった。彼らの人並み外れた衝撃力を利用し、ここまでの進路を確保したのだ。まさに電光石火の突入劇だった。
　ヴァルター・リッツは今も落第街じゅうを所狭しと駆け巡り、違法学生たちを撹乱、各個撃破しているはずだ。
「もう逃げ場はねえぞ、モラン」
　ジョウが突入する際に天井に開けた穴から、倉庫の周囲を包囲する風紀警察が設置した投光機の放つ光が降り注いできた。
　それは舞台のスポットライトのようにモランの姿を照らした。
「逃げるだと？　この俺が？　誰から？　何処から？　何処へ？」
　――否。それは失われた月光の如くに、彼の内なる苦悩と狂気とを浮かび上がらせた。
「ああ、その通りだ。どうやらこの世にゃ端から俺の居場所なんてなかったってことだ。今さら逃げる場所なんてどこにもねぇ……。後は腐り落ちて消えるだけだ。これで満足か、正義の味方？」
　ＪＪが昏倒を続けるレイをゆっくりと床に寝かせた。
「馬鹿言え……。正義の味方なんざ絵物語の産物だ。そんなもん、どこにもいやしねえ」
「ああ、そうだ。だが餓鬼のころ、俺はあいつだけの正義の味方になりたかった。だが、結局なれなかった。そこから俺の歯車は全部狂っちまった……」
　自ら殴りつけ昏倒させてしまったレイに、モランは惜別の笑みを送った。そして未練と決別するように、男は深く瞳を閉じた。
　再び見開かれた時、彼の瞳には覚悟の色が浮かんでいた。
「最後のケジメだけはつけてさせてもらうぜ、風紀の犬。いや、ジャン・ジャックさんよ」
　モランが三度、銃口をＪＪに向けた。

「最後に名前で呼ぶなんざ、案外律儀な男だな。ジョージ」
　ＪＪは精一杯の気力を絞って強がりを放った。
　そして全神経をモランの指先に集中させる。
　避けるのが早くても遅くても一巻の終わりだ。
　神経が限界ぎりぎりまで張り詰め、弾け飛ぶ寸前だった。
「あばよ――」
　言葉と同時に銃口が閃いた。ＪＪは身を沈め精一杯の力で駆け出したが、音速に近い銃弾は無情にも彼の身体を着実に捉えていた。
　そう、確かに捉えていたはずだ。
　――が。突然、ＪＪの視界が歪んだ。彼の意識を背後に置き去りにする程の加速で、彼は砲弾の如くモランの懐へと飛び込んだ。
　ＪＪの高速の体当たりを受けてモランは倒れ込んだ。強烈な突進を受け石床へ激しく打ち据えられたモランが苦悶に呻いた。
「畜生……手前ぇ……異能を隠してたの……か……？」
「馬鹿言え。そんなもんあったらこんなザマになっちゃいねえ」
　ＪＪは自らも納得いかない顔でモランに応えた。
　――が、届いてはいなかった。彼は既に昏倒していた。
　周囲でも大勢は決しつつあった。ジョウは異能学生の制圧を既に終え、アンヌたち風紀警察も、倉庫の変事を察して押し寄せてきた違法学生達を跳ね除け、鎮圧しつつあった。
　銃撃の音もまばらになり、やがて倉庫に静寂が戻ってきた。
「お疲れさん。怪我は大丈夫かい？」
　機関斧を軽々と肩に担いだジョウが彼の許へとやってきた。
「さっきのは、あんたの仕業か？」
　あの時の彼の動きには、明らかに超常の力が働いていた。そしてそんな真似ができる味方は、この場には彼女の他いなかった。
「ちょっとだけ力を貸した。この場はあんたがケリをつけるべきだと思ったからさ……。迷惑だったかい？」
「助けてもらったことは礼を言う。だが……、こんなのはケリなんて言わねえ……」
　足下に倒れ伏すモランを、彼は複雑な思いで見下ろした。
「なんのことはねえ……。俺もこいつと同じ、一人じゃ何もできねえ半端物だってことさ……」
　緊張の糸が切れた。疲労と流血と人間の限界を超えた動きの反動が一挙に彼に襲いかかり、ＪＪはその意識を手放した。

シーン12／別れと、再会と

　落第街激動の一夜はこうして幕を閉じた。
　翌朝の新聞には風紀警察と統治会が満を持しての違法学生団摘発に乗り出し、多数の違法学生を検挙したと報じられたが、密造酒にまつわる真相は、その一切が伏せられていた。
　事件後、マイク・ドーセット元上級保安官は体調不良を理由に依願退官したと報じられた。彼が手に染めた犯罪については闇に葬られた。風紀の長たる者が違法学生団に買収されていたとあっては、学園の治安機構に対する学生たちの信頼が損なわれるからだ。
　また、罪を追求しようにも無理な事情があった。より強力に精神を《月光の雫》に浸食されていた彼は、モランがその力を失ったのと時を同じくして、精神活動に著しい支障を来した。彼は今、公安管理下の刑務病院に収監され、密やかな療養生活を送っている。
　彼の後任にはアンヌ・ベアールが抜擢され、下級衛視の多くは歓迎の意を示した。長らくのドーセット体制に慣れきっていた他の上級衛視たちの反発は強かったが、上官の汚職を看破できなかった負い目もあり、当面は口をつぐむことで意見が一致したようだ。
　そして事件の真相を知る唯一の報道部員であり情報屋でもあるレイチェル・チャンドラーは、それを公表することはしなかった。モランの減刑と引き替えに統治会との司法取引に応じたのだった。
　その結果、ジョージ・クラレンス・モランには五年の強制授業刑が課せられることが公安委員会により裁決された。レイチェルは当局からモランとの面会許可を得たものの、彼が頑として拒絶し、以

来、今日に至るまで二人の面会は果たされていない。
落第街の違法学生団は混乱の極みに陥った。ジム・モリアーティを初めとするモラン直属の構成員は大半があの晩に検挙された。
それ以外の組織も、ある組織はボスが心神喪失状態に陥って統制を失い、ある組織はモランの後釜を狙って他の組織と反目しあい、いずれもアンヌ・ベアール体制下の風紀警察に易々と検挙される羽目となった。違法学生団の勢いも、もはや昔日のものとなった。
革命学生たちは自らの生存圏を脅かす違法学生勢力の失墜に胸をなで下ろし、来るべき革命の日への準備と夢想とを続けている。
主要穀物部や運輸委員会等の部活・委員会内の内通者に関しては、直接の関与が判明した者にのみ秘密裏に厳重勧告処分が下されたが、それ以上の追求はなされなかった。風紀警察同様、過剰の追求は現行の学園運営体制を害するばかりと判断されたためだ。
最後にＪＪだが、密造酒事件調査の進展・解決への貢献は大いに認められたものの、独断専行で潜入捜査を行った命令違反と、一般学生の生命を危険に晒したことへの責任――被害者本人の弁護があったにせよ――もまた大であると見做され、差し引き一ヶ月の停職処分の上、階級は据え置きという決定が下された。
こうして学園は幾度目かの勢力改変期を迎えたが、大半の学生の目には今まで通りの日常が続いているようにしか映らなかった。

そして……時は瞬く間に過ぎ行き、一九〇六年度卒業式当日。
式典警備任務を終え、第二三小公園のベンチで合成煙草を吹かしていたＪＪに歩み寄る人影があった。白いコートを纏った青年だ。
「久しぶりだね。無事だったようでなによりだ」
落第街の情報屋だった。そして彼は革命学生の一人でもある。
「随分お節介な情報屋がいたようでね。お陰さんでこの通りだ」
あの時、アンヌに匿名の通報が入らなかったら、ＪＪは今頃この場にはいなかっただろう。そしてあの晩、彼の行方を正確に把握し得る者がいたとしたら、この青年の他になかった。
「顧客は大切にする主義でね。それにきみだけならともかく、レディを死地に送り込んだままとあっては、流石に目覚めも悪い」
「はっ、俺はついでかよ」
「そういう事にしておいてくれ。……彼女は今日卒業を迎えたそうだね。そして、モランは彼女との面会を最後まで拒絶したとも」
「なに……。いずれ首に縄をつけてでも会いに行かせてやるさ」
ＪＪは煙草を吹かしながら目を瞑り、そう断言した。
「刑期は五年と聞いている。それまで学園に残るつもりかい？」
ＪＪの思わぬ発言に青年が面食らったような顔をした。
「別に行く当てもねえしな。なに、五年なんざあっと言う間さ」
「ふっ……随分とお節介な風紀警官もいたものだね」
青年も目を伏せ、その端正な顔に微笑を浮かべる。
「はっ。あんたに言われたかねえな」
そんなやりとりを交わしていた彼らの許へ駆け寄ってくる足音が聞こえた。二人は同時に目を開くと、そちらへ視線を送った。
「あーもう、パパったら！　こんな所で油売って！　レイ先輩、行っちゃったよ！　見送りにも来ないなんて薄情なんだからさ！」
レイの押しかけ弟子のアナベス・マードック・Ｊｒだった。
事件の後、レイは自身では情報屋活動を行わなくなかったが、自分の顧客を引き継いで悪戦苦闘するアナベスに常に適切な助言を与え、どうにか彼女を一人前弱の情報屋に育て上げていた。
無論、ＪＪもそれに協力させられたことは言うまでもない。
「ごきげんよう、マドモアゼル。たしかマードック君だったね」
「……あれ、ひょっとしてシャルル君？」
「なんだ、お前ら。顔見知りか？」
「なに言ってんの、パパったら。第二文芸部の次期副部長さんをつかまえてさ。こないだ第二報道部の女性誌の取材を手伝ってね。その時、インタビューを受けてもらったのさ」
「それはそれは。随分と有名なんだな、あんた。だが、いいのか？　あんたみたいな素性の人間がそんな風に目立ってよ」

「この場での僕は一介の学生だ。学業を尊び、学友を慈しみ、そしてよなく詩と文芸を愛する者だ。きみたちと何ら変わるところはない。立場も、そして心もだ」
(なるほど、な……)
　ここは彼にとっての昼の世界、立場としがらみを忘れて誰とでも対等に語り合うことのできる中立地帯という訳だ。
「いちいち気取った野郎だ。ま……、いいだろう。ここでは休戦と行こうか。もっとも、いずれ『その時』が来たらわからんがな」
「『その時』はお手柔らかに願いたいものだね」
「なに男同士で密談してんのさ？　なんだか嫌らしいなぁ……」
　アナベスが二人の間に顔を突っ込んで来た。
「なにが嫌らしいってんだ。あと顔が近えよ。少し離れろ」
「ぶーだ、仲間はずれにするからさ！」
　頬を膨らませながらアナベスが二人の間から首を引き抜いた。
　その時、顧客か誰かから電信（フォン）が掛かって来て、彼女は少し離れた植え込みの所まで遠ざかって行った。
「ったく、騒がしい奴だぜ……」
「なに。元気さは若さの特権だよ」
「なんだそりゃ、俺に対する当てつけか？」
「あくまで一般論さ。気にする方に問題があると思うが」
　ＪＪは思わず渋面を作る。口に力を込め過ぎて咥えていた紙巻きの根本がくしゃりと折れ曲った。彼はいっそう渋い顔をして、煙草を靴裏で消し潰すと、携帯灰皿へと放り込んだ。
　そこでようやく、ある事実に気付いた。
「そういや、ちゃんと名前を聞いてなかったな」
「シャルル。ルイ・シャルルだ」
「ジャン・ジャックだ。ＪＪでいい」
　彼はベンチに座ったまま、シャルルに手を差しのばした。
　こうして二人は、暫定的な休戦を約する握手を交わした。

エピローグ

「……パ。もう、パパＪＪったら！」
　耳元でがなり散らされる声に、彼はまぶたを開いた。
　視界一杯にアナベスの顔が飛び込んで来る。
「ああ……、お前か。耳元ででかい声出すな。あと、顔が近え」
「小さい声で起きなかったからだってば。こんなとこで昼寝なんかしちゃってさ。いくら春だからって風邪ひいても知らないよ？」
「あ……？　眠りこけてたのか、俺は……」
　公園のベンチから見える光景は、記憶（ゆめ）の中と大差なかった。
　ただ目の前の少女が、少しばかり大人びたことを除けば。
「もう、パパったら！　あんまり年寄り臭いこと言わないの！」
　だがこうして頬を膨らませると、あの頃のあどけさながひょっこりと顔を覗かせる。なにやら懐かしい想いが胸によぎった。
「こちとら任務漬けでね。居眠りぐらい好きにさせてくれや」
「そりゃ、いいけどさ。寝煙草はよくないって」
「あん？」
　だらりと垂らしていた右手を持ち上げると、人差し指と中指の間に合成煙草のフィルターだけが燃え残っていた。
「っと、いけね」
　念のため靴裏に押しつけて完全に火種を消してから携帯灰皿にフィルターを放り込んだ。なにかデジャブを感じる光景だった。
「もう、しっかりしてよ。『不良風紀警官、寝煙草で公園を炎上させる！』なんて新聞の一面飾ったら洒落にならないよ？」
「はっ。新聞の一面もここ二年で随分と安くなったもんだな」
　ＪＪは苦々しく笑ってから、はっとしたように呟いた。
「そうか……。もう、あれから二年経つんだな……」
　時が経つのはあっと言う間だ。
　その間にも新たな友が現れ、そしてまた去ってゆく。

十何年と彼がこの学園で繰り返してきた光景だ。
「なに黄昏てんの、パパ？」
「ん……いや、平和になったな、と思っただけさ」
「もう本っ当に年寄り臭いなあ。そんなだと早く老けるよ？」
「馬鹿。本物の年寄りってのは『昔は良かった』って言うもんだ」
「待たせたかな。だいぶ盛り上がっているようだが」
シャルルがゆっくりと歩いてきた。
「どうした、大将。今日は随分とゆっくりだったな」
あれ以来、それと明確に約束を交わした訳でもないのに三人はこの場に集うようになった。他愛のない話に花を咲かせるために。
シャルルとの『その時』は、幸いにしてまだ訪れていない。
「来る途中、少々毛色の変わった新入生たちに出会ってね。我々のささやかなる野外サロンへとお誘いしたというわけさ。……いけなかったかね？」
「いいんじゃない？　賑やかな方が楽しいしさ」
「ん……別に断る理由はねえな」
「お許しが出たようだ。さあ、こちらへ」
同意を得たシャルルが、離れた所に立つ新入生たちに手招きした。
「なるほどな。こいつは確かに毛色の変わったお客さんだ」
栗色の髪をした背の高い青年を盾にしつつ、緑の髪に風変わりな猫耳型髪飾りをつけた少女がひょこひょこと歩いてきた。更にその後ろには髪をピンク色に染めた少女がおずおずと続く。
「ど、どうも。その……、初めまして。あたしは――」
一九〇八年四月某日。それは彼らの運命――否、マルセイユ洋上学園都市全体の運命を変える一人の少女との出会いの日だった。
数年前までの混乱とは無縁に思えた春の麗らかな日は、大きな嵐の前の束の間の静寂であったことを、後に彼は知ることになる。

『朧藍のムーンシャイン』完

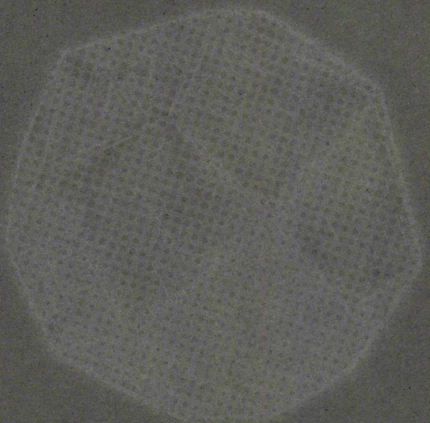




朱紅きプレリュード

Prelude en rouge ecarlate

文・森瀬繚　画・文倉十



——Ego sum nemo. Ego sum Legionis. Non ignosco. Non sum oblitus. Expecta me.（我は、何者にもあらず。我は軍勢なり。我は赦さず。我は忘れず。我は忘れさせず）

Le Trouble Man ——その男、危険人物につき

「あたしが——あたしがあの人と出会ったのは、学園都市に入学してすぐのことでした」

　僕がノートにペンを走らせるのと同時に、携帯型の録音機械が、彼女の声を記録し続ける。

「あたしは十万人の学生のひとりで、碩学になんてなれない、普通の、学生で……この話。前にもしませんでしたっけ？」

　話しながら、追憶という名の物思いに沈みかけていたのだろう。

　彼女はそう言うと、申し訳なさそうに僕の顔を窺った。

「はい、あるいはいいえ。まあ、どちらでも構いません。記事にまとめる時は、こちらの筆先三寸でどうとでもなりますから、あなたは思ったことを、思いのままに話してくれれば良いんですよ」

「どうとでもなるって……」

　表現がストレート過ぎたろうか。ちょっと鼻白んだ様子の彼女。

「ムッシュ……ええと、先輩。あることないことは流石にちょっと困りますし、マスターにもご迷惑、かかっちゃいますし」

「はは。ゲラがあがりましたら、ちゃんとチェックしていただきますから安心してください。我が〈フランスの声〉、三文新聞は三文新聞でも、超一流の三文新聞を自認しております」

　ネオン・スカラ・スミリヤ。先ごろ、二年生にあがったばかりの彼女。精神的にも肉体的にも実に健康的な、輝ける女学生だ。

　そして、このマルセイユ洋上学園都市を大いに揺るがせた、動乱の中心人物の一人——おおっぴらにそのように言われているわけではないが、学園都市から寄せられたあらゆる断片的な情報を繋ぎ合わせていくと、「思弁的探偵部」というキーワードに到達する。

　花の都パリに本社を構える大衆紙〈フランスの声〉、その契約記者である僕が、彼女に取材を申し入れてから学園当局の許可がおりるまでに、たっぷり一ヶ月は待たされた。

「ひとたび入学すれば、卒業するまで、島の外に出ることは許されない」——このルールが実質的に崩壊したことで、学園都市を取り巻く者たちの事情は、大きく変化することになった。

　学園卒業生の能力の高さ、人脈の幅広さは、本国のみならず欧米各国の官公庁や企業にとって、垂涎のものだった。これまでは熟れた果実が出荷されるまで、指をくわえて見ていることしかできなかったのだが、今や貞操帯は砕かれた。暗黙の紳士協定は紙くずのように破り捨てられ、節操なき青田刈りが始まろうとしていた。

　そうした状況を鋭敏に察したのだろう。《フラタニティ》前主宰ウィルヘルム・ライヒは、委員総会に図っていち早く手を打った。運輸委員会に入出島管理局を新設し、ディフ島にやってくる人間の素性と目的を厳密にチェックすると共に、島から外出する学生についても厳正な審査を行う仕組みを整えたのである。

　ようやく取材許可がおり、こうしてディフ島にやってこれた僕なのだが、マルセイユを経由せず、カレーから出港して直接学園都市を目指す船の中で、何故か船長室に呼び出され、半ば軟禁同様の状態に置かれたのには閉口した。こうした危険物の如き扱いは、出航してから間もなく、このような電信通信が入ったことに起因する。

貴船にモーリス・ルブランあり。ビジネスクラス、黒髪、一人旅。

　まったく、こんなことならば偽名でも使った方が良かったかも知れない。まあ、この名前がこれほど警戒されるということは、親愛なる後輩諸君が今も元気にやっているということだろう。

　モーリス・ルブラン。僕の名前。それは、マルセイユ洋上学園都市——とりわけ体制側にとって、一九〇二年から四年間にわたり、第三報道部の編集長を務めた呪わしき男の名前なのだ。

ああ、第三報道部！　懐かしき栄光の日々！　それは、かつてこの学園の学生であった僕の、青春時代そのものだった！
一年坊主の僕が最初に訪れた時、このクラブは文字通り、三流の泡沫新聞部に過ぎなかった。第一にも第二にも入部を許されなかった、あるいはそこから追い出された、記者崩れの吹き溜まり。
だけど、僕ともう一人がわずか数ヶ月で、三流のゴシップ屋だったこのクラブを、超三流の大衆新聞部に変貌させた。島内のあらゆる情報、噂話を吸い上げ、瞬く間に記事に仕上げて新聞を発行する、生き物のように柔軟な仕組みを作り上げた。僕たちの筆は剣よりも強く、脛に傷持つ有力学生は秘密が暴かれやしないかと恐怖に震え、一般学生たちは筆鋒鋭い記事の数々に拍手喝采した。
モーリス・ルブランが二年生にして第三報道部の編集長になりおおせたのは、そうした事情によるものだった。
時折、風紀警察に小言を言われたり、公安委に事情聴取されたりすることはあっても、彼らにそれ以上のことはできなかった。
僕たちに手を出すこと、それは僕たちがスタックした山のような醜聞、機密が曝け出されてしまうことを意味する。いわば、僕たちは利害と牽制が微妙にバランスをとる学園情勢という名の天秤の上で、軽やかにタップダンスを踊る大道芸人のようなものだった。
先ほど、彼女――ネオンが僕のことを「先輩」と呼んだのは、そうした事情について予め知らされていたことを意味する。
「――今回は、このあたりで結構です。ありがとうございました」
僕は、パタンと音を立ててノートを閉じると、ネオンに右手を差し出した。おずおずと僕の手を握り返す、彼女。実に初々しい。
「あの、今回……ということは、本当にこれから何回も？」
「そうです。お送りした企画書は御覧いただけましたよね？　今回の記事は、それこそ数年をかけて学生の皆さんに話を聞いて回って、マルセイユ洋上学園都市の過去と現在、そして未来を切り取ってみせようという、そういう趣旨があるのですよ」
僕は、営業スマイルを顔に貼り付けたまま、よどみなく説明する。
「だから、これからも幾度かお話を聞かせていただくことになりますよ。たぶん、あなたのお友達にもね、マドモアゼル・スミリヤ」
取材中、彼女の顔に漂っていた警戒色が薄れ、表情が和らいだ。
僕は、ここぞとばかりにウィンクをひとつ。
「いいですね（ビヤン）！　そうして笑っている顔、一番お似合いですよ」
「もうっ、からかわないでくださいよ、先輩！　本当、聞いていた通りなんですね……」
「そこですよ、気になっていたのは。まるで、僕のことをどなたかから聞かされていたようなご様子だ」
彼女がしまったという表情を浮かべ、僕はにこにこ笑い。
「よろしければ、情報の出所をお聞きしても？」
「私だよ、モーリス。あまり後輩を苛めるものではないぞ」
もちろん、彼女が僕の背後にいることは、ネオン嬢の不自然な目の動きから察していた。何年ぶりだろうか、懐かしいその声。
「なるほど、君だったか。もちろん、君だよね」
僕は椅子ごとぐるりと回転し、彼女の方を向いて立ち上がる。
「アンヌ・ベアール。ポクフリ・リ（かつどん）の差し入れはあるかい？」
「相変わらずだな、お前は……」
ため息をつく彼女。風紀警察の上級保安官――つまり、最高責任者であるアンヌ・ベアールの姿がそこにあった。
あの頃、十分に長かった金髪は今や腰の下にまで届き、背筋をまっすぐに伸ばしながらも、どこかリラックスしたような空気がある。
地位と肩書きをしっかりと自分のものにした威厳漂う姿から、初めて会った時の初々しい風紀警察官の姿を連想することは難しい。
「久しぶりだね、アンヌ」「お前も元気そうだ、モーリス」
僕は、彼女を軽く抱擁する。彼女もそれを拒まない。恋人同士の情熱的なそれではなく、数年ぶりに会った友人同士の抱擁だ。
「何だったら、再会の口付けでも交わすか？」
「物凄く高くつきそうだから、残念だけど遠慮しておくよ」
軽口を叩き合う僕たちの様子に、ネオンが眼を白黒させている。

その姿は確かに、「鉄の女」という異名を奉られているという、現在の彼女の印象からは遠く離れたものであったろう。
「ああ、すまないなネオン・スカラ。こんな男でも一応、同期の友人なのでね。再会というのは、それなりに嬉しいものさ」
「ご友人、だったんですか？　風紀警察の上級保安官と、第三報道部の元編集長さんが？」
その疑問はもっともだ。かたや、学園の治安を預かる風紀警察の最高権力者。かたや、学園の上層部を徹底的に虚仮にするのを旨とする、三文新聞（タブロイド）の発行者。猫と鼠のようなものだ。
とはいえ、あまりに露骨に驚かれてしまうと、それはそれで——。
「この私もお前と同じ女学生でな。学園の平和と秩序を預かる身ではあるが、それなりの、なんだ、青春というものがあったのだ」
「確かに、あった、だよね。過去形。セピア色の遠い記憶」
茶々を入れる僕を、ギロリと睨み付けるアンヌ。その猛禽めいた鋭い眼光は、流石は上級保安官殿といったところだろう。
アンヌは呆れたように、だけど、どこか楽しげに繰り返した。
「本当に、相変わらずだな、お前は……」

Jean Daspry——ジャン・ダスプリー

「改めて。本当に久しぶりだな、モーリス」
ディフ島に足を踏み入れるや否や風紀警察本部へと連行され、仕事場としてあてがわれた取調べ室に押し込められての取材を余儀なくされていた僕は、ようやく懐かしい潮騒通りを訪れていた。
何しろ、上級保安官殿の付き添いつきである。監視役として、これ以上大げさな人選もないだろう。
「カフェ・ド・ノートルダム、なくなっちゃったのか」
「ああ、君が卒業してからすぐだったかな。私も何度か足を運んでみたのだけど、休業中の看板がかかったまま」
彼女の口調はいつしか、昔のように砕けたものになっていた。

カフェ・ド・ノートルダム。潮騒通りの片隅、オーゼイユ・アヴェニューにあった、朽ちかけたような佇まいの喫茶店。
その店の一番奥の席こそが僕たちの編集部であり、風紀警察の衛視という立場から離れ、年齢相応の素の顔を見せる彼女と語り合った思い出の場所だった。トラットリア二階のテラス席から、僕はそこかしこで会話や食事に興じる生徒たちの様子を眺め渡した。
「……何て輝かしい光景だろう！」
「そうだな。この眺めこそが、今の私を支えてくれる誇りなのさ」
「いいのかい？　仮にも風紀警察の最高責任者が、三流ブン屋と会食なんかしてしまって。第三報道部の恰好のネタだよ、これは」
「はは、そうかも知れない」
僕と彼女の笑い声が響く。そういえば、僕たちが彼女に初めて出会ったのも、このトラットリアの——。
「この席、だったっけ？」
「そういえば、そうだったな。私も同じこの席に座っていて。だけど、君の座っている席には……」
「……ジャン・ダスプリー。そうだね、彼がここにいた」
僕は、今ここにいないもう一人の名前を口にする。
ジャン・ダスプリー。モーリス・ルブランの親友にして、共に第三報道部を生まれ変わらせた男。そして——マルセイユ洋上学園都市の創設から半世紀の歴史において、唯一の「退学者」の名を。

十月は、寂しい月だ。秋が終わり、冬がやってくる、狭間の月。
蒸気機関の吐き出す排煙が、空を灰色に塗り込めた一九〇五年現在、季節はとうに喪われ、一年中が秋のようなものだった。
無数のナイフを弄び、ひとりで夜を過ごす学生を襲うという殺人道化師の噂が沈静化した頃。まだ完全には傷が癒えず、片腕を包帯で吊った状態のアンヌは、トラットリアの二階、潮騒通りを一望に見渡すテラス席に座り、一人の男子学生と向かい合っていた。
第三報道部——その悪名は、当時はまだ新米の風紀警察官であっ

た彼女の耳にも、当然ながら入っていた。
曰く、他人のゴシップを暴き立てるのが生き甲斐のハイエナども。
曰く、特ダネのためなら友人や恋人も売る、新聞の亡者たち。
風紀警察におけるこのクラブにまつわる評判は、概ねそのような論調で統一されていた。その彼らが、いったいどのような手管を使ったものか。上級保安官の許可はもとより、ご丁寧にも大手部活（ビッグ・テン）に連なる有力部長の紹介状までも持ち出して、事件の当事者であるアンヌ・ベアールに、取材を申し入れてきたのだ。
二〇階建ての碩学摩天楼の屋上で彼女が殺人道化師と直接相対し、傷を負わされたことについては、風紀警察の正式な書類に記載されていない。あれを実際に目撃したのは結局、彼女だけであり、死体もついに見つからなかった以上、公式記録に残すわけにはいかない――そういう言い分だった。つまるところは、全ては彼女の誤認として片付けられ、今なお彼女の体を灼き続ける傷跡もまた、不注意による事故として処理されたのである。
そして今、騒動の尻拭いをさせようとでもいうように、マスコミ対策を療養中の彼女に押し付けてくる。その理不尽を噛み締め、彼女はここに来ていたのだった。
意外にも、モーリス・ルブラン――この時はまだ第三報道部の編集長ではなく、ただの記者だった彼は実に物腰柔らかで、取材相手の心情を慮ることなく根掘り葉掘り遠慮なく質問を投げてくる記者連中とは、大分違う印象を受けた。
「僕は、あなたが見たことをお聞きしたいだけなんですよ」
彼は幾度もそう繰り返し、言葉を選びながら話をする彼女に時折頷きかけ、時折相槌を打ちながら、真剣に話を聞いてくれた。
その態度は、彼女の話に聞く耳持たなかった同僚や上司たちとまったくの対極にあるもので、だからつい彼女は、職務という心のガードをおろしてしまい、本当の事を話してしまったのである。
「黄色い扮装の、道化師ですか……？」
それを聞かされたルブランは、驚いた顔で体を前に乗り出した。

しまった――彼女はそう思った。つい、話し過ぎてしまった。
この柔和な物腰こそが、この男の手口なのだ。彼はこうやって話を聞きだしては、あることないこと織り交ぜた事件に仕立て上げ、学生たちの好奇心を刺激する煽情的な記事が、明日にも第三報道部の発行する新聞のトップを飾ることになるのだろう。
さっと顔を紅潮させてはみたものの、口にしてしまった言葉を今更引っ込めることもできず、彼女は黙りこくる他にはなかった。
その時だった。ルブランに同行していたもう一人――取材に応じる彼女の周囲をぐるぐると移動しながら、報道用の写真を何枚も撮影していたカメラマン役の学生が、口を開いたのは。
「一文惜しみ（ペニーワイズ）」「え……？」
脈絡なく発せられた耳慣れぬ言葉がアンヌの想念の足元を掬い、呆気に取られてしまう。
「って、ご存知ですか？」
「……いえ、知りません。聞いたこと、ないです」
その時初めて、彼女は彼の顔を正面から見た。
そして、その黒髪の男子学生の顔立ちが女性のように繊細で、人形のように整っていることに気づいた。右眼に着用した片眼鏡（モノクル）から管が二本伸びて、手元の写真機（カメラ）に接続されている。見慣れないタイプの写真機（カメラ）だ。おそらく、その片眼鏡（モノクル）は、写真機のファインダーの役割を兼ねているのだろう。
「ペニーワイズ、あるいはキラー・ザ・クラウン。クレイジー・ピエロと呼ばれることもありますね。新大陸の幾つかの土地にまつわる、民俗学的な怪物（フリークス）ですよ。人の恐怖と絶望を糧とし、女子供を好んで襲う殺人道化師のおとぎ話です」
アンヌは、身を乗り出した。もしかするとそれは、彼女が遭遇したそれ（イト）についての手がかりとなりうるかも知れない。
例えば、手口。かつて、切り裂きジャックが数多の模倣犯（コピーキャット）を産んだように。あるいは、犯人の素性。殺人道化師にまつわる土地の出身者が、この事件に関わっているのだとしたら――。

「俄然興味が出てきたって顔になりましたね。では、僕が知っている話をもう少し。メイン州のデリーという町は、二七年に一度、陰惨な殺人事件が起きることで好事家に知られていますが、犠牲者の周辺でピエロという単語が幾度か出てきます。西部のフォートなんとかいう街の近くでも、つい十数年ほど前にそんな事件が起きたという話を雑誌か何かで読んだことがありますね……」

空席に陣取った単眼鏡（モノクル）の彼の話術は実に巧みで、怪しげな事件の数々を、身振り手振りまで交えて抑揚たっぷりに披露する。

「ところでこの殺人ピエロ氏の正体についてなんですが、興味深い話があるんですよ。かれこれ一〇〇年は前のことになるのかな、ある男がメスメル学者のもとを訪れて、自分の人生が悲惨そのもので、希望がどこにもないのだと切々と訴えたのだそうです。その学者はこう答えました。今夜、パリアッチョという高名なピエロのショーがあります。見物に行って、たっぷり笑ってくると宜しい。きっと気が晴れますよ。だけど、その男は結局、絶望のあまり狂い死にしてしまったのだそうです。事によると彼の怨念が、世界中のあちこちで化けて出ているのかも知れません」

「……ちょっと話が飲み込めません。何故、その人は絶望を？」

アンヌの質問を聞くや、単眼鏡（モノクル）の彼は真剣な表情を作ると彼女の方に顔を寄せて、ひそひそ声で囁いた。

「何故かというと……彼がそのパリアッチョだったんですよ！」

「はい……？」

さぞかし間抜けな表情になっていたことだろうと思う。

「あれ、面白くありません？　積み重ねたそれっぽいシリアスに、このオチをぶつければ、爆笑間違いなしだと結構自信あったのに」

流石に見かねたか、ルブランが苦笑いして口を挟んできた。

「彼の言うことは話半分に聞いてください。あと、パリアッチョというのは九二年初演のオペラ『道化師』の登場人物ですから」

「ルブラン君！　そういうネタバレは僕、よくないと思うんだ！」

「だいたい、ジャン。今日はカメラマンに徹するって話じゃ？」

「いやあ、このお嬢さん物凄く緊張してるみたいだからね。ここは紳士として、精神的マッサージをして差し上げなければばって」

ジャンと呼ばれた彼は、快活そのものといった笑い声をあげた。

「……あのう」

おずおず、という感じで口をさしはさもうとしたアンヌに気づき、ルブランはいささか慌てた感じの早口でまくしたてた。

「ああ、これは失礼！　この図々しい男はジャン・ダスプリー。僕がいつも組んで仕事をしている、第三報道部のカメラマンです」

「おいおい、僕は個人的に君を手伝っているだけで、正式に入部した覚えはないぞ？」

「契約部員も一般部員も幽霊部員も似たようなものさ。だいたい、ジャン、君の名前はもう部員名簿に載ってるんだからな。ちょうどいい機会だ、今すぐ滞納中の部費を払ってもらおうか」

「待て待て待て、いつからうちのクラブは部員からそんなものを徴収するようになったんだよ」

「あ、今うちのクラブって言った。部員だと認めたな」

「引っ掛けかよ、詐欺だ！　弁護学生を呼んでくれ！　訴えてやる、僕は最高法廷までだって戦ってやるぞ！」

「望むところだこの三枚舌の似非紳士！」

「その通り、僕の舌は二枚切り取られてもまだ一枚ある！」

喧々囂々。呆気に取られるアンヌの前で、モーリス・ルブランとジャン・ダスプリーの二人が、各々一歩も引くことなく丁々発止の舌戦を繰り広げる。既に取材はどこへやら。言った言わない、払う払わないの論戦は、困り顔のウェイターから丁重な、しかし断固たる態度で店の外に放り出されるまでの間、延々と続けられた。

――それが、アンヌ・ベアールと第三報道部の名物部員二人の、最初の出会いだったのである。

Le Comit ede la 53 ――五十三人委員会

「や、お疲れ様。今日も綺麗だね、アンヌ。その眼の下にできてるクマは新しいアイシャドウか何か?」「今日も僕らの監視? 風紀警察ってのは結構ヒマなところ……もとい、いつも大変だね」

　人の顔を見るや無礼千万な言葉を投げてきたダスプリーの頭を軽くはたき、ルブランに「ま、そんなところ」と声をかけて、彼女は自分の特等席のような扱いになっている椅子に深く腰掛けた。

「第一七号教育棟の裏でカツアゲをしてた男子学生三人を捕縛。落第街のホテルに入ろうとしていた一年生カップルを補導。学生街の青果店へ馬で突っ込んだ金持ち学生を拘束し、自ら交通整理をして店の復旧作業に尽力。今日も大活躍だったみたいじゃないか」

　一心不乱にタイプライターを叩き続けるルブランは、彼女の方に顔を向けもせず、アンヌのその日の「戦果」をあっさりと並べてみせる。最後の件に至っては、つい二〇分前に収拾がついたばかりの出来事だ。既に巡回勤務の時間を大幅に超過していた彼女は、おっとり刀でかけつけてきた同僚に後のことを引き継ぎ、一息つこうとこうしてカフェ・ド・ノートルダムにやってきたのである。

「もうここまで話が届いているのか。早耳だね、いつも」

「事件は現場で起きている。だけど、報告は会議室にあがるよりも早く、ここ、僕たちのところに上がってくるのさ」

　トランプを積み上げてタワーを作りながら、くつくつと笑うダスプリー。全く、呆れた耳の早さだ。彼女が、職務的に相容れないはずの彼らと奇妙な縁を結んでから、既に二年が経過している。

　黄色い道化師に怯える新米警官の姿は過去のものとなり、アンヌは風紀警察の凄腕衛視として一目置かれる存在になっていた。

　あの日の屈辱が、彼女にそうした道を歩ませた。その決意を後押ししたのが、アンヌが敬愛するJJ先輩の薫陶と、そして――彼らとの交流だったことは、紛れもない事実である。

　学園の秩序、それ以上に学生の平和と安寧を守ることを最優先事と定めた彼女にとって、友人と呼べる存在はさほど多くなかった。警察とマスコミ。コインの裏表のように無限遠の立場であったことが、却って彼らの距離を近づけることになったのだろう。

「現実と虚構は積極的に混同していった方が、人生何かと潤いがあって面白い」と嘯(うそぶ)き、常に何かしらの記事を執筆し続けているルブランに比べ、彼女と接点が多いのはダスプリーの方だった。

「サルヴァトーレ」なる筆名で、島内の奇妙な場所を紹介する〈学園奇観城〉という連載を第三報道部の新聞に持っている彼は、カメラを片手にディフ島のあちこちに出没する。巡回中に出くわすこともあれば、非番の時に取材に付き合うこともあった。

　アンヌが、同僚たちの誰よりも学園の地理に通じることになったのは、偏にそうした経験のお陰だろう。

　その彼について、ちょっと気になっていることがある。

　自他共に認める色男のジャン・ダスプリーは、取材にかこつけて言葉巧みに女子学生を口説いては、浮名を流してきた。一、二度ばかり、彼が下級生をひっかけてきた時には流石に注意せざるをえなかったが、多くの場合、彼女がダスプリーの自称「恋多きパリジャン」っぷりをとがめだてすることはなかった。

　だけど、つい半月ほど前。早朝の巡回中にアンヌが目撃した光景――ある女性とダスプリーが、建物の入り口で深い口付け(ディープキス)を交わすのを見てしまったことは、彼女に予想外の動揺をもたらした。

　相手の女性は胸元を大きく開いたバスローブ姿で、大人の男女ならばかくもあろうというただならぬ空気が、二人の間に漂っていた。

　その女性は、彼女もよく知る人物。成績の上下で区別することなく、あらゆる学生に優しい態度で接してくれることから人気を集める女性教師、キザイア・メースン教諭だったのである。

　アンヌが気にしていることはもう一つあって、それは仕事絡みのことだった。二年前から、学園内で続いている奇妙なテロ事件。

　最初の内は、食堂の調味料の中身が全て入れ替えられていたり、

学生寮に大量の鼠が放たれたり、教育棟内の机が一夜にして全て前後逆にされたりといった、愉快犯的な犯行ばかりが続いていた。
　事件の発生タイミングや、犯行の手口に法則性が見出されなかったにも関わらず、同一犯の手口と見なされていた理由は、こうした事件が発生した現場に必ず一枚だけ残されている、トランプのカードによるものだった。毎回というわけではないにせよ、第三報道部を含むマスコミ系クラブに、当該カードを署名代わりにする何者かが予告状や犯行声明を送付することもあった。とりわけ人気を博していたのが、右往左往する当局をあげつらった風刺詩を得意とする〈ハートの7〉と呼ばれる人物である。
　いつしかその愉快犯的犯行は学園都市の風物詩となり、彼らが何かやらかす都度、風紀警察官たちは「またあいつらか」と肩をすくめるのだった。少なくともジャン＝ジャックは「気に食わないな。まるで、俺たちの対応を探ってるみたいだ」と言うのだけれど。
　いつしか、学生たちの間では、彼らはトランプの枚数――五三人からなる組織なのだという噂がまことしやかに流れていた。
〈五十三人委員会〉という、誰がつけたとも知れぬ名称と共に。
　噂はさらに一人歩きし、五十三人委員会の頂点に立つと囁かれる〈笑う男(ジョーカー)〉は、ある種の民俗学的トリックスターとして、噂話の格好の種となった。あらゆる権威を嘲笑い、あらゆる常識を覆し、あらゆる価値観を粉砕する、混沌よりの使者。
　この五十三人委員会の犯行が、最近になって俄かに過激なものとなり始めていた。学園の施設に爆弾が仕掛けられたり、黒ずくめの一団が成績優秀者を襲うような事件が起き始めたのである。無論、彼らの犯行の後には、トランプのカードが残されていた。
　警備部に所属するアンヌは捜査畑の人間ではないが、無関心でいられるはずもなかった。携帯式の電信通信器(エンジン・フォン)に連絡が入ったジャンが席を外している間、彼女はルブランが今書いている記事のこと、メースン先生とダスプリーのこと、そして、五十三人委員会のことをぼんやり考えていた。

だから、それに気付いたのは半ば、偶然のようなものだった。
「あ……！」
　突然、カフェの開け放たれた窓から突風が吹き込んできて、たちまちの内に、作りかけのトランプ・タワーを崩してしまった。
　よほど執筆が捗っているのだろう。ルブランは片眉をちらりと動かして、「おやおや」と口にしたのみ。となれば――。
「やれやれ、仕方ないな」
　残るはアンヌしかいない。彼女は、テーブルの上と床に散らばったトランプを一枚づつ拾い集めた。

　その　時　だっ　た。彼女　が　それ　に気付　い　たのは。
　髪の毛が逆立つような感覚。ダムに入った亀裂の第一発見者になってしまったような時に脳髄を揺さぶるだろう、切実な恐怖。
　まさか、まさかまさかまさか。そう思って、もう一度確認した。ない。もう一度だけ、確認した。ない。やっぱりない。
　ダスプリーの私物であるそのトランプには、五二種のカードしか存在しなかった。〈ハートの7〉が、欠けていたのである。

「ジャン・ダスプリー三年生。脅迫、器物損壊、騒擾をはじめ、三四の容疑に基づいて、あなたの身柄を拘束します」
　彼女自ら、その言葉を友人に告げたのは、アンヌがその発見をしてから、三週間後のことだった。
　直接の上司であるジャン＝ジャックのみに事情を打ち明け、極秘裏に捜査を始めた彼女がその後、新たに見つけ出した証拠の数々は、彼女の疑惑を裏付けるものばかりだった。
　ダスプリーの弄んでいたトランプの種類は、あの日のつい数日前に、風紀警察へと送付された〈ハートの7〉と一致した。
　例え、そうした証拠が見つからずとも、友人に手錠をかけられた瞬間、彼の眼に浮かんだ不敵な輝きが、全てを物語っていた。

——ああ、やっぱり……。

ダスプリーは肯定も否定もしなかったが、アンヌは彼が「黒」だと確信した。信じたくはなかった。同時に、信じていたかった。

そして、はっきりとわかってしまった。

彼女にとって、学園生活の大きな部分を占めていたはずの聖域（サンクチュアリ）が、終わりの刻を迎えたのだということを。

そこから先は、何もかもが洪水のような勢いで押し寄せてきた。

風紀警察本部に連行されていた容疑者の身柄を、学園統治会の召喚状を携えた使者が横合いから奪い取るように連れ去っていき——アンヌの抗議は聞き入れられなかった——、ジャン・ダスプリーは今、都市の中心に屹立する黒の尖塔、ディフ塔の最上階にいる。

統治会の人間、あるいは塔に招かれた人間以外は入ることができないという、学園最大の謎ともいうべきその場所で彼を待ち受けていたのは、男子学生から構成される《フラタニティ》のラフカディオ・ハーン主宰とポール・ゴーギャン。そして《ソロリティ》のアメリア・イヤハート主宰——最上級生である五年生の姿。

そして、彼ら三人を背後に控えさせた、一人の学園教師だ。

「ようやくお会いできたね、第三報道部のジャン・ダスプリー君。それとも、〈ハートの7〉と呼ぼうかね？　お初にお目にかかる、私はフリードリヒ・ニーチェ教授。統治会の顧問を務める者だ」

自ら「教授」を名乗るあたり、この男の虚栄心が透けて見える。その名前はダスプリーも知っていた。以前、ルブランが大々的に記事に取り上げた、XX（ダブルクロス）計画の中心人物と目される男。

この学園都市の学生たちに、時折発現する異能（アート）——その持ち主同士が、自分たちにもよくわからない理由で相戦い、重傷を負った姿で発見されるという、奇妙な事件が不定期に発生していた。

ルブランは、この事件を異能者（アーティスト）同士をぶつけることで、能力の成長と進化を目論む何者かによって仕組まれた、ある種の実験だと主張した。そして、こうした事件が起き始めた昨年度の頭に赴任してきたフリードリヒ・ニーチェ教諭を黒幕として名指ししたのである。教諭がかつて発表した、超人思想にまつわる論文がその論拠とされたのだが、最も優れた異能者（アーティスト）が選ばれるという統治会の「顧問」を彼が名乗った以上、友の主張は真実を射抜いていたのだろう。

何しろ、その格好からして尋常ではない怪しさだった。

その男は、全身を闇色で包んでいた。夜の闇を映したような黒々としたマントを纏い、頭全体を円錐形の覆面で隠している。

覆面に赤く描かれているのは、二つの角が欠けた、奇妙な形の赤い五芒星。中心には一つ目が描かれていた。

「見たまえ！　一眼英雄（サイクロプス）たるラフカディオ・ハーン、野獣（ビースト）たるポール・ゴーギャン、大天使（アークエンジェル）たるアメリア・イヤハート！　この場にはいないが、嵐（ストーム）と戦術士（ガンビット）もそう。実験に実験を重ねた成果が彼らだ！　現統治会の諸君こそが、我が恵みを受けし子供達なのだ！」

聞かれもしないことを、声高に話し続けるニーチェ自称教授。

三人は無表情で、内心を推し量ることは難しい。選ばれた者の誇りもなく、自負もない。それだけが、沈黙から伝わってくる。

「さて、ジャン君。君たちの新聞のお陰で、我が計画は微々たりとはいえども、些少の遅れを来たすこととなった。これは実に憂慮すべきことだ！　君は、ちっぽけな鼠だが、獅子の尾を踏もうというその蛮勇には、心よりの敬意を表しようと思う」

「それはどうも」

「しかし、その鼠がかの忌々しい、我が洞察力をもってしてもその実態を捉えきれぬ不穏分子、五十三人委員会に関わっていると知れたからには、このまま野放図にさせておくわけにもいかぬ。大事な収穫物を荒らす害獣には、相応の罰を与えなければな」

要するに彼は、全てを計画通りに進めないと我慢のならぬ性質なのだ。過去の失敗に起因するのか、不確定因子を全て潰さないと気がすまないのだろう。だが、今回に限り、その慎重さは滑稽だった。

「君に聞きたいことは実に単純だ。五十三人委員会とやらの実態とその構成員、何よりも君たちが首魁と仰ぐ、〈笑う男（ジョーカー）〉なる人物の

正体を教えていただこう」
ここが、ジャン・ダスプリーの我慢の限界だった。先ほどから体を小刻みに震わせていた彼は、決壊したダムのような勢いで――。
「あはは！！！！！」
抑えようにも抑えきれぬ、つま先から頭のてっぺんまで、魂の奥底で何かを爆発させたような、哄笑、狂笑、呵々大笑。
無邪気な子供の如く底抜けに陽気で、どこまでも楽しげな、耳を弄するような大爆笑が、このディフの塔の頂上で、ホールの大気そのものを振動させ、床と壁から反射して何倍にも増幅された。
人は、これほどの声をあげて、全身で笑うことができるのだ。
居合わせた者たちの全てが、呆気にとられながら、轟然と高笑いを続けるその男を見つめていた。見つめる他はなかった。

L'Aventurier――アバンチュリエ

ジャン・ダスプリーは目尻に涙すら浮かべて全身を震わせ、嘲り笑い、戯れ笑いながら言葉を発した。
「ああ、計画！　計画！　お前たちは、本当に計画ってやつが大好きだな！　陰謀！　作戦！　深謀遠慮！　ああまったく、お前たちはいつもそうだ！　いつもそうやって、世界を掌の上に乗せたいと欲し、状況を操りたいと欲し、時計や巻尺、分度器を持ち出して日程表を切ろうとする！　何ともご苦労なことだ！　お前たちの勤勉さにはいつも頭が下がる！　だから、だからお前たちは破られる。敗北する。僕の衝動に、瞬発に、反射に、短慮に、凌駕される！」
アメリア・イヤハートが、吸い寄せられたように彼を見つめる。
「……まさか、あなたが……〈笑う男〉だとでもいうの……？」
〈笑う男〉？　〈笑う男〉だって？　まだそんなことを言ってるのか、お前たちときたら。マルセイユ学園都市の頂点に立つ自分たちに逆らうからには、相手もまたそれだけの組織が、規模が、計画があると言いたいわけだ。信じたいわけだ」
笑いの発作に邪魔されて幾度も言葉を中断しながら、ダスプリーがようやく口にする。
「その通りだよ。〈ハートの7〉――いや、〈笑う男〉であろうと関係がない。君たち、五十三人委員会がそうなのだろう？」
よほど、自らの実験場たる学園をうろつきまわる鼠の尻尾を捕らえたことで、気分を良くしていたのだろう。
ニーチェの声は、文字通りの猫撫で声だった。だが――。
「だからさあ、そんな奴らは最初からいない、ないんだってば！」
嘲けりを込めて言い放つ、ダスプリー。
「いないだと？　現に数多くのテロが起こされ、少なからぬ被害が発生し、ここにこうして君が捕らわれている。君はよもや、自らの存在すらも幻と定義するのではあるまいね？」
「言い直しますよ、五十三人委員会なんて物好きな連中は、本当に存在しない。当然、〈笑う男〉なんてふざけた奴だっていやしない。いたのは、この僕ただ一人だってことさ！」
「何……？」
ニーチェの声音に驚愕の色合いが混ざる。
「ま、便乗してきた愉快犯もいたみたいだけどね。その辺も織り込んで毎回、わざわざ違う種類のカードを残したんだよ、僕は」
闇色の頭巾の下で、彼がどのような表情を浮かべているのかはわからない。彼は慎重な様子で、言葉を選ぶように問いかけた。
「ジャン・ダスプリー君。では、君の好意にすがることにして、いくつか質問させていただこう」
「どうぞ、何なりと！　《十字騎士》殿！」
若造の発言に気を取られていた彼はこの時、真に憂慮すべき情報――ジャン・ダスプリーが、統治会の面々すら知らぬ、《結社》における彼の称号を知っているという事実を見落としていた。
「まず第一に。では、五十三人委員会なる反統治会組織が実行した

とされている事件の数々は、君が起こしたということかね？」
「一切合財！　と、言いたいとこだけど、まあ一から十の内の八くらいまでだね。残りは名前も顔も知らない、ただの便乗犯さ」
「第二に、新聞を騒がせた予告状や、当局をからかう詩の類は？」
「かくいう小生がしたためてございますよ、閣下。残念ながら、その証拠まで提出することはできませんけどね！」
「なるほど、それだけ聞ければ十分だ」
《十字騎士》は満足したように、右手の指を囚人に向けた。
「ならば、マルセイユ学園都市は、理事会の名において君に全ての罪を問うことになるだろう。君が五十三人委員会の一員であろうがなかろうが、《笑う男(ジョーカー)》であろうがなかろうが、関係なくね」
「それがですね、教授殿」
　ダスプリーは皮肉たっぷりにニーチェを揶揄する。
「生憎と審問会への出席はキャンセルさせていただきますよ。次の約束がありましてね」
「君の正気を疑いたくなってくるな、ジャン君。君はこうして今、この場所に、ディフの塔の中枢部に連れて来られているのだよ。君を取り囲んでいるのはいずれ劣らぬ優秀な私の教え子だちだ。我が計画によって強力な異能(アート)を身に付けた彼ら一人一人が、君ごときが十人かかっても打ち倒すことのできぬ超人たちなのだよ」
《十字騎士》の声音に、苛立ちが増していた。
「かの《白い男》にでもなったつもりかね？　過剰な自信を抱くのは若者の特権だ。君が自らをある種の超人だと見なしているとしても、それはむしろ当然のことで、それを否定はせぬよ。だが、それは愚か者の所業だ……人の話を聞きたまえ！」
　これみよがしに欠伸などしてみせるダスプリー。
「教師の講義というやつはいつも退屈で、眠くなっていけませんね。では、学生らしく僕も答弁するとしましょう。そう、あなたの仰った通り、ここはディフの塔の中枢部。あなた方が、わざわざここに連れてきてくれた。僕がたった一つ、計画というものを持っていたとすれば、それこそが――ここ。鐘に招かれた者しか入れないディフの塔の中枢部に、こうして辿りつくことだったのさ！」
「何だと、それはどういう……！」
「教授、もう十分でしょう。ここは、我々にお任せを」
　それまで沈黙を続けていたラフカディオ・ハーンが、重々しく口を開く。その声に宿る重みは、十万学生の頂点に立つ統治会、その《フラタニティ》主宰ならではの誇りによるものだろう。
「後は、君の体に直接聞かせてもらうことにする。最初は、教育的指導からだな。君にはまず、目上の者に対してとるべき態度というものを我々自ら指導することにしよう」
　彼の言葉を受け、ゴーギャンがうっそりと歩み出て、ダスプリーの体に手を伸ばす――次の瞬間、野獣の巨体が宙を一回転し、うつ伏せの状態で黒曜の床に叩きつけられた。
　ダスプリーの右手、その人差し指と中指が、後ろ手の状態になっているゴーギャンの左手首を搦めとり、関節を極めている。
「エレガントじゃないなあ、先輩。あなたは絵描きなんでしょうに、腕の扱いはもっと大事にしましょうよ」
　ダスプリーの声には、呆れ果てたというような響きがあった。
「なに、僕には東洋武術の心得がありましてね。これは極東の美しい国、リュウキュウの王家に伝わる、御殿手(ウドンディ)の妙技です」
　だが、余裕たっぷりのその背後で、クラッキング光の翼が伸びる。
「背中がお留守になってるわよ、ダスプリー」
「……うわっと！」
　四枚の光輝く翼を背負った大天使(アークエンジェル)アメリア・イヤハートが、ダスプリーの背後に浮かんでいた。彼女の両腕から、それぞれ一枚づつ伸びた光翼が鉤爪のような形に変化し、彼の肩をがっと掴みあげると、空中高く放り上げる。
　それを見た、ハーンが左の眼帯をずらすと、緑色のクラッキング光がそこから溢れ出して巨大な腕の形になる。
統治会長、一眼英雄(サイクロプス)ラフカディオ・ハーンの異能、妖精の腕(スプリガン)が空

を舞っていたダスプリーの体を掴み取り、ゴーギャンの仇だとばかりに床に叩きつけた。
「くそ、付け焼刃じゃこれが限界か……」
何とか受け身を取れたものの、全身の骨が砕かれるような衝撃に彼の顔が歪む。その後も、激しい攻撃が次々と加えられた。
「おやおや。先ほどの威勢の良い様子はどこにいったのかな、ジャン君。もうすっかりボロ雑巾のような有様じゃないか」
教え子たちの戦いぶりに気を良くしたのだろう。再び楽しげな様子を取り戻したニーチェが、彼の囚人に声をかけた。
制服のいたるところにかぎ裂きを作り、全身に打撲傷と痣をこしらえ、口の端からだらだらと血を流しながらもなお——。
「は、は……はぁッ！」
ジャン・ダスプリーは笑い顔を作り上げて見せた。
「お行儀よくチェス盤に乗っかってくれていると思ったのかい？クイーンにキングにビショップ、お気に入りの駒で取り囲んでポーンひとつ、簡単にとれるとでも思ったのかい？ 残念(ざんねーん)でした！ 僕は、勝った気でいる奴のツラに向かってチェス盤をひっくり返してやるのが大好きなんだ！」
口元を袖口で拭ってそう言い放つや、彼は——ひとつながりの呪文めいた、ラテン語の一節を詠唱した。
「Visita Interiora Terrae Rectificando Invenies Occultum Lapidem.
（大地の内を訪れ、正当に隠されし石を見出す）」
その言葉の頭文字をつなぎ合わせると、「V.I.T.R.I.O.L.」。
硫黄酸を意味するラテン語となる。
それはまた、神秘学者や錬金術師、ヘルメス学者たちの間で、水銀との哲学的婚姻——大いなる作業(マグヌス・オプス)を経て、賢者の石を生じるとされる重要な物質でもある。
それが、起動暗号(キーワード)だった。ダスプリーの朗々たる音声でその言葉が発せられるや、突然、ホールが真っ暗になった。
ホールを煌々(こうこう)と照らし出していた機関燈(エンジン・ライト)が消えたのである。塔内で常に聞こえていた、虫の羽音めいた振動も止まっていた。
「な、何だこれは。何なのだ、これは！ 私は聞かされてないぞ、こんな機構(システム)の存在は！ 《黄金王(ローゼンクロイツ)》閣下……！」
「ディフの塔が沈黙しました……いかがいたしましょうか？」
相変わらず、自分だけに通じる何かの冗談を楽しんでいるような、陽気なダスプリーの声だけが聞こえてくる。
「面白い。ジャン・ダスプリーとやらがどこまでやるか、見てみるとしようぞ！」
自問自答、その場にいる誰の答えも求めていない、突き抜けたエゴイズム。確かに、ジャン・ダスプリーは鼠に過ぎない。だが、それは泰山を鳴動させる堂々たる鼠一匹であったのだ。
そして、その声に応じるように、ホールの中心に紫色の光点がいくつもぼうっと浮かび上がり、合成音めいた声が韻々と響く。
——Sunt vos an Adventurer?（汝は冒険者(アバンチュリエ)か？）
それは、ディフ塔の機構(システム)の扉(バックドア)の背後で、長きに渡り眠り続けてきた、管理頭脳(アドミニストレーター)の問いかけであった。
ダスプリーは当然のような顔で、その問いかけによどみないラテン語で答えていく。予め、その問いを知っていたかのように。
「Nemo est non.（そうでない者はいない）」
声の聞こえてきた方向にあたりをつけて、大天使(アークエンジェル)の六枚の光翼が次々と継ぎ合わされ、巨大な一振りの鞭となってダスプリーを横薙ぎにする。確かな手応え。口から血を吐きながら、ダスプリーはなおも戯れ笑いを浮かべたまま。
彼を目掛けて一眼英雄(サイクロップス)の左眼から放たれた緑色の破壊光線(オプティックブラスト)を横っ

飛びにかわし――。

――Es vos qui transit in catadupa nomine Danger, vultus nam veritas legend trans ibi?（危険という名の滝を潜り抜け、その奥に伝説の正体を求める者か？）

「Nemo est non.（そうでない者はいない）」

問答が再度繰り返された。光が満足したように明滅し、ゆっくりと回転するその只中に、ジャン・ダスプリーの姿が浮かび上がる。いつの間に取り出したものか、その右眼には愛用の単眼鏡（モノクル）が再び着用され、生き物のように蠢く赤黒い光を点していた。

――Si, me interroges.（ならば、我を求めよ）

がこん、という音がした。

統治会の三人の顔に、驚きの表情が浮かぶ。そうだろう。その瞬間、彼らの異能が、突然、喪われてしまったのだから！

しかし、十万学生の頂点という称号は、伊達ではなかった。

「ダスプリー、貴様、丸見えだぞ！」

獰猛な叫びをあげたゴーギャンが、砲弾の勢いで、ダスプリーに殺到する。異能が使えずとも、肉弾戦なら――そう判断したのだ。

細身の彼はひとたまりもなく吹き飛ばされ、派手な音を立てて床の上を転がった。倒れた時に顔を強打したのだろう。だくだくと流れる鼻血が、ダスプリーの顔の下半分を汚していた。

「ブラーヴァ！　ラグビーでも活躍できますよ、先輩！　でもね」

再びがこん、という音。塔が再び振動を始める。選ばれた学園学生に異能を与える機構（システム）とは別の、何かが起動していた。

「いい位置に飛ばしてくれましたね、感謝しますよ」

よろよろと立ち上がったダスプリーが、ホールの中心に描かれた光の円に飛び乗った。

「では、僕はこの辺でお暇させていただきますよ。諸君はここで好きなだけ時間をかけて、計画なり陰謀なりを企んでいるといい！」

光の円が屹立して柱状に伸びていき、ダスプリーを乗せた床が、昇降機（エレベーター）のように沈んでいく。

「これにておさらばだ、統治会の諸君！　そして、《十字騎士》フリードリヒ・ニーチェ殿！　本物の教授に会ったら、この僕がよろしく言っていたと伝えてください！」

ややあって、ジャン・ダスプリーの全身が床の下に飲み込まれ、異能を喪って手の出せない統治会の三人と、屈辱にわなわなと身を震わせる《十字騎士》だけが後に残されていた。

Le Creuse Grande――大空洞

「白鳥ってさ、あんなに綺麗に水面を泳いでいくけどさ、水中では死に物狂いでバタ足してるんだ。カッコつけるのも大変だよね……あ、そこ触らないで、ポッキリいってるから、骨」「はいはい」

文字通りの意味でボロ雑巾のような有様になっている彼の、全身隈なく痣だらけ、傷だらけになった裸の上半身を、柔らかなクラッキング光が撫でるように動いて、損傷箇所を癒していく。

ディフの塔、その最下層の少し手前にある踊り場めいた空間で、満身創痍のジャン・ダスプリーの傍らに、統治会《ソロリティ》の一年生、フロレンス・ナイチンゲールの姿があった。

嵐（ストーム）の異名を持つ彼女の持つ多彩な異能（アート）には、治癒能力が含まれる。異能者（アーティスト）同士の戦いを煽り立てるニーチェの計画で、負傷者が続出するのに心を痛めていた彼女は、密かに被害者の治癒を行っていた。そして、彼女のその勇気ある行動が、ハーンたち統治会の面々に、今回の行動を選択させたのである。

即ち――《結社》の走狗たるニーチェへの造反を。

「いやあ、回復役が控えていてくれるとわかっててもさ、一方的に痛めつけられるのは結構骨だね。あ、これ駄洒落だから」

ディフ塔の予備機能（サブプロセス）実行と強制再起動（リブート）から数十分が経過し、既に異能（アート）は復活していた。ただし、塔の機構（システム）は学園都市の大機関（メガエンジン）と連動しているので、今頃は未曾有の大混乱が巻き起こっているはずだ。

　今や彼は、名実ともに学園を脅かす破壊者（テロリスト）だった。

「まったくもう、先輩方――ジャン先輩も、無茶しすぎですよ」

「ありがと、フロリー。大分楽になった」「どういたしまして」

　フロリーというのは、この奇矯な先輩、ジャン・ダスプリーが一方的に彼女につけたあだ名である。

　彼ら統治会と、ジャン・ダスプリーが接触したのは、二ヶ月ほど前のことになる。二年生メンバー、戦術士（ガンビット）ウィルヘルム・ライヒが蒐集したデータをもとに、ハーンらが分析を加え、〈ハートの7〉のカードが残されていた現場と、連載記事「学園奇観城」の場所の連動性からダスプリーの存在を炙り出したのだった。

　熾烈な戦いがあった。ダスプリーもこの時は惜しみなく彼の異能（アート）を使い、双方小さからぬ被害を受けたところで、休戦を申し出たのは他ならぬ一眼英雄（サイクロップス）だった。

　彼は、ダスプリーの目論見が別のところにあるのだと看破し、ニーチェ一派を追い出すにあたっての協力を要請したのである。

　自ら虫を獅子身中に引き込んだ上で、学園の中枢機構（システム）を停止させたとあっては、《十字騎士》と雖（いえど）も責任追及は免れない。

「だけど、それだとあなたたちも責任を被ることになるのでは？」

　という疑問に対し、上級生三人は堂々と言ってのけたものだ。

「無論、我々三人も共に引退することになる。以後は研究部にでも引っ込んで、学園の行く末を見守ることにしよう。後はこのライヒとナイチンゲールたち、輝ける若者たちが何とかしてくれる！」

　あまりといえばあまりの丸投げに、流石のライヒも血相を変えていたが、ゴーギャンの説得で不承不承後事を引き受けたのだった。

　ダスプリーの逮捕という不測の事態によって、突然の決行を余儀なくされてしまった。今頃、ライヒは学園各所を走り回り、混乱の沈静化に尽力しているところだろう。そして、もう一つ――。

「私たちの共闘は、ここまでです。今頃、ライヒ君が塔内に引き込んだ風紀警察の警備部隊が、地下を目指して迫ってきていることでしょう。そして、先頭に立っているのは……」

「わかってるよ。たぶん、彼女だ」

　ダスプリーは確信に満ちた口調で言うと、彼女が持ってきてくれた着替えの制服に袖を通した。

「よし、これで恰好もついた！　そっちの制服は今日この時を記念して君にあげる。第二ボタンでもむしっておいてよ」

「行ってしまわれるのですね。本当は、あなたのような方が統治会（わたしたち）に協力してくださると良かったのですけど……」

　苦笑交じりではあったが、それは彼女の本心だった。

「もう、ジャン先輩の記事を読めなくなってしまうんですね」

「ナイチンゲール。可愛い小鳥の名前なのに、嵐の夜という激しい名前でもある。君にぴったりだよ。君たちに君たちの道があるように、僕にも僕の道がある。僕の方はまあ、君たちほど輝かしいものじゃないけれど、まあ、それもダイスの出目次第ってやつさ」

　後輩に予め預けてあった写真機（カメラ）を開いて、中に嵌め込んであった黒い宝石――面の一つ一つに古代エジプト時代の数字が刻まれた函形二十四面体（トラペゾヘドロン）を取り出した。その写真機（カメラ）は、単眼鏡（モノクル）との対で第二先端科学部のドクトル・P（ペー）が開発した、特注の機械装置（ガジェット）だ。

「暗黒王朝時代に、《死の影》と呼ばれた宝石さ。かつて、バンデルカンドの王子と共に東インド会社と戦ったある男が、学園都市ができるずっと前に、この島で手に入れたもの。さ、見てごらん」

　彼の捧げ持つ二十四面体から放たれている赤黒い光が、束ねられて一本の光線となり、床の一点を指し示した。

「こいつは、僕がずっと探していた《翠石の女王（クイーン・エメラルダス）》――エメラルド・タブレットと引き合うんだ。ディフ塔の機構（システム）に干渉されてずっと見つからなかったんだけどね、ようやくこれで接続できたよ」

　その光を見つめる彼の瞳は、無垢な子供めいたきらめきに満たされて――先輩、あなたの道にもきっと、輝きがありますよ。その言

葉を、ナイチンゲールは結局口にしなかった。

「やあ。君はきっとここまで来てくれるって思ってたよ」

「よく言う。あれだけこれみよがしの目印を残しておいて――！」

ディフ塔の地下に雪崩れ込んだ風紀警察の機動部隊は、複雑な迷宮のような塔の地下で八方に散って、逃亡犯の探索にあたっていた。

そこで彼女の眼に入ったのは――壁面に白いチョークで描かれた、女性の横顔のマーク。カフェ・ド・ノートルダムのシンボルだった。

同僚を呼び寄せることも忘れ、彼女は一心にそのマークを辿っていった。そして今、ディフ島地下の大空洞において、彼と彼女――かつて互いを友人と呼んだ男女が、一対一で対峙していた。

周囲を埋め立てられ、巨大な人工島となったディフ島。その旧島部分の最深部。三〇メートルほどの高さがあるドーム状の天井と壁は強固な岩盤で覆われ、海水が入り込んで地底湖のような景観を作る水面には、玄武岩の柱がそこかしこに屹立している。

その只中に――紡錘状の細長い機械、いや、鋼鉄で船体の上部を含む全面を鎧われた一隻の艦(ふね)が存在していた。

前部には昆虫の複眼を思わせる窓がいくつもあって、この艦の神秘の源、《翠石の女王》が発する翠色(エメラルド)の輝きが漏れている。

「なるほど、この艦がお前の目的だったというわけか。ジャン」

「その通りさ。フランス王国秘密情報部における秘匿名称〈ハートの7〉。かつて、ある組織が東インド会社との戦いで使用した、万能潜水艦《ノーチラス》だよ！」

第三報道部のカメラマンにして記者、ジャン・ダスプリー。

風紀警察警備部の衛視、アンヌ・ベアール。

真逆の立場で出会い、二〇〇日以上の長い時間をかけて友情を育み、そして今、学園の秩序と平和を脅かす者と、守る者という立場で再び相見えた彼ら。潜水艦の上部ハッチに轟然と立つダスプリーに、桟橋上に立つアンヌは、ゴム弾を装填した衝撃銃を向けていた。

「秘密情報部……本国のスパイだったのか？」

「ややこしい話だけど、そういうわけでもなくてね。僕が本国のえらい人から依頼されたのは、こいつの設計図の探索だけ。そっちはとっくに見つけ出して、提出済み……だけどね、僕はここに、この島に現物があることを前から確信していて、そのためにわざわざ、探索依頼が僕のところに持ち込まれてくるよう、色々と仕組んでおいたんだ。ああ、心配しなくてもいいよ。設計図通りに造ったところで、この艦は動きやしない。肝心要の《翠石の女王》が欠けているからね。戦争に利用されたりすることはないさ、決して」

「では……お前は何者なんだ」

「僕かい？　僕はまあ、物欲と知識欲、その他諸々の欲望の権化さ。この飽食の大機関時代に、何もかも全てを手に入れたくて仕方がない、七つの大罪の体現者とでもいったところかな」

あくまでも冗談めかした口調を変えず、単眼鏡(モノクル)を持ち上げたダスプリーの瞳は、統治会の学生たちと同様、黄金色の輝きを宿していた。アンヌの方は、小刻みに震える体を汗が伝い、その顔には苦悶とも怨嗟ともつかない表情が浮かんでいる。

「戯れ言を……ならば、私もお前の計画の一つなのか。これを、こんなものを探し出すために、風紀警察の私を利用して……！」

血を吐くような叫びだった。その時初めて、ダスプリーの顔からからかいの色が消えた。むしろそれは、戸惑ったような――。

「今更、信じてくれっていうのも、虫が良すぎるよね。第三報道部を隠れ蓑にして、異常現象を調べていたのは確かなんだけど、君に会ったのは、偶然。最初は、仕事の余暇みたいなものだった。でも、君とモーリスと三人でつるんで、ずっと楽しかった」

アンヌの顔が、それを聞いてますます歪む。疑いの気持ちと、信じたいという気持ちが彼女の中で激しく戦っていた。

「僕はこれまで学校ってものにまともに通ったことがなかったから、何て言えばいいんだろう。映画みたいな毎日だったよ。生まれて初めて、あたりまえの子供みたいに生きることができたんだ」

「それなら、どうして……裏切り者……！」



彼女の言葉は、だけど、もうダスプリーには届かない。

彼の持つ函形二十四面体（トラペゾヘドロン）と呼応したのか、あたりに機械音が響き始め、長き眠りについていた鋼鉄の棺桶が覚醒を始めたのである。

「アンヌ！」

彼女を追ってきたのだろう。洞窟の入り口からジャン＝ジャックの声が響く。彼の眼に、今しもハッチの中に体を滑り込ませようとしている、彼と同じファーストネームを持つ男子学生の姿が映る。

「ジャン・ダスプリー、貴様あっ！」

衝撃銃を向けた彼が、その引き金に手をかけた時、

「やめてぇッ！」

泣き叫ぶようなアンヌの声が、ジャン＝ジャックの耳朶を打った。

無意識の叫び。鋼鉄の巨龍（リヴァイアサン）が轟吼をあげる。

それは、マルセイユ洋上学園都市への、ジャン・ダスプリー――あるいはそう名乗っていた男の、別れの挨拶だったのかも知れない。

盛大な水煙を立てて、見る間に水底へと沈んでいく潜水艦。それが、ジャン・ダスプリーという名の男の、永遠の見納めとなった。

Votre nom ――君の名は

「こんなところにいたのか、お前……」

黄金の川のようだった綺麗な髪をすっかりくすませ、化粧でも隠しきれない憔悴の色を全身に滲ませた後輩の姿を、ジャン＝ジャックが見出したのは、落第街の片隅にあるもぐりの酒場だった。

学園の心臓とも言える大機関（メガ・エンジン）の数十分に及ぶ停止、その責任を取る形での統治会の五年生たちの引退――ディフ島全土を巻き込んだ大事件から半年が経過し、その記憶も既に薄れ始めていた。

風紀警察に休職届を提出し、授業にも全く出席しないまま、アンヌはあれからずっと、あの日の真相を独自に調べ続けていた。

時折、ＪＪ宛に送られてくる封書には、彼が姿を消した日から一年前にまで遡る、ダスプリーの足取りを追跡した調査報告書が詰まっていた。それは、彼に結びつけられていた事件の内、怪我人が出たり、施設の破壊が行われた二割近くが、ダスプリーの犯行ではありえないことを完全に証明していた。しかしこの日、ＪＪには、彼女に伝えなければならないことがあった。

「……退学……？」「そうだ。特例中の特例というやつだな」

彼が持参した書類は、ジャン・ダスプリーを退学処分とし、学籍を永久に削除するという内容の、理事会からの布告だった。

「本国に照会したところ、ジャン・ダスプリーという人間はそもそも存在しないらしい。奴が、どんな手段で入学できたかについては、本国の政府関係者が手を回したのだと思われるが……」

「退学……ジャンが……」

ＪＪの言葉はアンヌの耳に届いていなかった。彼女はただ、その書類にはっきり記載された名前を、食い入るように見つめていた。

その様子を見て、しばらく一人にしておこうと踵を返したジャン＝ジャックの背中に、人間一人分の重みが委ねられた。

「すみません、先輩。しばらく、背中を貸してもらえますか」

「……いいぜ。こんな背中でよけりゃ、いくらでも貸してやるよ」

声はない。わずかな震えから、泣いているのだろうとわかる。

「先輩……風紀警察にはまだ、私の居場所がありますか？」

「ああ、勿論だ。いつでも帰ってきていいんだ」

ややあって聞こえてきた彼女の言葉は、一つの固い誓いだった。

「私はもう……この学園から退学者を出しません。絶対に」

そして月日が流れ、現在。一九〇九年のトラットリアで。

僕と彼女、アンヌ・ベアールは過去の出来事に思いを馳せていた。

「そうして君は、一人も死亡退学者を出さなかった。凄いことだよ、フランスはもちろん欧州の警察組織が、君の能力を羨むだろうね」

「……あんな思いをするのは二度と御免だったからな。本当に、苦労させられた。全く、罪な奴だよ、お前は」

僕はその言葉にぎょっとした。心臓を素手で捕まれたようだった。

背中全体から脂汗が吹き出すのを感じながら、僕はあらん限りの努力を振り絞って、動揺を表に出さないよう笑顔を作ってみせる。
「いやだなあ。あいつ(ジャン)ならともかく、僕が？　どうして？」
だが、うまくいかなかった。今や、ニヤニヤ笑いを浮かべてこっちを見ているのは、アンヌ・ベアールの方だった。
「私がわからないと思ったか？　ジャン・ダスプリー。いや、本当はそんな名前ではないのだろうな。顔形や背格好、声を誤魔化すことはできても、お前のその眼……生意気で、我儘で、傍若無人で、人を煙に巻いて、驚かせることが何より大好きで……本当に、何も変わっていないなお前は。あの頃と同じ、餓鬼のままだ」
無言で両手をあげて見せた。全面降伏、白旗である。
僕は異能(アート)を解除し、右眼にはめていた色付きコンタクトを外した。
そうして現れる顔は、かつてジャン・ダスプリーと名乗った男の面影を宿しつつ、細部では異なる――この僕の、真実(ほんとう)の姿だ。
悔しさとか、そういう感情はなかった。少なくとも僕にとって、彼女が今でも特別な存在なのだと、確かに証明してくれたから。
僕の異能(アート)、無名(ネモ)。それは、自分の見せたいと思った姿を相手に見せるという、擬態の能力だ。元々、僕の身に備わっていた変装術と演技力によって、それは完全なものとなる。
だけど、その能力こそが、僕の異能(アート)の最大の弱点でもある。
「自分の見せたいと思った姿を相手に見せる」――つまり、好意を抱いた相手に本当の僕を知ってもらいたい欲望をも、反映してしまうのだ。観念した僕の説明を聞いて、彼女は得たりと頷いた。
「なるほどな。その能力で、ハーン先輩たち統治会の複数名を相手に戦った時にも切り抜けることができたわけだ」
情報の出所はたぶん、フロリーだろう。全く、恐れ入る。
親から悪戯を咎められる子供のようなもので、僕としてはグウの音も出ない。そんな君のことが、僕はたまらなく好きだったんだ。
僕たちはそれから、「あの後」のことを話し合った。
アンヌが結局、一年留年してしまったこと。何とか情報を聞き出そうと新統治会に何度も面会を申し入れ、それがきっかけとなってフロレンス・ナイチンゲールと親しくなったこと。順当に学園都市を卒業したモーリス・ルブランに僕の方から連絡を入れ、パリで再会を果たしたこと。その彼が新聞社を休職し、小説執筆の取材と称してカダスに旅立ったまま、音信が途絶えていること――。
「そういえば、メースン教諭のことはどうしたんだ？　お前の……その、恋人だったのじゃないかと思っていたのだが」
「ああ、ママ・ジョジーヌね。あの人、僕のお母さん」
え、と驚きの声をあげるアンヌ。そりゃ驚くだろう。僕も、最初の授業であの人(ママ)が教室に入ってきた時は、びっくり仰天だった。
まあ、母子(おやこ)とは言っても血の繋がらない義理の関係で、どうしようもなく爛(ただ)れてもいたわけで、やっていることだけを見れば、恋人(ラマン)とさして変わらぬ間柄ではあった。
キザイア・メースン。あるいはジョゼフィーヌ・バルサモ。カリオストロ伯爵夫人。彼女が仕える神様に倣ったとかで孤児の僕を引き取り、良いことも悪いことも全て教えてくれた魔女(じょせい)。恥ずかしながら、僕の体全部の童貞は、彼女に満遍なく奪われている。
〈あの頃の私は、親として未熟だったのね。大事に育てたつもりの息子が、とんでもない不良になっちゃったんですもの〉
あの思いがけない再会の夜、ベッドの中で疲労困憊の有様になっていた僕に、ママは申し訳なさそうに告白してくれた。
〈それで、学校の先生なんかやってるの？〉
〈そうしたこともまあ、あるのかも知れないわね〉
ママのおっぱいからいつまで経っても卒業できない僕は、要するにまだまだ餓鬼なのだった。
「そのあたりについても、色々な話を聞けそうだな。よし、今晩は幸い非番にしてある。再会を祝して、飲みに行こうじゃないか！」
「了解ですよ、マドモアゼル」
敵同士として別れた僕たちは、僕たちが共に過ごしたこの学園で、こうしてまた友人同士として再会を果たすことができた。

ダイスの目（うんめい）というやつも、たまには気の利いたことをする。

「ああ、その前に――」

彼女がぐぐっと体を乗り出し、泳いだ金髪が僕の頬をくすぐる。

「君の本当の名前を、今度こそ教えてくれないか」

異存があろうはずもない。友達相手に隠し事はよくないのだから。

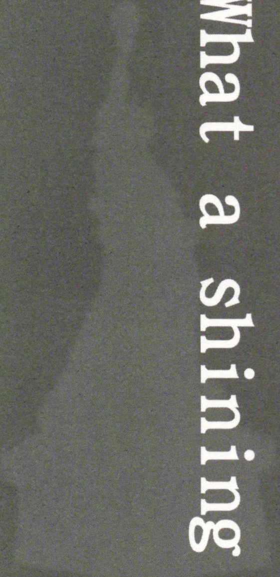
「アルセーヌ・リュパン――ごくありきたりな名前だよ」

（了）



What a shining league

文・鋼屋ジン　画・Ｌｅｍ





マン・オブ・スティール

『一九〇八年七月某日　決着三分前』

「輝きを持つ者よ。尊さを失わぬ、若人よ。
お前の声を聞いた。ならば、呼べ。私は来よう」
——ニコラ・テスラ。
思弁的探偵部部長。自称七二歳の転校生。雷電魔人。
「お前も聞くがいい。ダグラス・フェアバンクス」
不遜なほどに堂々と、傲慢なほどに堂々と——
「マルセイユ洋上学園都市（アカデミア）一〇万の学生諸君。
運命に呪われたお前たち、全員」
宣言する。眼前の〝獣〟に向かって。
「——私が、この手で、救ってやる」
すべてを救うと言ってのける。グラフィックノベルの超人が如く。
「GRRRR……！」
獣が唸る。否、姿は人に違いない。
その身、鋼を纏って。
素顔、仮面で隠して。
洋刀（サーベル）の切尖（きっさき）、突きつけて。
活劇の英傑（ヒーロー）のように。弱き民を守る銃士のように。
それは本来、尊いもの。それは本来、輝けるもの。
だが歪められてしまったもの。獣に堕ちてしまったもの。
地獄の底から響くような唸り声が——
口からこぼれる死臭が——
何より全身から溢れ出る殺気が——
それは、かのジェヴォーダンの獣を思わせる。
それは、オリエントに伝わる悪狐を思わせる。

狼？　狐？　否——
「ティンダロスの猟犬か。厄介なものに取り憑かれたな」
「GRRR……救う？　救うだと？　ふざけるなあァッ！」
獣が吼える。人間の言葉で叫ぶ——泣き叫ぶ。
咆吼。慟哭。轟音。
速度、人体の限界を超えて。血噴き出し、骨軋ませて、獣の彼は
疾走する。だが光速に迫る雷電を相手するには、あまりに遅く——
「今さら何を！」
否！　空間、白い彼の前でねじ曲がり——
ありえない方向、異常極まりない角度から、獣の彼が襲いくる！
「ニューヨークを救えなかった貴様が！
今さら！　何を言うんだ！」
負荷に耐えきれず、身体、悲鳴をあげる。いや、それ以上に——
「貴様如きが救えるものかよ！
無力な超人——マン・オブ・スティール！」
耐えきれず、こころ、悲鳴をあげて——

†††

——鋼鉄の男（マン・オブ・スティール）っていう、コミック作品なんだけどね。
——その作品の主人公なんだけど、これがまた、よく似てるんだ。
——きみのご主人（マスター）に。
——たったひとりで人々を救うために戦う、超人（スーパーマン）なんだ。

†††

「神も、私も、等しく無力だ」
（一九〇三年発行『スーパーマン』＃２５）

ダークナイト

――第三報道部のネリー・ブライです。
『三銃士』ダルタニャン役への大抜擢、おめでとうございます。

オーディションを受けてみないかと、部長のチャーリーから誘われたときは、正直に言うと少し怖じ気づいてしまったよ。フランスでは『三銃士』に対する思い入れも強いだろうし、実際、学園都市でもダルタニャンはフランス人学生が演じるのが定番だった。
今でも本当に僕が演じていいのかと不安で夜も眠れないよ（笑）
もちろん選ばれた以上は全力を尽くすつもりだ。

――昨年の芸術祭で喝采を浴びた『ロビン・フッド』でのブレイク以降、《学園都市のヒーロー》との声さえあがってます。

僕自身は、喧嘩はからきしなんだけどね（笑）
ヒーローとして評価されるのは純粋に嬉しいさ。
でも僕はそれだけの役者じゃない。常に新しい考えを取り入れて、挑戦者であり続ける。いつだって自分との戦いだよ。

――《白い男》の噂もあってか、ここ最近ヒーローブームの兆しが見えています。つい先日も空想的特殊撮影研究部が、合衆国の漫画(コミック)をモチーフにしたという新作を発表しました。

ああ……マン・オブ・スティールね。小さい頃は読んでいたよ。
だけど、僕はあまり好きじゃないかな（苦笑）
彼は高い空の上から人間を見下ろしている。まるで自分は神だとでも言いたげに。彼の正義はとても傲慢で幼稚だ。ヒーローとしての深みが足りない。所詮は子供騙しさ。

――ところで、話は変わりますが、《学園都市の恋人》メアリー・ピックフォードとの熱愛疑惑について……

ノーコメント。

（ラジオ番組『詩的平行四辺形(パラリログラム・ポエティーク)』
ダグラス・フェアバンクス独占インタビューより抜粋）

†††

『一九〇八年七月某日　昼休み』

「ダグラス・フェアバンクス。哲学科二年。
　そうそう、第七芸術部の〝快男子〟だよ」
「第七……。芸術部ってそんなにたくさんあるんですか？」
「ああ、違うんだ、ネオン。第七芸術ってのはね。映画のことさ。芸術の中で七番目に生まれた新しいジャンルだから、第七芸術。映画系の部活(クラブ)でも第七芸術部は特に多くの俳優を抱えていてね。
　彼はそこのスターってわけ。色男な上に、家はカリフォルニアの大地主で……女子に騒がれるのもわかるさね」
「何だ、ああいうのが好みか？」
「んー？　気になる、パパJJ？」
「やめろって。からかうな」
「ま、僕の好みじゃないかな、ああいう女たらし(ドン・ファン)は。とにかく醜聞(スキャンダル)の絶えない男でね。泣かされた女子も多いらしいよー」
「もー、男ってのはどうして、こう！
　そういうの、アルベールだけで間に合ってるよ」
「待てよ、イズミ。僕は女の子を泣かせたりなんかしないぞ？」
「何でも構わん。校則違反じゃなけりゃな」

「おやー？　二年生以下の不純異性交際は校則違反でしょ？」
「証拠がないんだろう？」
「そうなんだよー。スクープ狙ってるんだけどねー。ギリギリの所で尻尾を掴ませないんだよ……ありゃ、相当のやり手だな」
「だったら出る幕なしだ。それに今は落第街の方が忙しくてな」
「ああ……例の《Z》ですか」
「？？　シャルル先輩、何ですかゼットって？」
「最近、落第街を騒がせている怪人だよ。
　怪盗Zigomar（ジゴマ）の再来とも言われている。
……いや、怪人（ヴィラン）というよりはむしろ――」

†††

――所謂、自警学生（ヴィジランテ）という輩だ。
　被害者はいずれも、落第街の不良学生ども。中には腰の骨を折る重傷を負った者もいる。無論、我々風紀警察は、学生による私刑を認めていない。一部の学生からは《地下の騎士（ダークナイト）》などと持てはやされているがな。奴は三銃士気取りの、単なる違反学生（イリーガル）に過ぎん。
　違反学生同士の抗争など、本来は我々のみで対処すべき案件だ。だが今回はいささか特殊でな……もうわかっているだろう。だからこうして、お前に依頼しているのだ。
……その通りだ。件（くだん）の自警学生は異能使い（アート）である可能性が高い。
　被害者の多くは落第街で用心棒をやっていた異能使いだ。中には攻撃的な異能を持つA級異能学生もいる。そのような連中と渡り合える者など、統治会メンバーくらいのものだ――お前を除けばな。
　いや、まさかとは思うが……お前の仕業ではあるまいな？
……まあ、いい。いずれにしてもだ。それほどまでに強力な異能を持つ学生ならば、正体を隠し通すのは難しいはずだ。
　だが奴は神出鬼没で、まるで尻尾を掴ませない。異能検知器にも一切の反応なし。我々の警戒網を潜り抜け、違反学生を叩きのめし、刻印（マーク）を残して去ってゆく。そうだ、奴は必ず現場に自らの印を刻む。
それが奴の異名の由来――《Z》だ。

†††

ああ――上から――下へ――
した、へ――うえ？　上から？
わからない。もしかしたら、下から、上へ？

否。
地下（クンヤン）へ。

――落ちていく。
ぼく。違う。おれ、俺は、落ちていく。
「なぜ……おちる……？」
誰かが、言った。獣の声で。
それは、俺の喉から溢れ出る声だった。
ぼくの声。違う、俺の声。
手を――
手を、伸ばしていた。
落ちながら。獣の声に怯えるように。
あんなに遠い〝上〟へ――届きもしないのに――
獣が、どこかで嗤っていた。
鋭く伸びた注射針のような舌のぞかせて。
どこかで狙っているんだ。
落ちていくぼくを狙っているんだ。
ぼくを。俺を。
「ああ……おちる……」

†††

一九〇二年一二月二五日。《大消失》。
旧・重機関都市（メガエンジンシティ）ニューヨークが消えた日。失われた聖誕祭（ロスト・クリスマス）。
そう、消えた。そう、失われた。
すべて。そう、すべて。あらゆるものが。
クラーク・ケントは言った。「神も、私も、等しく無力だ」と。
くだらない。ふざけるな。そんな安っぽい台詞ひとつで、悩めるヒーローを描いたつもりか。それは、単に見捨てただけだ。諦めただけだ。現実に対して妥協しただけだ。
俺は知った。神などいない。すべてを救うヒーローも。
世界に意味はない。ひとは意味もなく死んでいく。
すべて。そう、すべて。あらゆるものは意味を持たない。
闇に虚しく吸い込まれるだけだ。もしも世界が意味を持つのなら、ひとが意味をこじつけた時だけだ。
だから俺は、この空っぽの世界に、意味を刻み込むと決めたのだ。
誰もが見捨てたとしても、俺は諦めない。決して妥協しない。
ヘンリー・フォードは言った。「すべてを忘れよう」と。
忘れるべき痛ましい出来事を克服した先に、すばらしい新世界（ブレイヴ・ニュー・ワールド）は来るのだと。
だったら、俺はこう答えてやる——「NEVER（いやだね）！」

†††

『一九〇八年七月某日深夜　落第街にて』

「おい、そこのお前。その辺で許してやれ」
落第街奥深く。不良学生すら寄りつかない地下の闇に向かって、白い彼——ニコラ・テスラは呼びかける。
闇の向こう。気配はほとんどない。だが、確かに、いる。
「ほう……？」
現れたのは〝獣〟だ。いや、姿は人に違いない。
その身、鋼を纏って。
素顔、仮面で隠して。
洋刀（サーベル）の切尖（きっさき）、突きつけて。
活劇の英傑（ヒーロー）のように。弱き民を守る銃士のように。
それは尊いもの。それは輝けるもの。
乱れることのない呼吸が——
引き締められた口元が——
何より全身にみなぎる闘志が——
それは、獲物を狙う鷹を思わせる。
それは、抜け目のない狐を思わせる。
鷹？　狐？　それとも——
「なるほど、そうか——お前が《Z》か」
「ブエノス・ノーチェス！　俺も貴様を知っているぞ。
学園都市最初の転校生。思弁的探偵部部長。雷電魔人。
そして……鋼鉄の男（マン・オブ・スティール）。ニコラ・テスラ」
そう言う仮面の彼——《Z》の足元には、溶接工の格好をした男が倒れていた。手酷く痛めつけられたのか、ぴくりとも動かない。
「血気に逸るのが若者というものだ。喧嘩のひとつもするだろう。
だが何事にも限度というものがある」
「犬がどうとか……問答無用で襲いかかってきたのは、こいつの方なんだが」
言って大仰に肩をすくめる。妙に芝居がかった仕草。
すべては芝居だとでも言いたげに。
「あいにくと俺は犬じゃない。〝狐〟だ」
「狐？」
「——I'm Zorro.（おれはゾロだ）」

†††

——例題です。

例題です。
ここに、ひとりの少年がいました。
少年は、穴に落っこちてしまいました。
それはそれは、深くて大きな穴です。
幾百万人もの人が落っこちた穴です。
みんなみんな、死んでしまいました。
少年も、死んでしまうはずでした。
天使さまの刃で、まっぷたつになるはずでした。
だけど少年は生きています。
誰かが助けてくれた？
単に運が良かっただけ？
それとも、どこか別の場所に落っこちた？
少年には、わかりません。
少年には、そんなことを気にしている余裕がありません。
少年は、全身傷だらけ。
痛くて、本当に痛くて、泣きそうです。
それにほら、穴の底には獣がいます。
獣は、おなかが空いてます。
獣は、少年を食べてしまおうと狙っています。

——どうすべきですか？

少年は、このまま動かずにいるべき？
少年は、瞼を閉ざして諦めるべき？
少年は、立ち上がって穴から這い上がるべき？

——それで、どうなりましたか？

地上に出られましたか？
それとも足を滑らせて、落っこちましたか？
そうして獣に食べられてしまいましたか？
それとも——

「そうだ。諦めるな」
「悪なるものが地の底で嗤おうと、お前の魂を穢すことはできない。
何故ならひとは、落ちても這い上がることを学ぶからだ」
「地下魔界(マガイ)の闇如き、惑わされるな。
闇の中だからこそ見える輝きもある」

†††

『一九〇八年七月某日　後日談』

緑が——
統治会領域には緑が多い。学園の噂。数多ある統治会にまつわる噂の、これは事実と合致する数少ない一例である。都市中央西部、統治会領域は通常の区域よりも高度がある。緑の多いそこは、時にこうも呼ばれる。
空中庭園、と。文字通りの空の庭園。空の緑。
外気に露出した部分では学園都市各地の小公園や大公園と同じく、幾らかくすんだ植物の緑色。世界の各大都市に比べれば、全盛期の瑞々しい緑に近くはある。
それでも、やはり、灰色がかってくすんでいるのは事実。
けれど——そうでない場所もある。
特殊な硝学製硝子によって、周囲を覆った環境を完全調整された人工庭園が、ある。この中の緑色は違う。
根本的に異なっている。本物の、かつての緑がある。
庭園は本質的に先進的実験施設であり、硝学製硝子を利用した、

疑似陽光で育成される植物も外のものとは大きく異なる。
瑞々しく美しい緑がそこにはある。かつてのままに。
そして、そのただ中にて。彼女は多くの時を過ごすという。
彼女——神学科の四年生女子。欧州宗教研究会の会長。博物学の碩学位さえ有しているとか。学園都市の才媛。
通称は〝御前の女神〟とされる。一〇万学生の多くに崇拝される女子学生統括組織ソロリティの主宰。
フロレンス・アメギノ・ナイチンゲール。
彼女は、ここで——カダス陶器のティーカップを傾けて、紅茶のひとときを楽しむという。
微笑みを浮かべて、穏やかに、誰よりも優しげに——
「ようこそ——わたしの、ささやかな庭園へ。
ここまで足を運んでくれたことに感謝します。あなたが外へ出ることは滅多にないでしょうに」
「あー……んー……実際だるい」
「彼とはもう会われましたか？　過去に共闘したことがあると聞き及んでますが」
「ん……あー、ペンギン野郎——アーサー・ゴードン・ピムとやり合ったときだな。彼の襟巻（マフラー）はその時に……なあ、君。遠回しなのは無しにしよう。だるい上に退屈だ」
「そうですか。では単刀直入に……」
「あー、よせよせ。よしたまえ。いちいち説明しなくていい。
言いたいことは理解（わか）っている——そうだよ、黒幕は僕だ。
僕が、ゾロを、ニコラ・テスラに、けしかけた」
「理由を聞かせていただけますね？」
「んあ？　……なんで？」
「（無言の微笑み）」
「……怖いぞ、君。あー……そうか。説明か。説明しないと駄目か。
んあー、仕方ない。理解した。少し待て。思考を再構築する。
要は……とても単純なことだよ。火を見るより明らかなことだ。
——あのままでは、ゾロは死んでいた。
彼の暴走を止める必要があった。憑き物を落とす必要があった。
自身の心の闇と向き合わせる必要があった——ニコラ・テスラと戦わせる必要があった。
見事やってくれたぞ、あの男は。世界を救うと宣うだけある。
……ゾロは僕のお気に入りでね。今、失うにはあまりに惜しい。
あれは良いよ。実に面白い奴さ。何と言ってもあれは——これは僕の推測なのだけどね——おそらくニューヨーク唯一の生き残りだ。
あはは！　〝御前の女神〟といえども、さすがに驚いたか！
いいぞ、いいぞ！　興が乗ってきた。じゃあ説明しようか。
僕と奇傑ゾロ——ダグラス・フェアバンクスの馴れ初めについて」

イヤーワン

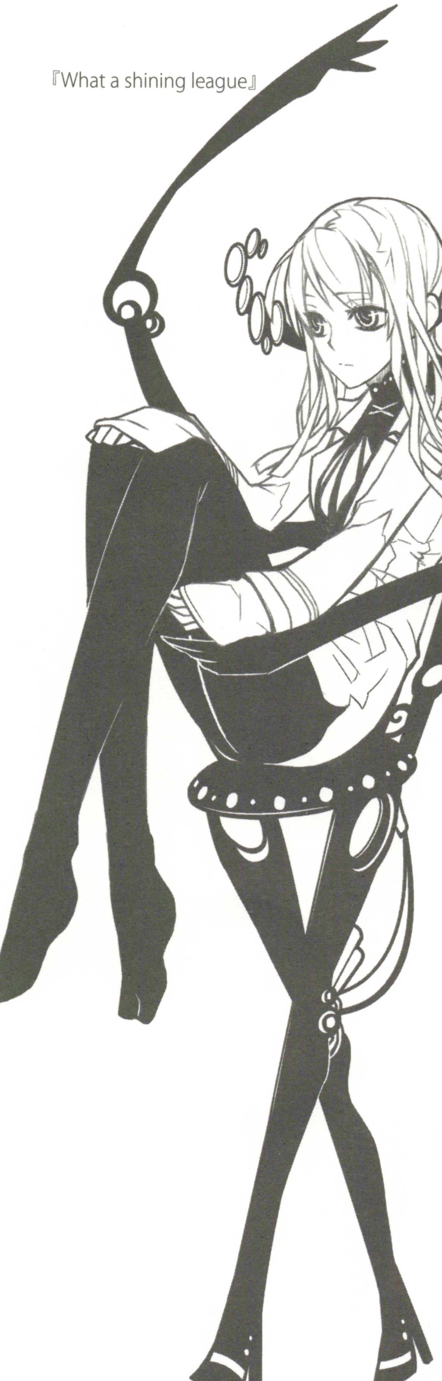
——幼子よ。汝のすべては失われた。
——汝の黄金時代は終わりを告げた。
——知れ。幸福は夢の如く消え失せ、愛情は塵の如く散りゆく。
——瞬く間にひとは生まれ、瞬く間に老いて死ぬ。
——愛（あいは）別（うしなわれる）離苦
——怨（にくしみに）憎（とらわれる）会苦
——求（のばした）不（ては）得（とどかない）苦
——五（あるのは）蘊（ただ）盛（くるしみばかり）苦』
——すべて。そう、すべて。あらゆるものは意味を持たない。
——だが。もしも。汝が。
——激しく噴き上がるもの。熱く滾るもの。
——怒り。渦巻いているのなら。
——我輩がすべてを与えてやろう。
——その怒り、刃に変える術を。
——その怒り、炎に変える術を。

——千の敵と戦い、撃ち破る術を。
——闇を友として、姿を消す術を。
——すなわち、それこそ我が軍団《悪心影（あくしんかげ）》の秘奥。
——地下魔界クン・ヤンの忍法（ニンポー）なり。

†††

『一九〇七年　落第街にて』

何をしているんだ、俺は。
こんな吹き溜まりで。こんな莫迦どもを相手に。
囲まれていた。タフガイ気取りの不良学生が五人ほど。
何かをわめき散らしているが、内容はまったく頭に入ってこない。どうせ腰抜けがどうの、オカマ野郎がどうの、お決まりの台詞を壊れた蓄音機のように繰り返し（リピート）しているだけだ。この手のクズどもの語彙（ボキャブラリー）など三歳児にさえ劣る。
そうはいっても多勢に無勢。ここはハンデが欲しいところだ。
ああ、そうだとも。ハンデさ。だから俺は手加減してやる。
頭蓋骨を陥没させたりはしないし、喉笛を潰すこともやめてやる。手刀で心臓を貫いたりもしない。拳打で内臓を破裂させることも。
一人目。胸倉を掴んできた男の腕を取り、へし折る。連中はまだ何が起こったか理解していない。二人目。真後ろに立つ男の顔面を蹴り飛ばし、自分自身の歯を五、六本食わせてやった。一人目の男がようやく悲鳴をあげる。二人目の男が地面に倒れる。その頃には鳩尾に拳を食らった三人目が、反吐を噴水のように撒き散らして、蹲っていた。汚らしいぞ、ゴミめ。ゴミはゴミらしく、ゴミを食え。
四人目を投げ飛ばす。ゴミ溜めへ顔から突っ込み、動かなくなる。
残るは一人——その時、視界を埋め尽くす炎。次いで激痛。
炎？　炎だと？　いったいどこから……そうか、これが異能とかいうヤツか。落第街には用心棒をやっている異能学生が多いと聞く。クソ。それを知っていてなんてザマだ。マヌケにも程がある。
咄嗟に地面を転がり、服についた火を揉み消す。そこにすかさず蹴りをぶちかましてくる異能使い。一発二発三発。意識が遠のく。
この痛みは授業料だな。ありがとうよ。おかげで落第街の流儀が理解できた。こいつは礼だ。とっておきな。
異能使いの悲鳴。その右腕には深々と俺が投げた得物——卍型の刃物が刺さっている。手裏剣（シュリケン）という、オリエントの投げナイフさ。どうだい、クールだろう？
全身のバネを使って跳び起きる。そのまま回し蹴り。
いい感触だ。肋骨（あばら）が数本イッたはずだ。
五人目が倒れると、最初に腕を折ってやった不良学生が、恐怖に顔を歪ませながら、仲間を置き去りにして逃げ出した。
追いかける必要はない。その気力もなかった。
その場に大の字になって寝転がる。もう動くのも億劫だった。
（無様だな、おぼっちゃま？）
そう自嘲する。本当、無様というより他ない。
何のために技術を身につけた？　何のために師と袂を分かった？　掃き溜めで不良どもをいたぶるためか？　そもそもどうして俺は学園都市に……そうだ。魔術師をやっていると言っていたあの男。あいつが言っていた。学園都市に来れば願いは叶うと——
願い。何だろう、俺の求めるものは？
戦う術ならある。財産も。だが、それだけだ。今の俺は何を為すべきかさえ、わかっていない。
天啓を待とうとした。耐えようともした。モンテ・クリスト伯は言った。「待て、しかして希望せよ」——だけど、もうたくさんだ。あと少しでも待つくらいなら、いっそ死んでしまいたい。
そうとも、なぜ俺は生き延びてしまった？　本当なら俺は五年前の聖誕祭に——
ガタッ！



突然、すぐ横にあるマンホールの蓋が動き出した。
反射的に跳び上がり、身構える。なにごとだ？　新手？　そんな阿呆な。どうしてマンホールから？
ガタガタッ。マンホールの蓋はまだ動いている。警戒心を高める。
ガタッ、ガタガタ、ガタ、ガタガタガタッ。五秒、一〇秒。
ガタ、ガタッ……ガタガタガタッ。三〇秒……まだかな？
ガ……タ……………………………………。
九〇秒、ついに静かになった……いや。
「あーけーて」
情けない声が、マンホールから聞こえてくる。
……なにそれ。

†††

「んあー……よいしょっ……と。ようやく出られた。礼を言う。
そして——やっぱり、ここにいたな。うん、今夜はこの辺りだと思っていた。単純な推理だ。君の性格や癖、そしてここ数日の行動から帰納的（ア・ポステリオリ）に考えを進めただけのことだ。
では、ついて来い。あー、何を呆けている？　言っている意味が理解らないのか？　君はもしかして、アレだ。頭が弱いのか？
——君を徴兵すると言ったのだ、ダグラス・フェアバンクス。
これは私闘ではない。学生同士のちんけな抗争でもない。
——戦争だよ、ムッシュ。これは、戦争だ」

†††

『一九〇七年　地下通路』

……変な女。
そう、女だった。マンホールから出てきた、女。
何者？　浮浪者？　学園都市にもいるのか？
いや……違うな。身なりは多少だらしないが、清潔だ。
見た目は若い、というか幼い。たぶん俺と同じ一年生……まさか同い年ということはあるまいが。
華奢な体つき。マンホールの蓋も持ち上げられない。体力は常人未満……というか、なんだあれ。

キィ。キィ。金属音。彼女の座っている機械から聞こえてくる。何と呼べばいいか。歩行機械。歩く椅子。車椅子のようなものか。足が不自由？　いや、それも違う。確かに足の筋肉は少ないが、衰えているわけではない。だったらなんで、こんな機械をわざわざ……単にものぐさってオチじゃないだろうな。

——地下にある落第街のさらに地下。暗い通路を俺たちは進む。

歩行機械の金属音が、歩行機械の足音が、通路に響く。

「観察か。悪くない。論理的な思考の大前提だ」

見抜かれている。俺の視線に気づいているのか。この暗さで。

「何者だ、貴様。なぜ俺の名前を知っている」

「退屈だ。退屈な質問だよ、ダグラス。あまりにも予想通りで実につまらない。本当にくだらない。観察したんだろう？　なら次は頭を使え。思考しろ。怠(なま)けるな」

「戦争、とはどういう意味だ。貴様、革命学生の類か？
テロルの計画でも進めているのか」

「あー……考えてそれなのか？
そうかー、ダグラス。君は莫迦なんだなあ……」

「…………」

「んあー……うん、怒ったかい？　莫迦にされたから？
……違うね。僕がテロリストなら多くの学生を巻き込むからだ。
そうはさせまいと君は決心している。暴力の行使を覚悟している。
ダグラス、君の怒りは常に義憤だ。実に理想的な人材だよ」

「スカウトでもする気か？」

「そうだ。革命学生ではないが。ダグラス、君の怒りの源泉は何だ？
過去のトラウマ？　それとも教育の賜物か？
そう、君の師の話だ——東洋(オリエント)随一の碩学にして暗殺教団《悪心影》の首領。悪名轟く《悪魔博士》《暗黒将軍》フー・マンチュー！」

「——!?」

全力で飛び退き、可能な限り距離を取る。

迂闊！　不覚！　今のは完全に不意打ちだ。なぜこの女がそれを知っているのか。考えられる可能性はひとつ——

「先に言っておくがハズレだ。僕は追っ手じゃない……と言うかね。君の目は節穴か？　こんなか弱い女子が刺客なわけないだろう」

警戒は解かない。確かに彼女自身はくノ一ではあるまい。しかし組織は戦闘員だけで構成されているのではない。《悪心影》の魔手はどこまでも伸びる。

「頭が固いな。まあ、いい。今の反応で僕の推理が裏付けされた。
君は《悪心影》の暗殺者——忍者(ニンジャ)だ。それはこの暗闇の中で僕の様子を観察できること、足音を立てないことからも推し量れる。
何より君の近くに倒れていた不良学生——彼の腕に刺さっていたのは、《悪心影》の刺客が使うZhar(ツアール)と呼ばれる手裏剣だ。ちなみに銘の由来はスン高原に伝わる風の魔神(デーモン)だな。状況的に君が投げたものとしか考えられない。
そして君はニンジャだが、脱走者(ヌケニン)だ。理由は説明するまでもない。追っ手を警戒するその態度が何よりの証拠だ。あと不良相手に憂さを晴らすエージェントがいてたまるか」

「それは、貴様が刺客でないことの説明にはならない」

「んあー……どうしてそこまで説明する必要がある？　少しは自分で考えたまえよ。君は莫迦だが、莫迦であることに甘えては駄目だ。莫迦は莫迦なりにたとえ莫迦にされても懸命に生きていかねば」

ふざけた口調。人を小莫迦にした口調。

だが——ふと、闇の中。彼女の瞳に、何らかの意志が宿る。

その強さに、輝きに、一瞬心を奪われた。

「——ダグラス・フェアバンクス。なぜ《悪心影》を裏切った？
苦行に耐えられなかった？　師が恐ろしくなった？
違う。違うね。同じ。同じなんだ。
君の動機は常に同じ——怒りだ。邪悪に対する怒りだ。
君は許さなかった。《悪心影》の思想を。理想のために、無辜の人々を犠牲にすることを。だから君は師を裏切った。
そして、それゆえに君は道を見失った」

そのとき、地下通路が揺れた。真っ先に罠を疑う。だが――
壁に偽装されていた扉が、複雑なカラクリ仕掛けで開いた。
その先にあるのは一基の昇降機。
地下の地下の――さらに地下へ到る、穴、降りるための。
「この先に君の進むべき道があるかもしれない。罠かもしれない。
どうする？　君が決めろ。ダグラス・フェアバンクス」
「……道」

†††

上から――下へ――
降りていく。否、落ちていく。
失う感覚。何もかも。落ちて、こぼれていく。
大切なもの、暖かなもの、俺自身がぼくであったこと。
それらのすべてを置き去りにして。
俺だけ、落ちていく――
「なぜ……おちる……？」

†††

「……どうした、ダグラス？　まさか眠っているのか？」
「……いや。物思いに耽っていただけだ」
「そうか？　まあ、いいさ。着いたぞ」
昇降機がたどり着く。地下の地下に。
目の前が開ける。広い空間。地下の空間。
「――ようこそ、僕の岩窟（ケイブ）へ」
岩窟。確かに。剥き出しの岩肌。ひんやりと冷えた空気。
人の手によるものではない、自然が生み出した大空洞。
そしてそれとはまるで対照的に、鎮座する巨大な人工物――
「その怪物は大計算機（オルディナトゥール）Zen-Mondo（ゼン＝モンドー）――
玩具みたいなものだが、なかなかの優れものだ」
「個人が所有できるものではない……本当に何者だ、貴様？」
「蛇の道は蛇。オリエントの諺さ。それに最低このくらいの性能は
ないと、僕の頭脳と釣り合わない。さて……今日からこのケイブが、
僕と君の秘密基地となる」
「秘密基地？　何のための？」
「あらゆる悪を暴くための」
「悪を、暴く？」
「それこそが僕だ。あらゆる謎は解かれ、あらゆる密室は開かれ、
あらゆる迷宮は破られる――僕の頭脳を前に、悪はその存在を隠し
通せない」
「名探偵気取りか？　まるでサー・ホームズみたいな口ぶりだ」
「ホームズ!?　言うにこと欠いてホームズだと!?　よりにもよって、
あんな派手なだけの薄っぺらな無能といっしょくたにされるとは！
いいか、奴のやっていることなんか、所詮ただのおままごとだ。
ダグラス……お願いだから、これ以上僕を失望させないでくれ」
「だったらいい加減、素性を明かしたらどうだ。
貴様は何者で、何が目的だ？」
「そうだな。自己紹介がまだだった」
言って、彼女は――
「僕は、オーギュスティーヌ・デュパン。
学園都市の陰謀を暴きにきた。そして今、僕は有能な助手を必要
としている。そう、君の力が必要なんだ」
彼女は、手を、伸ばして――
「獣の如き君。ダグラス・フェアバンクス。
僕は、君にこう言おう――『待て、しかして希望せよ』」

ナイトフォール

『一九〇八年七月某日　決着二分前』

異常なる角度から、迫る剣閃。

完璧を期した必殺の一撃は――それでも、白い彼には届かない！

テスラ式雷電回避――そして、間髪入れずの――

「発雷（イグニッション）！」

「ＧＡＡＡＡＡＡ！」

光芒一閃――否、閃きふたつ。

雷光。白刃。ぶつかり、爆ぜる。

獣の彼は健在。振るったサーベル、再び構え直して――

「……我が雷を斬るか。《結社》の武器ではなさそうだが」

「Ｚサーベル――Zothique（ゾティーク）で鍛造されたという神剣だ。

……師の受け売りだがな」

「イリジア鋼（イーリディーム）か。それが真実ならば、雷を斬れるのも道理。

だが、まだまだ。私にはバリツがある」

「バリツ、笑止。俺には崑央（クンヤン）流忍法がある」

嘲笑ひとつ。獣の彼がサーベル構える。

「ＧＲＲＲＲ……」

獣の吐息に呼応して、纏った鋼が蒸気を吐き出す。

轟音。踏み込みの強さに地面が砕ける。

爆音。放たれた弾丸のように獣の彼が駆ける。

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」

血、再び噴き出して。軋む骨、ついにはひびが入る。

人体の限界を超えた速力。膂力。威力――

彼が纏った鋼（スーツ）がもたらす、嵐の如き、力。

†††

『一九〇七年　ケイブにて』

「見ての通り、僕は荒事が苦手でね。戦力が必要だ。

それも強力な異能学生とも渡り合える武力が」

「異能を使う暇など与えない」

「音速を超える異能使いもいるのに？　君の頭脳には何の期待もしていないが、君の身体能力と技術は大いに期待している。だから君になら――こいつを託せる」

「何だ、これは？　鎧？」

「強化装甲服（パワードスーツ）だ。だがこれほどのものは軍だって所有していないぞ。

何と言っても、第二先端科学部のドクトル・Ｐ（ペー）特製品だ」

「ポルシェ博士……あのマッド・サイエンティストか。

どうやら一筋縄ではいかなそうだが」

「あー、うん。出力が大きすぎて、並の人間じゃ使いこなせない。

試験運転では、これを装着したレスリング部の学生が、全身骨折で危うく死亡退学になるところだった」

「貴様、やはり俺を殺しにきた刺客か？」

「常人には耐えられないというだけの話だ。ニンジャは別だ」

「ニンジャを何だと思っている……まあ、何とかなるだろう。

それで？　この装甲服の皮を被った死体製造機の名は？」

「Zamiel（ザミエル）――ドクトル・Ｐはそう呼んでいた。嵐の天使だよ」

†††

『一九〇八年七月某日　決着一分前』

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」

「莫迦のひとつ覚えでは、私には勝てんぞ」

迫る獣。空間、白い彼の前でねじ曲がり――

（いや……違う）
ねじれた空間から飛び出したのは、Zをふたつ重ねた卍手裏剣。
驚きは一瞬。回避は容易。だがその瞬きにも満たない隙に――
軽い破裂音。圧縮された空気が放たれる音。
ザミエル――嵐の天使の名を冠するスーツから、碩学製特殊鋼で造られた投げ縄(ラリアット)が発射される。
投げ縄ははるか頭上へと伸びていき、先端にある鉄鉤(フック)が高層建築の屋上を捉える。
巻き戻される縄に牽引されて、獣の彼が宙を舞う。獣のように跳ぶ。鷹のように飛翔する。
「ふむ……何のつもりだ？」
空。彼が纏う鋼、ザミエルの表面――
赫く、赫く、血管のような回路が浮かび上がる。
赫く、赫く、妖しき光が回路を走る。
「GRRRRRRR……！」
夜空が――空間が――歪む。歪む。歪む。
獣の彼が――嵐の天使が――歪む。歪む。歪む。
「……なんと莫迦な小僧だ。猟犬をさらに喚び込むつもりか」
「崑央流忍法――百鬼夜行(ロング・ハロウィーン)」

†††

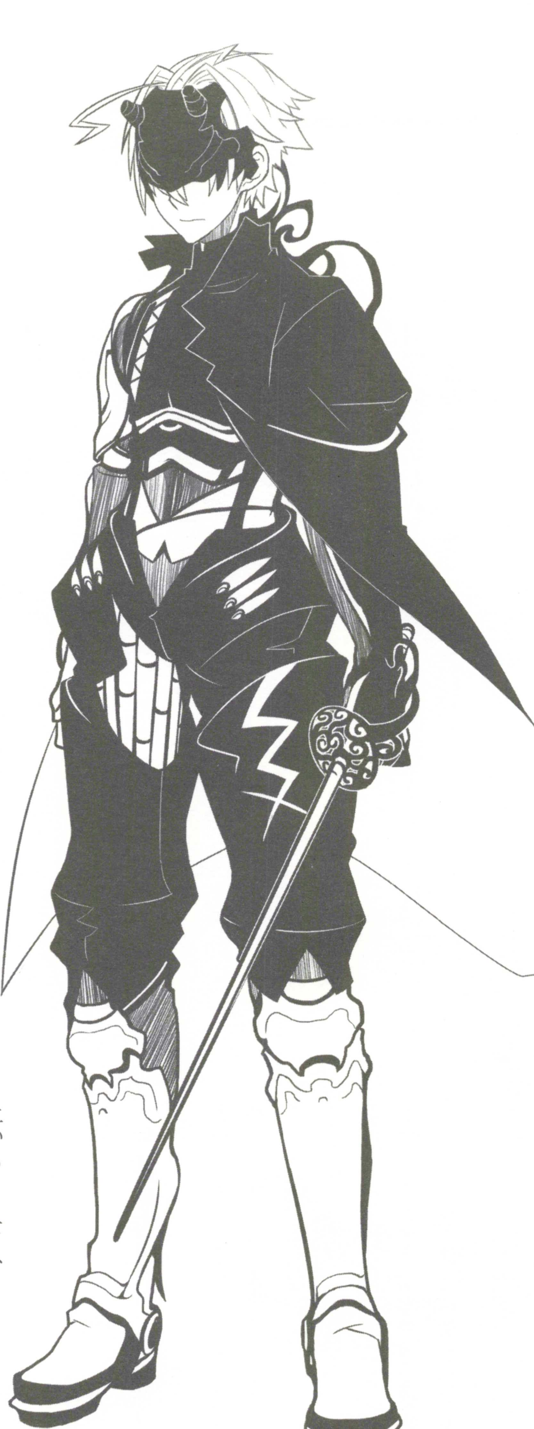
『一九〇七年　出会いより三ヶ月後、ケイブにて』

「Zスーツ(ザミエル)を改造したい」
「んあー……なに？」
「空を飛ぶ必要がある」
「……ダグラス。君、ついに脳が」
「黙って聞け。今日やりあった相手が、飛行の異能持ちだった。寸前のところで逃げられた。対策が必要だ」
「待て待て待て。なぜ異能学生と戦っている？」
「Zスーツのテストだ。それに悪党を見過ごすわけにはいかない」
「勝手なことをするな。ロビン・フッドにでもなったつもりか」
「連中は二級学生を食い物にしている。弱者の血と涙を啜って肥え太るクズどもだ。見逃してはいけない。悪を許してはいけない」
「僕たちの敵は学園都市の闇だ。不良学生(チンピラ)の相手をしている場合か」
「悪の大小は関係ない。俺は悪に対して妥協しない。絶対にだ」
「んあー……もう！　君は本当に大莫迦者だな！
何にせよ飛行機能など非現実的だ。諦めろ」
「ニンジャが使う忍具(ガジェット)に鉤縄がある。それをスーツに内蔵して射出すればいい。使いこなせば立体的な移動が可能だ」
「……ふぅむ？　いわゆる軽功か。宙乗り(ワイヤーアクション)とでも呼ぶべきかな。
面白いな、ドクトル・Pにかけ合ってみよう」
「それともうひとつ」
「んあー……まだあるのか」
「戦闘中、このアンプルを体内に注入する装置が欲しい」
「……何だ、その薬は？」
「これは――」

†††

『一九〇八年七月某日　決着間近』

Zラング(シュリケン)に、ラリアット・ガンによる立体機動。どちらも単なる時間稼ぎだ。ほんの少しの時間。そう、薬が効くまでの時間があればいい。
「ザミエル。遼丹(リャオタン)、全弾注入」
遼丹――《悪心影》のニンジャが用いる霊薬だ。
かつて老子がこの薬で道(タオ)を得たと言われるが、ニンジャの修行においても、擬似的な解脱(サトリ)を得るために使用される。



まあ、暗殺者（アサシン）に麻薬（ハシシ）は付き物だが——遼丹は次元が違う。
遼丹を投与された者は——超人と化す。膂力は数倍になり、五感は研ぎ澄まされる。一切の苦痛を感じず、一切の恐怖を感じない。
そして何より顕著なのは——思考の加速。
遼丹を投与された者の時間感覚は常人とは異なる。
それは飛んでいる弾丸でさえ、目視できるほどのものだ。
この遼丹とZスーツの性能によって、俺は異能学生との戦いに、勝利し続けてきた。
だがこの男は。ニコラ・テスラは。マン・オブ・スティールは、他の異能学生とは格が違う。認めよう。このままでは勝てない。
ならば俺は——さらにその先の領域に踏み込むまで。
《Y（ヨーガ）》の果て、終極の《Z》に到るまで。
遼丹が全身を巡る。思考が加速する。
時間を超えて——時空を超えて——俺は——獣に——

†††

上から——下へ——
落ちていく。落ちていく。
失う感覚。何もかも。落ちて、こぼれていく。
大切なもの、暖かなもの、俺自身がぼくであったこと。
それらのすべてを置き去りにして。
俺だけ、落ちていく——
「なぜ……おちる……？」
ああ——
闇の底から何かが這い寄ってくる。
宇宙の邪悪を凝縮したかのような、痩せた肉体。
それは、餓えた狼を思わせる。
それは、獲物を狩り立てる猟犬を思わせる。
燃える隻眼は愛を知らない。吐息には屠った獲物の死臭が漂う。
久遠を戦い、敵を蹂躙してきた、生粋の戦士。覇者（ウォーロード）。
猟犬どもの王。ティンダロスの王にして、ティンダロスそのもの。
隻眼のティンダロス——ミゼーア。
怒りに燃える隻眼が告げる——狐よ、貴様は私のものだと。
貴様を焼き尽くしてやろう。

荒々しくも燃え盛る、激しく、美しきもの——怒りで。
さあ、断罪の時だ。
「なにが……罪なの？」

†††

何が——
何が、罪か。何が、許されざるものであるのか。
それは、ここの果てに即身菩提(そくしんぼだい)せしものが決める。
それは、ここの高みに結加趺坐(けっかふざ)せしものが決める。
それは、地下魔界(クン・ヤン)の黒い仏が決める。
妙なる声明(しょうみょう)を響かせて。妙なる雅楽を響かせて。
裁定する。成敗する。見つめ、裁き、そして、怒る(いか)のか。
調伏すべきものを決める。覆滅すべきものを決める。
それは、いと高きところに在るものが。
この、極彩色の彼方で。崇られた瑜伽卒塔波(ヨーガ・ストゥーパ)の果てで。
怒るのか——
——それは、虚空か。
——それは、蓮華座か。
——それは、いと尊きものの坐す処。
——それは、地下魔界(クン・ヤン)の遙かな彼方。
——極彩色の塔の最果てか。
——それとも。蓮華座であるだけか。
——地下魔界(クン・ヤン)であるのかさえ。
遙か高みの蓮華座にて。
かつて、入滅せしものは祈る。
かつて、入滅せしものは唱う(うた)。
燃え続ける日輪そのものの双眸から、絶えず、血の涙、流して。
荒ぶるものは怒るのだ。まつろわぬものは憎むのだ。
すべて、すべて、風の前の塵に過ぎぬと涙して。

『輪　廻　転　生(いのちはめぐる)
万　物　流　転(すべてはうつろう)』
『胎児。生け贄。狩られた狐たちよ』『命無きものたちよ』
『いざ、時は、来たれり』『復讐の狼煙だ』
『汝の涙を見せておくれ』『汝の魂を見せておくれ』
『三千世界の怒りすべてが』『我等の執るべき剣なのだから』
『命無きものたちよ』『我が救済たる浄化を遂げるものたち』
『比類無き、我輩の、同胞(はらから)たち』
『愛　別　離　苦(あいはうしなわれる)
怨　憎　会　苦(にくしみにとらわれる)
求　不　得　苦(のばしたてはとどかない)
五　蘊　盛　苦(あるのはただくるしみばかり)』
『たとえ——』『何の意味も、ない——としても』
『天　魔　覆　滅(あくをゆるしてはいけない)』

†††

『一九〇八年七月某日　決着』

「崑央流忍法——百鬼夜行(ロングハロウィーン)」
ああ——
空間が、歪んで。溶けて。
獣の彼が歪んで。解けて。
時間を超えて、時空を超えて、顕現する。偏在する。
それは、獣。獣、獣、獣。獣獣獣獣獣獣獣獣獣獣獣獣獣……！
それは一〇八匹の獣。すなわち一〇八人の彼自身。
忍者の秘術。忍法・分身の術。その最奥。その究極。
空を埋め尽くす狩猟者の群れは、さながら百鬼夜行(ワイルドハント)の如し。
一〇八匹の猟犬の、一〇八人の狩人の狩るべき獲物はただひとつ。
ただ一閃の雷電。白い彼——ニコラ・テスラただひとり！

「ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」
一〇八の獣の彼が、一〇八の奇傑ゾロが、一斉に襲い来る。
一〇八すべてが――虚空さえも足場にして――
飛翔する。加速する。ねじ曲がる。そして。そして。
空間の狭間から。時間の角から。雷電さえも両断するサーベルの一閃、抜き放ち――！
「見事だ、ダグラス・フェアバンクス！
だが、それはお前の輝きではあるまい！」
だけど。だけど。自在に宙を舞う光の剣五本、白い彼を守って――
「これは俺の怒りだ！　我が怒りは時さえ超えて――！」
だけど。だけど。その無敵の守りさえも超えて、獣の彼は――！
「時を超え――ニューヨークを！　ブロードウェイを！　あの人を！
俺は……俺はッ！　ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」
「若人を――」
そのとき――
「惑わせて何とする。クン・ヤンの黒い仏よ。
この小僧は断じて、お前の復讐を遂げるための道具ではない。
続けるのなら――私が、相手しよう！」
そのとき――光が――
「電刃――」
地下魔界よりも深い闇、焼き払って――
「《荷電粒子の神槌(トール・ハンマー)》ッ！」

†　†　†

『一九〇八年七月某日　後日談』

「莫迦だ。大莫迦者だよ、あいつは。いや莫迦なのは初めて会った時から十分承知していたが、僕の推理を上回るほどの大莫迦だった。
元々過激な性格ではあったが。暴走が止められなくなったのは、今年度に入ってから……正しくは、ニコラ・テスラが転校してきてからだ。あの莫迦、大莫迦、彼を漫画(コミック)のマン・オブ・スティールと混同しているのだ。単なる八つ当たりなんだよ。救いようのない莫迦だ。現実と空想(フィクション)の区別さえつかんのか。莫迦。莫迦。莫迦。莫迦。大莫迦」
「……彼は、大丈夫でしょうか？」
「んあー？　あー……今頃、Ｚスーツと遼丹の副作用で、死ぬよりも酷い目にあっているとは思うが。自業自得だ。それに――こんな程度のことで落ち込むほど、繊細な性格はしてないよ。莫迦だから」
「信頼しているのですね、彼を」
「……ふむ。まあ、あいつは莫迦だが、それを言ったら世界の人口の九割九分九厘が莫迦だ。莫迦の中では随分とマシな莫迦ではある……何だ？　何が可笑しい？　不愉快だぞ、君」
「さあ？　推理してみては如何ですか？」
「はぁ……学園都市の女神さまは、見かけによらず性格が悪い。
ともかく！　ゾロの方はひとまず心配ない。で、だ。僕を呼んだのはそれだけじゃあるまい？」
「……はい。至急、調査をお願いしたいことがあります」
「《スポーン》だな？」
「……ええ」

キリング・ジョーク

――例題です。
例題です。
ここに、ひとりの坊やがいました。
何も持っていない坊やです。
失うものすらない坊やです。
坊やは、穴に落っこちてしまいました。

坊やは、穴に落っこちてしまいました。
パパからも、ママからも、見捨てられました。
大きな町で生まれたけれど、坊やはひとりきりです。
坊やは何もできません。できないと思ってます。
薔薇がやって来ました。
薔薇は、坊やを殺すかどうか考えてます。
坊やは震えています。
坊やは涙を流しています。

——どうすべきですか？

坊やは、このまま動かずにいるべき？
坊やは、立ち上がって逃げ出すべき？
坊やは、瞼を閉ざして諦めるべき？

ハイ！　三・二・一・〇！　ざーんねん時間切れー！
はぁー？　《世界介入》？　ダーメダメダメダーメ！
ズルはいけませーん！　却下！　却下しまーす！

というわけで、はい！
——回答です！
薔薇は、目を輝かせました。
その輝きは坊やをぶっ殺しちまう輝きです。
薔薇は魔王でした。坊やは殺されてしまうでしょう。
薔薇は、命が散るさまを区別しません。
薔薇にとっては、花も、人間も、同じです。
坊やの命は散らされます。叫び声は届かず、涙は踏みにじられて。
それが世界というものです。
——イエーイ！
そーなんでしょー。そーゆー風に、人は選んでゆくのでしょー。

そうして朽ちてゆくのです。そうして終わってゆく。
だから、これでおしまい。何処かで誰かが嗤うでしょう。
夜空の月か、薔薇の黄金か。ですから——
これで、おしまい。さようなら。

残！　　で　　念！　　したっ！

†††

——だけど。アンコールにはお応えするぜ？
世界の敵が、こうして生まれたのだから。
「まだまだ見習いだけどねえ」

†††

『一九〇八年九月某日　空中庭園』

——噂。
道化師の噂。四年前の噂。
それは——ひとりで夜を過ごす学生を狙う。
屋内、屋外、どちらにも顕れる。音もなく、という訳でもない。
先触れは金属の擦れるような音だという。
それは、無数のナイフを弄ぶものだ。それこそサーカスの道化師じみて、無数の玉とナイフを延々と両手で弄び、幾つも、幾つも、幾つも、空中に浮かばせて。
ひとりでいる学生を狙う。逃げ場はない。
それは、暗がりから顕れ出でる。人間の感知し得る範囲ぎりぎりの外にいつの間にか降り立つ。
背後に迫り来る。言葉を発さない。恐怖をもたらして、同時に、



死を与える。その瞬間にだけ、最後に、言葉をひとつだけ放つ。
それは、道化師だ。道化師の仮面を被った怪人物。
――これが、噂。
――九月の殺人鬼の噂。
「痛ッ。指切った」
音を立てて、ナイフが地面を転がる。
「……あっちゃー、しかも喋っちゃった」
言って彼は、傷口を舐めながら、顔をしかめる。
招かれざる客に、だが彼女は顔色ひとつ変えることはない。
彼女――神学科の四年生女子。欧州宗教研究会の会長。博物学の碩学位さえ有しているとか。学園都市の才媛。
通称は〝御前の女神〟とされる。一〇万学生の多くに崇拝される女子学生統括組織ソロリティの主宰。
フロレンス・アメギノ・ナイチンゲール。
「ようこそ――わたしの、ささやかな庭園へ。
……いつかこの日が来ると思っていました。
もうひとりの殺人道化師（キラークラウン）。そして《笑う男（ジョーカー）》」
「おやおや。〝御前の女神〟とあろう御方が、そんな与太話。
そいつはどっちも、ただの街談巷説（フォークロア）でしょう？
でも、いいね！　すごくいい！　気に入ったよ！」
――ああ。
「せっかくだから、この場で襲名してあげるよ！
殺人道化師に《笑う男》！　他にも、何でも引き受けてあげるよ。
学園都市の噂！　学園都市の闇！　学園都市の汚点！
何でも押しつけるといい！　つまり、こういうことさ！」
――視界を背けようもなく、道化師が踊っている。
「マルセイユ洋上学園都市一〇万の学生諸君ッ！
頽廃と自己憐憫にまみれたあんたら、全員！
――俺様ちゃんが！　この手で！　救ってやる！」
道化師が嗤っている。笑う男が嗤っている。
「きひ！　きひひ、きひひひ、きひひひひひひひ！」
それは鮫のような笑みであった。
すべてを嘲笑う月。もしくは薔薇のような笑みであった。
「卒業するまで島の外には出られない――

この規則には、とある問題がつきまといます。学生同士の恋愛と、
その当然の帰結――子供です」
語る彼女の、瞳、憂いを帯びて。
それでも視線逸らさず、笑う男の瞳を真っ直ぐに見つめる。
「通常、学園都市で生まれた子供は、親が卒業するまで親族の下に
預けられるか、もしくは島内にある育児施設で育てられます。
ですが――ここでもうひとつ、別の問題が絡んできます」
「二級学生……ああ、今はもういないんだっけ？
すごいねー。統治会もがんばったんだねー。えらいでちゅねー」
「二級学生問題は長く、学園都市を蝕む病理でした。
そして、そんな二級学生から生まれた子供たちは――」
「――学園都市に保護されない。
だってそんな子供は、最初から存在しないから」
道化師が嗤っている。笑う男が嗤っている。
女の心、悪意のナイフで抉るように。深く、深く。
――それでも彼女は、視線を逸らさない。
「見捨てられた、学園都市の私生児たち。あなたの言う通りです。
それこそ我々が目を逸らし続けた、学園都市の、闇」
「《ガクトゥーンの落とし子（スポーン・オブ・ガクトゥーン）》と呼んでくれよ。
その方がクールだろ？」
――彼の瞳から、目を背けない。
「四年前まで学園都市に在籍していた、メスメル学のカリガリ博士。
彼はそんな身寄りのない子供たちを集めて……違法な人体実験を
行っていた。その実験の中で、ひとりの子供に発現したのです」
――そう、彼の右瞳。
「黄金瞳が――」
――煌めく黄金色を、真っ直ぐに見つめて。
「子供の名前はチェザーレ――四年前の、《鐘》の生贄です」
「今はコンラート・ファイトって名乗ってる。
今後ともヨロシク……あー、まだ名刺は作ってないんだ。悪いね」
言って彼は、笑う男は、何処からともなく取り出したトランプを
鮮やかな手つきで、シャッフルする。
「早速だけど、名刺代わりにどうぞ」
一枚のカード、投げて寄こす――ババ。ジョーカー。
「……あなたは本当に、チェザーレなのですか？
報告に書かれた年齢と、外見が一致していません。
それに《鐘》に捧げられて、生きているはずが……」
「さあ？《鐘》の気まぐれなんじゃないかなー？
もちろん、俺様ちゃんが嘘つきなだけかもしれないし……。
単に頭がイカれてるだけなのかもしれない。
いやね。正直に言うと、自分でもよくわからないのさ。
なんせ生贄になったのは、物心つく前だったからねえ」
「二級学生制度は既に過去のものです。
今度こそ、学園都市はあなた方を救うことができる」
「救う!? 救うだって！ きひひひひひひひひひ！」
道化師が嗤っている。笑う男が嗤っている。
月が嗤っている。薔薇が嗤っている。
「何を言ってるんだい？ さっぱり意味がわからないね！
俺様ちゃんは、とっくに救われているさ！」
――すべて、すべて、悪趣味なジョークに過ぎないと嘯いて。
「ありがとう、感謝してるんだぜ？ あんたらのお陰さ！ 薔薇と出
会うまで俺は何ものでもなかった！ あんたらが与えてくれたのさ！
貧弱な坊やに過ぎなかった俺に！ ほうれん草を！」
「目的は何なのです。復讐……ですか」
「違う違う違う違ぁーう！ 人の話をちゃんと聞けよ！
俺様ちゃんは、ただ学園都市に恩返しがしたいだけなんだ。
俺様ちゃんの見ている世界を、みんなにも見せてあげるのさ。
――喝采せよ！ 喝采せよ！ フォックストロット、ジダンダ、
ステップせよ！ 今日のお天気です！ 雨は夜更け過ぎに、柱時計
へと変わるでしょう！ チク・タク。チク・タク。時間だよ！

お月さまも黄金の薔薇も、にっこりスマイル、ハイチーズ！
ＯＨ！　ＹＥＡＨ！　素晴らしきかな！　黄金螺旋階段の果てに！
我が愛！　我が狂気のかたちあり！　きひひひひひひひひ！」
道化師が嗤っている。笑う男が嗤っている。
月が嗤っている。薔薇が嗤っている。
きひひ。きひひ。チク・タク。チク・タク。きひひひ……
「そうですか。あなたは既に……」
笑う男の哄笑を浴びて、彼女は。
静かに、けれども強い意志を秘めて、告げる。
右瞳の黄金色を僅かに曇らせて。
「薔薇──なのですね。ならば、私が阻みます。
たとえ、彼が一〇万学生すべてを救うと誓っても」
〝嵐〟が──湧き上がる。
それは、輝き。それは、暗がり。それは、荒ぶる魂の顕現として。
「諸神（アザー）！　マジかよ。激ヤバだぜ」
「彼の望みに背くとしても──狂気ひとつ、ここで終わるなら」
光が。影が。襲いかかる。躊躇の一切も、なく。

† † †

ああ──暗闇から、逃れられない。
どんなに輝き、眩くとも。
どんなに輝き、暗闇照らしても。
輝き強ければ、強いほど、暗闇もまた深く、深く。
逃れられない。逃れられない。
暗闇からは、決して。決して。
だから──選べ。
その厳然たる真実を受けて、その上で──
ひとは、何を、求めるかを。

暗闇

輝き

ア・ヒーロー・キャン・ビー・エニワン

『一九〇八年七月某日　決着より一時間後』

「やあ、親愛なるダグラス・フェアバンクス君。もしくはボロ雑巾。
　頭は冷めたかね？　ああ、うん、そうだよ。僕の思惑通りだ。
　極東的な表現を用いると、調子乗ってる暴力莫迦に、少しばかりお灸を据えてやったのさ。
　んあー……うん、怒ったかい？　違うね。今はさしずめ自己嫌悪の真っ只中といったところか？　ああ、言ってやるよ。ダグラス、君は実に莫迦だ。大莫迦野郎だ。猿程度の理性さえも持ち合わせていないケダモノだ。自らの尻尾を追いかけ回す犬だ。ああ、違う。狐だったか。だが狐は賢い生き物だぞ？　少なくとも、遼丹を大量摂取しながら、Zスーツのパワーを自壊寸前まで解放するどこぞの自殺志願者よりはずっとな。
　それで？　どうする？　保健委員を呼ぼうか？　……まったく。いつまで、落ち込んでいるつもりだ。莫迦のくせに繊細な奴だ。
　そうだな。ひとつ推理してやろう。ダグラス・フェアバンクス。
　一九〇二年一二月二四日。君は両親に連れられてブロードウェイのミュージカルを見に行った。お目当てはジンジャー・ロジャース。当時、人気急上昇だった歌手だ。だがそこで、あの忌まわしい事件《大消失》が起きる。
　君がどうやって生き延びたかは、僕の推理も及ばない。とにかく君はフー・マンチューに拾われ、一九〇七年ヒマラヤで発見されるまでの約四年間、ニンジャの修行に明け暮れた。その後、合衆国の大地主である叔父の元に帰ることなく、マルセイユ洋上学園都市に入学。現在に至る……ああ、焦るな。ここからが推理だ。
　つまりだ。君は一九〇三年から一九〇七年の間、合衆国の文化に触れる機会がなかったはずだ。いつぞかのインタビューでも答えていたな。子供の頃まではあの漫画（コミック）を読んでいたと。でも、ああいう子供騙しは好きじゃないとも。
　おかしいな？　矛盾しているぞ？　君はあの台詞を知っていた。
　神も、私も、等しく無力だ――『スーパーマン』＃２５で主人公が漏らした言葉だ。合衆国では社会現象にもなった有名な台詞だが、学園都市での知名度は低い。合衆国の漫画は校則違反品だからな。
　空想的特殊撮影研究部のような通（ギーク）ならともかく、だが。『スーパーマン』＃２５の発行は、一九〇三年。合衆国に戻らず、学園都市に入学した君が目にする機会はない。なのに、君は台詞を知っている。
　もちろん、たまたま耳に入った可能性はある。
　だが……僕はここで、ひとつの仮説を立てたい。ダグラス、君と僕が出会う前……君が落第街をうろつくようになったきっかけは、いったい何だ？　まさか最初から不良狩りが目的ではあるまい。
　つまり君は何らかの校則違反を犯していた。酒？　君は下戸だ。女？　それはないな。僕にはわかる。それと一応君は、世間的にはプレイボーイだからね。女には困っていない……ということにしておいてやる。それじゃ、何？
　ダグラス、君は――バックナンバーを集めていたんだね？
　ふふ……恥ずかしい奴。でもいいじゃないか、超人（スーパーマン）。
　弾丸（たま）よりも速く、砲弾列車よりも強く、高層建築（ビルディング）もひとっ飛び。
　僕はひ弱だからね。憧れる。そういうの、嫌いじゃない。
　なあ……ダグラス。こうは考えてみないかい？　あの漫画の連載は今も続いている。そうだ、マン・オブ・スティールは今も戦っているのだ。あのニューヨークを目の当たりにして、なお――
　今度こそ、誰も、殺させないために」
　言って、彼女は――
「ダグラス。君の黄金時代（ゴールデン・エイジ）は終わったかもしれない。
　全知全能の神も、すべてを救うヒーローもいないかもしれない。
　だけど、思い出すといい。君が〝狐〟を名乗る理由を。
　――誰もがヒーローになれる。

灰燼（カルシェール）の世界を拒み続け、手を伸ばすことを諦めなければ。
誰もが心に破邪の輝きを持つ。
魔を断つ銀の武器を持つ者によって、時代は創られる。
そうとも――聖銀時代（シルバー・エイジ）だ」
彼女は、手を、伸ばして――
「僕にとってのヒーローは、鋼鉄の男（マン・オブ・スティール）は、間違いなく君だ。
鋼の君。僕の奇傑ゾロ。
僕は、何度でも君にこう言おう――『待て、しかして希望せよ』」

そう、誰もが――



†††

『一九〇九年三月一五日　ネオン・スカラ・スミリア走る』

「乗っていけ、ネオン・スカラ・スミリア！」
「ネオン。きみは必ず送り届ける」
「行ってきなさい。彼によろしく」
「どうにかしてくれって頼んできてよ、あの男にさ！」
「ネオン。あなたに祝福を」
「アルベールもそうしろって言うし、それでね、ネオン。
　何ていうかね。がんばって、って――」
「ひとりも死亡退学者は出ない。私がさせん」
「……ま、地獄の底くらいまでなら」
「ちゃんと戻ってきたら、キスしてあげようか？」
「どうにかなるさ。もしくは。
　どうにかする、だ。学園都市は学生の街だろう？」
「わふ！」「僕の異能は、あらゆる空間を超える！」
「変ホ長調！」「ネオンさん！　がんばって！」
「つかまれ！」「そのまま走れ」「こいつを持っていけ！」
「異能……やはり慣れないな。石の方が楽だ」
「機関車入りまーす！　行けぇ――――ッ！」
「あいつのところへ行くんだろ。
　あんた、あそこの助手なんだよな？」
「よく思い出せないけど、助けてもらったんだよね。あたしも」
「よくわからないけど、がんばれ」「がんばって」
「この連中は任せとけ。
　俺たちの街で、変な人形なんざに勝手させるかよ！」
「なら、行け。走れ。行ってあのひとを引っ張ってこい」

†††

『いいのか？　ネオン・スカラ・スミリアを守らなくて』
「問題ない。ヒーローは俺だけじゃない。
　そして、俺たちには俺たちのやるべきことがある。
　――次は何処だ？」
『教育区域。九〇秒後――死傷者発生確率六二％。時間がないぞ』
「――余裕だ。誰も、殺させない」
　薔薇の瞳が睥睨する空を、彼が駆ける。翔る。
　その身、鋼を纏って。
　素顔、仮面で隠して。
　鉤縄（ラリアット）を自在に操り、高層建築飛び越えて。
　活劇の英傑（ヒーロー）のように。弱き民を守る銃士のように。
　それは尊いもの。それは輝けるもの。
　命を救うために翔る、その姿が――
　命を奪うものを討つ、その姿が――

手を、伸ばす、その姿が——
それは、光る剣を思わせる。
それは、情熱の風を思わせる。
光る剣。情熱の風。すなわち、彼に他ならない。
——奇傑ゾロ。

†††

「テスラ！」
『我が黄金の輝きに勝るもの！　あるものかよ、テスラ！』
「ここに。あるとも。輝きひとつ！」
「——電光！」

†††

「世界の果ての八雷（ライトニング・ケラウノス）ッ！」

フロム・ヘル

——と、いうわけで。
悪い薔薇をやっつけて、みんなハッピー。めでたしめでたし！
それでは皆様、次回作でお会いしましょー！
……なんてね！

残！　で　念！　したっ！

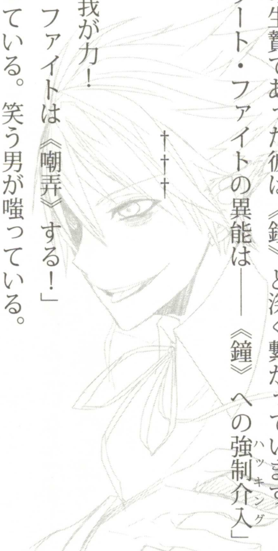
言っただろ？　アンコールにはお応えするって。だからさ。
——俺様ちゃんが、薔薇を、引き継いであげるよ。
「残り滓みたいなもんだけどねえ」

†††

『一九〇九年三月一六日　《スポーン》対策仮設本部』

「異能が使えない？　どういうことだ、ヴァルター殿」
「正しくはコントロールできない、だ。俺の場合は曲がれなくなり、止まれなくなる。危うく一般学生を轢き殺すところだったぞ」
「私の計算も《笑う男》が占拠したディフ塔の周囲は及びません。絶えず何かが干渉して、予測を困難にしているのです」
「それじゃあたしも近寄るわけにはいかないね。あたしの肉体操作が暴走したら、どれだけの被害になるかわかったもんじゃない」
「……これが《笑う男》の異能というわけかね？　フロランス・ナイチンゲール」
「はい。《鐘》の生贄であった彼は《鐘》と深く繋がっています。彼の、コンラート・ファイトの異能は——《鐘》への強制介入（ハッキング）」

†††



「我が異能！　我が力！
コンラート・ファイトは《嘲弄》する！」
道化師が嗤っている。笑う男が嗤っている。

崩落したディフ塔の、剥き出しになった階層に立って。
マイクを片手に、コンラート・ファイトは嘲笑う。
学園都市中の電信網を、ラジオの電波を乗っ取って（ジャックして）。
嘲笑を。哄笑を。悪意を。狂気を——
マルセイユ洋上学園都市一〇万学生に、遍く届けるのだ。
「レディース・アーンド・ジェントルメーン！
こちらディフ塔から、皆様に愛をお届けしてまーす！
俺様ちゃんたちは《ガクトゥーンの落とし子（スポーン・オブ・ガクトゥーン）》！
マルセイユ洋上学園都市は、我々が占拠した！
我々の要求はただひとつ！」
道化師は、笑う男は、深く深く息を吸って——吼える（ハウリング）。
恐慌かき立てる、悪魔の声で。
「——悲鳴絶叫断末魔阿鼻叫喚地獄絵図ッッッ（SCREEEEEEEEEEEEEEEEEEAM）！」

†††

「要するに、学生の異能は——」
「あの男の異能によって、歪められるというわけか。
つまり強力な異能ほど、周囲への被害は大きい。
我々、統治会では手出しができないと言うことだ」
「こういうときこそ、お爺ちゃんの出番じゃないの？
マスターの異能、学園由来じゃないんだろう？」
「それが、彼は……」

†††

ええ、と……はい、そうなんです。昨日からずっと……。
はい、そうだと思います。あの時、すごい力使っちゃったから、
それできっと……。
心配はないと思うんですけど……いったいいつになったら……。
——ああ、もう！　こんなときに！
マスター！　大変です！　まだ終わってないみたいなんです！
お願いだから起きてください！　起きろ！　起きてってばッ！

†††

「ニコラ・テスラが目覚めない？」

†††

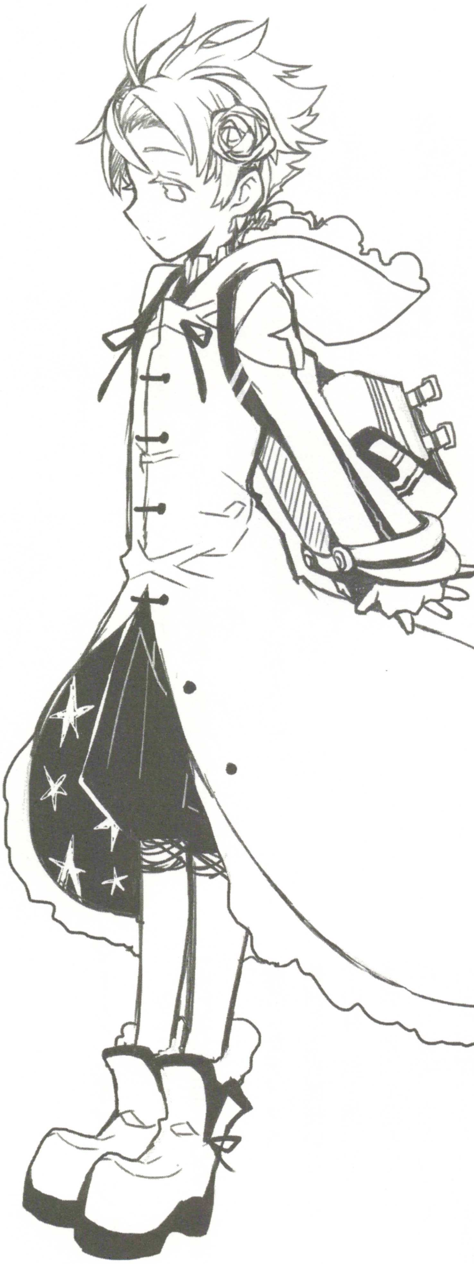
『一九〇九年三月一七日　風紀警察最前線』

ああ！　もう何だってんだ！
こっちはまるで手が足りねえってえのに！
地下からは、スポーンどもが次から次へと湧いてくるし！
怪人学生（ヴィラン）どもはこの混乱に乗じて、暴動を起こしていやがる！
自警学生（ヴィジランテ）だぁ？　ふざけんな！　あいつらが勝手なことするから、余計ややこしくなってんだよっ！
……それで？　今度は何だ？　はぁ？　飛行機の墜落事故？
このクソ大変なときに、航空機械研究部の連中は何やってんだよ⁉
……違う？　学園都市の外から来た？
パイロットは……子供？

†††

『一九〇九年三月一七日　墜落現場』

……死ぬかと思った。
ムーンビーストの時といい、最近トラブル続きだよね。
それに、この島……うん。わかっているよ、ゾフィー。



この気配……僕の故郷を滅ぼした三柱の神樹（アフトゥ）と同じ。
あいつだ。僕たちの宿敵――悪神ニャルラトテプ！
……だいじょうぶだよ。僕は二度と負けない。

――灰色の空の下も　星の光　悪を逃さじ

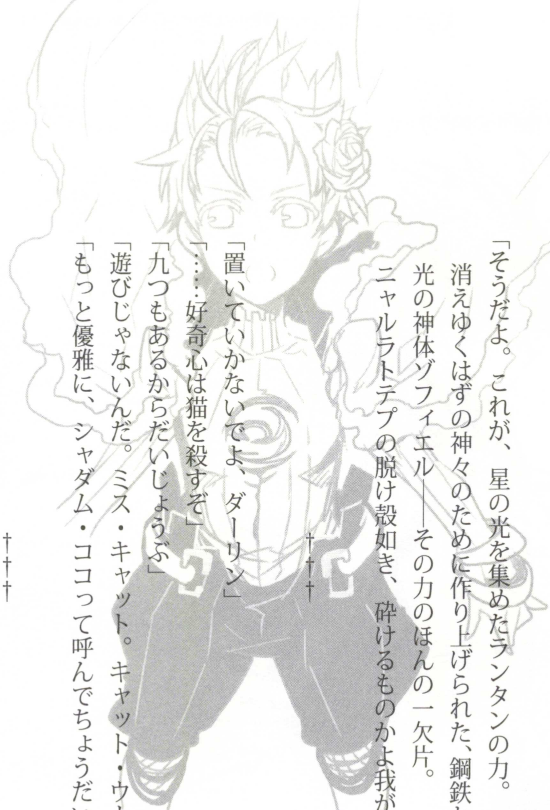
星の光を集めた、このランタンに誓って。
黄金でも何でもない、ありふれた僕の薔薇に誓って。
もう二度と、誰も、殺させない。

島の人が助けにきたみたいだね。
何だろう、あの人？　なんかすごい格好してるよ。
三銃士みたいだね。ヒーローみたいだ。
でもボロボロだ。あの人、ずっと戦っているんだよ。
僕たちや《白い男》と同じように――

「うん……平気、怪我はないよ。ありがとう、助けに来てくれて。
僕の名前は、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ。
――宇宙人だ」

ジャスティス・リーグ

それは、嵐のような一週間だった。
魔女の釜をひっくり返したような一週間だった。
この時の混乱は、新学期を迎えた今もなお、学園都市に深い傷跡を残したままだ。
それはマルセイユ洋上学園都市の、新しい時代の幕開けだった。
新しい問題と、新しい希望。
薔薇に支配されていた、偽りの黄金の時代（ゴールデン・エイジ）から――
誰もがヒーローになれる、聖銀の時代（シルバー・エイジ）へ――
そう、誰もが――



「そうだよ。これが、星の光を集めたランタンの力。
消えゆくはずの神々のために作り上げられた、鋼鉄と機関の肉体。
光の神体ゾフィエル——その力のほんの一欠片。
ニャルラトテプの脱け殻如き、砕けるものかよ我が光！」

†††

「置いていかないでよ、ダーリン」
「……好奇心は猫を殺すぞ」
「九つもあるからだいじょうぶ」
「遊びじゃないんだ。ミス・キャット。キャット・ウーマン」
「もっと優雅に、シャダム・ココって呼んでちょうだい」

†††

「お前……ゾロとか言ったか。聞いたことはあるぞ。
そこそこには速いみたいだが……おい、何だこれは？
——マスク？　なぜ俺に押しつける？
待て。待て待て待て。俺に何をさせる気だ。
はぁ？　名前？　《閃光（フラッシュ）》？
何を言っているお前？　おい、こら！　人の話を……！」

†††

誰もが《正義を行う者たち（ジャスティス・リーグ）》に——



マーク・オブ・ゾロ

『一九〇九年三月二〇日　崩落したディフ塔』

崩落したディフ塔。
如何なる異能使いも寄せつけない《笑う男》の前に、彼はいた。
その身、鋼を纏って。
素顔、仮面で隠して。
洋刀（サーベル）の切尖（きっさき）、突きつけて。
活劇の英傑（ヒーロー）のように。弱き民を守る銃士のように。
それは尊いもの。それは輝けるもの。
乱れることのない呼吸が——
引き締められた口元が——
何より全身にみなぎる闘志が——
それは、獲物を狙う鷹を思わせる。
それは、抜け目のない狐を思わせる。
鷹。狐。すなわち、彼に他ならない。
「……ゾロォォ！」
「ブエノス・ノーチェス！　《笑う男》よ。
灰色の空の下、悪魔と踊ったことはあるかい？」
「なぜだ？　どうしてあんた、俺の異能が通じない？」
「オーギュスティーヌなら、こう答えるな。不可能に思えることも、
実際には可能である。そいつを証明すればいい。
——実に単純なことだよ、コンラート・ファイト君」
言って大仰に肩をすくめる。妙に芝居がかった仕草。
すべては芝居だとでも言いたげに。
「——俺は、異能使いじゃない」



「……ふざけんなよ、コラ。笑えねえジョークだな、オイ」
「ただの忍法だよ。手品だ。猟犬どもはもう喚べないしな」
「きひ……きひひひひ！　それで勝ったつもりかマヌケが！
手品のタネがわかれば、怖くねえんだよ！
要するにてめえは、ただのマンデインってわけだ！」
言って《笑う男》は、狼の人形取り出して――
「――黒の王の影を借りて。来たれ、我が影。我がかたち」
狼の人形が揺らめく。
《笑う男》の影が不気味に伸び上がっていく。
言葉に応じるかのように。意志に応じるかのように。
それは、影だ。悪意込めた呪いのかたちだ。
かたちを得ていくものがある。声、言葉を道標として。
それは、黒く。それは、昏く。それは、荒ぶる魂の顕現として。
「マルセイユ洋上学園都市一〇万の糞ども。
てめえら全員、俺様ちゃんが救ってやるとも」
獣の咆吼と共にそれは来る。人形の腹を食い破って。
「汚穢(おわい)なる獣の唾液――残忍たる獣の乱杭歯――
そして、飽食する悪魔の顎(あぎと)。我が声に応えて出でよ、我がかたち。
渇(かつ)き飢える終末の魔獣。
クリッター・ラ・ベート・デュ・ジェヴォーダン！」
壮絶な速度で影が増殖する。壮絶な速度で影が膨張する。
餓えたる獣が、学園都市を襲うのだ。
「きひひ！　〝御前の女神〟から何とか剥ぎ取った諸神(アザー)の断片さ！
何の力も持たない人間が！　クリッターに殺されないわけない！
　残　念　だ　っ　た　な　！」
無慈悲なまでに、傲慢に。無慈悲なまでに、滑稽に。
自分たちを生み出した、憎き学園都市へと。
襲い掛かる。躊躇の一切も、なく。
「汝の顎(あぎと)は我が顎(あぎと)。汝の罪、あらゆるすべては我が罪。
さあ、ラ・ベート・デュ・ジェヴォーダン。
あんたの敵は、目につくすべて！　……陵辱せよ！」
二〇フィートを超す獣の、大きく開かれた顎の前に。
〝狐〟は立つ。ゾロは立つ。そして、彼は――
「――　〝獣〟か」

†††

――例題です。

例題です。
ここに、ひとりの少年がいました。
穴に落っこちてしまった少年でした。
少年は、ひとを救うことを誓いました。
もう二度と、誰かが、穴に落っこちるのを見たくないから。
少年は、鋼を纏いました。
少年は、仮面を被りました。
少年は、洋刀(サーベル)を構えました。
そして、〝狐(ゾロ)〟と名乗りました。

――どうしてですか？

狐が好きだから？
狐は賢いから？
それとも――
「俺は狐だ。狩られる獲物だ」
「猟犬どもが、猛獣どもが、俺を殺そうと躍起になれば――
他の誰かが死なないで済む。だから」
「――俺は、ゾロだ」

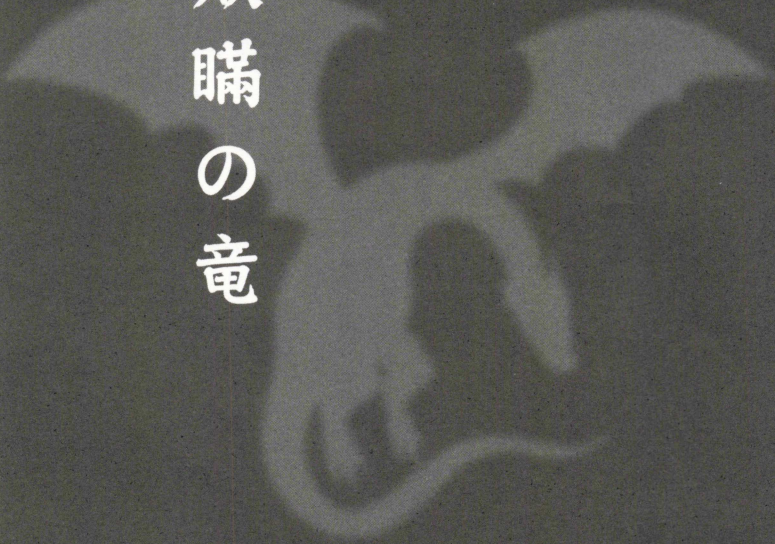
「癪だが、あいつの代わりに言っておいてやる。
コンラート・ファイト。運命に見捨てられた、お前を――」
そして、彼は、今日も心の銀(しろがね)輝かせて――
「――俺が、この手で、救ってやる」

†††



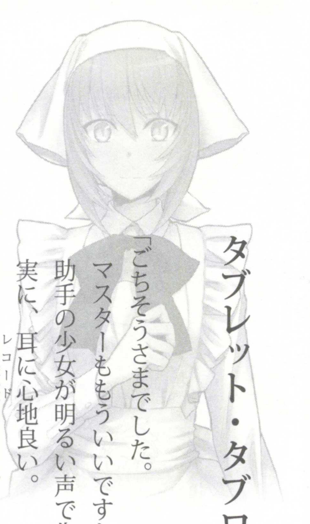


欺瞞の竜



文・桜井光　画・千枚葉





タブレット・タブロイド

「ごちそうさまでした。マスターももういいですか？　もう、お腹空いてません？」

助手の少女が明るい声で告げてくる。

実に、耳に心地良い。

どんな音楽盤（レコード）なりラジオなりを掛けるよりも。

質、量共に満足のゆく朝食を摂ったことも実に良い。特に今朝はフーゼレークを口にできたこともある。パプリカチキンの味わいの後に口にするフーゼレークの喉越しは、絶品と言う他ない。故に彼は、白い彼、この英国式屋敷の主人であるニコラ・テスラは、食器類をてきぱきと片付け始める少女を見つめながら小さく頷く。

今朝も良い仕事ぶりだぞと言外に表現する。

敢えて明確には伝えずに。

先月のあの日から妙に家事の類に張り切っている少女の意気込みは、彼をしてさえ不安になるほどではあったものの、どうも杞憂であったらしい。

助手の少女——ネオン・スカラ・スミリヤ。

健やかに育ったスミリヤの末娘。

幻想なりし我が身を救った、美しい娘。

今や彼を世界に強く繋ぎ止める何よりの輝きの源。

その輝きは、日に日に増しているようでさえある。

陽と水を与えられた若芽が背を伸ばすが如く、水を得た魚が自由に泳ぎ回るが如く、これは成長であるのだろうか。それとも、彼が俄には思考に浮かべ難い某（なにがし）かの兆候であるのか。

無論、彼が輝きとして認めざるを得ない某か、なのだろうが。

一九〇九年四月二三日。金曜日。

旧英国大使館こと、探偵部屋敷の朝。

彼にとって暮らしやすい空間へと模様替えを施した旧応接間、現居間の一室にて、彼は少女へと穏やかな視線を送っていた。手伝ってやろうかとも思ったものの、あれよという間に朝食の後片付けはすっかり終わってしまっていた。料理の腕だけではなく、片付けの手際まで良くなっている。この年齢でこうまで家事の腕を上げていく少女を、流石我が愛し子と誇るべきか、それでこそ我が輝きそのものよ誇るべきか、そんな風に思考しかけては「何を莫迦な」と首を振る、というのがここ最近の彼の癖ではあった。

「今日の予定、と♪」

何か——

機嫌良さそうに、少女が板状の機関機械を弄っている。

携帯秘書装置（ポケット・セクレタリ）というものだ。

特殊な気体を用いて高精細な白黒画面の表示を行う気晶式画像表示板（エア・モニター）が備え付けられた最新機械。通信のみならず、さまざまな機能が備わった、まさしく小さな秘書とも呼ぶべき機械装置。薄くて小型のモニター板か、ちょっとしたノートか、といった外見で、感圧機能が備わっており、指で直接画面に触れて操作する。超国家規模の計画によって世界各地の大都市で試験的に導入されつつあるという共通規格のエネルギー／情報ネットワークと接続することで、公称される機能以上の働きを見せる、とか、何とか。

小型機械としてはきわめて高価なものであり、学園都市外の社会であれば普及型の蒸気自動車一台ぶんの価格を誇るという。量産型の機関機械ではあるものの、大量生産用の工場には碩学工場にきわめて近い精度と専用設備の充実が必要されるため、感覚的には碩学機械に近い。学園都市では例外的にそれなりの数量の普及品が出回ってはいるものの、外の社会では明確に高価な品物だ。

先進各国では、富裕層のうち、大企業の人間や高級官僚等の間で静かな人気を呼んでいる。先日、トロント市警刑事マードックの娘がそのように言っていた。一方で、碩学にはさほど人気がないのだとも。よく似た機能を有する碩学機械を自分もしくは知己の碩学が製作し、所有しているためである。

彼もそうだった。

その手の携帯式情報端末機械はかつて前世紀に年若い碩学であった自分も製作して所有していたし、雷電となった今では『すべての記憶を忘れない』特性を有する上にそもそも優秀であるこの頭脳さえあれば何の問題もないと自覚・自負している。

今更あんなものを有り難がる道理は、彼自身には特にない。

故に、少女がこうして楽しげに携帯秘書装置を弄るのは、自分が既に興味を失った遠い日の玩具を子供が楽しんでいるのを見つめるようなものではあった。

「随分と気に入ったようだな」

「ええ。とっても！　楽しいんですよ、これ。情報網(ネット)に繋げると色んな情報が入ってきて」

「情報網か」

その機能だけは、確かに、かつての自分の製作した機械にはなかったものだ。これがどうにも彼には理解し難い。

本、新聞、雑誌類。その類で充分ではないか？

頁をめくる実感もなく情報を得るという形態に対して、言いようのない違和感が彼にはあった。けれども若人はといえば、このように、目前の少女のように容易に適応してしまう。

流石は学舎の少年少女という訳か。

適応力の高さ。そういうものに憧れない訳ではないが、妙に納得いかない感情が湧いてくるのも確かなことではあった。

「ふむ……」

肩を竦めつつ、食卓からソファに移って新聞を手に取る。

いつものように新聞、雑誌の類は大量だ。第一新聞、第二新聞、第三報道部のいつものタブロイド――通称第三新聞に、あとはゴシップ系なり専門分野系なりの週刊誌の類が幾つか。

「あ。マスター」

「ん」

「新聞も、今度からこっちで配信されるようになるそうですよ」

すっと少女は隣に腰掛けて――

ほら、と端末機械の気晶画面を見せてくる。

距離が近い。ふわりと桃色の髪がそよいで洗髪剤(シャンプー)の芳しい香りが認識できる。昨年のことを思うと随分と接近するようになってきたものだ。

幼い頃の気性に戻ったのかと彼は思いかけるも、自然、密着する形になる腰や太股から感じられる瑞々しい張りと肉感は年頃の娘のものに違いない。

「ん……」

「便利なんですよ」

「ん」ある種の感慨に耐えつつ、気晶画面を覗き込む。

「見てください。この四角画(アイコン)」

少女が指差すのは気晶画面にずらりと並んだ四角い小さな画の群れの中の、ひとつ。下には英語表記で『Book&Magazine』とある。

「ここで本が買えるようになるんですって。正確には紙の本じゃなくて、端末で見られるように整形された情報が買える、って」

愛らしさそのものをかたちにしたような少女は、不意打ちもかくやという呼吸の間合いからそんなことを言ってくる。

彼は僅かに溜息ひとつ。

「……世界中の印刷屋が廃業するな」

「配信は学園都市ぐらいだそうです。外じゃ、本格的な出版社との提携は難航してるんだとかで」

「さもありなん」

「はい？」

「いや」

僅かに首を振りつつ、手にしたタブロイドを開く。

一面記事を目にして――ぴたりと。そのまままめくろうとしていた指先の動きを止めていた。

視界に入った一面見出しを目に留めた故だ。

『恐怖！　変貌成長する学生の噂！』

　これは――

『異能の酒！
　落第街勢力が学園都市全土に拡大か？』

　何だ――

『統治会三名が失脚！
　フラタニティ主宰ラフカディオ・ハーンの失敗のすべて』

　まるで――

『異能学生反乱事件！
　夜空に吼える《黒の獣》は本当に映写機の事故なのか？』

　何だこれは。
　まるで時間が融解したかのような記事見出しの数々は。
　第三報道部のタブロイドは基本的に最新の事案や長くとも二週間程度の『鮮度の良い』噂ばかりを書き連ねた娯楽大衆紙であるはずなのに、これは、如何にも奇妙なものだった。
　変貌成長する学生。昨年のファーブル兄（姉）弟の事件だ。
　異能の酒。アナベスから聞いた、二年前の事件のはず。
　前フラタニティ主宰ハーンの失脚劇は三年前と記録を目にした。
　そして、異能学生反乱事件。黒の獣。黄金王の力の残滓を得た最悪の怪学生(ヴィラン)ことコンラート・ファイトの引き起こしたあの怪異事件(クリッター・ケース)、顕現した黒のクリッターの姿は大規模映写機の事故であるとして処理されたのは一ヶ月前の出来事だ。黄金王との血戦で疲弊したせいで休眠状態にあった彼も、助手の少女の献身あったが故に事件の最後には何とか駆け付けられた。記憶には新しいが、やはり一ヶ月前ではある。第三報道部の発行する紙面に連なる記事の暗黙の決まり(ルール)を大いに破っている。
　これは、おかしい。
　すべてが決まりの外の過去の事件。
　尚かつ、時期がばらばらの事件であるはずのところを、まるですべてが昨日にでも起きた出来事であるかのように書かれている。二年前、三年前の事件についてもだ。
　時間融解。時間の混濁。
　見るがいい。
　最も大きく書き出された記事。
　そこに記された日付に至っては――

『四月二四日深夜！
　時計塔が地を穿ち、竜が空を覆い尽くした！』

　明日の出来事が過去形で記されている――！

反カダス主義

　時間をどう扱うべきか――
　いち早く情報を得るよう動くか、と考えはしたが。
　金曜であればむしろ自分から動かずとも彼らに会えるのだからそれを待つべきである、と白い彼は考えた。
　昼休みを告げる鐘が鳴って。
「今日も、一緒に来てくれますよね？」と、おずおずと右手に指を絡ませようとしてくる助手の少女の頭を撫でつつ「無論だ」と頷いて、彼は少女の日常の世界へと意図的に足を踏み入れる。

すなわち第二三小公園。

筐区域こと無数の教室棟ビルディングの建ち並ぶ区域にあって木々の緑色を湛えた公園に、彼は、少女と共に顔を出す。今日の件とは異なる事案から最近注目している緑色の髪の快活な少女や、パリ・ジャン気取りのあの青年も一緒だ。

「やっほー先輩たち。

今日もなんと、テスラ君が一緒です！」

「勿論ネオンもですけどね。先輩たち、今日は随分早いなあ」

「最近付き合い良くなったなお前」官憲(ジャン・ジャック)の男が視線を向けてくる。

「また自転車改造したりね？」と、やや警戒した顔の刑事の娘(アナベス)。

ふむ、と彼は静かに頷く。

ふたりとも、それぞれに自らの分野で情報を得ているのは一目瞭然だった。そういう顔、そういう瞳をしているのは見ればわかる。

頷きつつ、静かに煙草に火を付ける。

「今日はな。理由がある」

「なんです？」

「すまんな」首を傾げる助手の少女へ、そういえばまだ何も話していなかった。だのに彼女の日常へ土足で入り込む形となっていることに今更ながらに彼も気付き、何か侘びを入れねばならんなと考えながら頬に手を伸ばし掛けて――「いや。後で話す」

緑の髪の娘が見るからに不機嫌な顔でこちらを睨むのと少女を心配そうに見つめるのを交互に繰り返すさまを視界の端で捉えたこともあり、少女の頬に触れるのは我慢する。人に見せるものでもないし、緑の少女を悪戯に不安にさせるのも良くない。

「アナベス。情報を買うぞ」

「どの情報？」

「じょうほう？」

緑の少女が首を傾げている。

アナベス・マードックが情報屋紛いの活動をしていることをまさか知らなかったか？ それは拙いことをしたと思いかけるものの。

「イズミ。先輩が情報通で情報屋だって話、俺、確か去年の五月くらいにはしてたと思うぞ」パリッ子(パリジャン)が小声で。

「覚えてるよ？ 直接そういうの見聞きするのは初めてだからびっくりしただけ。あと、ほら」

「何だよ」

「テスラ君が何だか探偵部のお仕事してるっぽい感じに見えたから、驚いたの」「あー、それはあるな」「でしょ？」「あるある」

「……」

内心で溜息を吐きつつ、情報屋を自称する少女に向き直る。

「第三報道部の今日のタブロイドだ」

「変だったねえ」

「何か掴んでいるか」

「関連不明だけどそれっぽいのがね。高いよ？」

「……お前らな」官憲の男が不機嫌に唸って「よりにもよって風紀警官の目の前で怪しい情報のやり取りなんざするんじゃねえよ」

「情報の売買が校則違反とは知らなかったが」

「情報入手の手段が校則違反ってのが多いんだよ」

ぎろりとJJがアナベス・マードックを睨み付けて、彼女があの手この手で言い訳をするのを放って、彼は、不安げに服の袖を掴んでくる助手の少女の頭をまた撫でる。

「心配するな。お前にも勿論、働いて貰う」

「いいえ、心配なんてしてません。あなたが突然何かしてるのはいつものことです」笑顔。眩いほどに眩しく。

「ん」

無論。わかっている。

笑顔の裏で、少女がどういう類の心配をしているか。

だが、これが彼自身の生き方だ。

こればかりは少女の不安を解消させるように動く訳にも、いや、動かない訳にもいかない。そして、それは、少女自身もわかっている筈のことだ。彼の味方であることを自ら選んだ少女だからこそ。

頭を撫でたのも、笑顔を浮かべさせたのも、自らの弱さだ。
大いに自分はこの少女に依っている。
自覚すべきことではあった。
信念を狂気へと変え、ひとの身を捨てた我が身の傲慢。
「と言うわけで、お待たせ。テスラ君。
僕があくまで合法的手段によって入手した情報を、良心的かつ常識的な対価で提供することにやぶさかでないんだけど、どうかな」
「頼む」「チッ」
隣で不機嫌に舌打ちする官憲を無視しつつ。
刑事の娘の言葉に耳を傾ける――

†　†　†

システム・ウォレス。
もう知ってるよね？
フランス政府たっての希望って形で、ここマルセイユ洋上学園都市に試験敷設された都市型情報網（シティ・ネットワーク）。
世界各地の碩学さまが「百年先の技術だ」って言ったとか。
あのレイディ・エイダさえ、滅多に他の人の作った技術や機械を褒めることのないあのひとでさえ賞賛したっていう、あれね。
うん。ネオンも端末持ってたね。
勿論僕も持ってる。今日来てないけど、ミスター・ルイ・シャルルも持ってたと思うよ。便利だからね、システム・ウォレス。
別名はウォレス情報網（ネットワーク）。
元々はカダス北央で実験稼働されていたもので、最近じゃ英国や合衆国みたいな先進各国で試験的敷設が進められている共通規格のエネルギー／情報ネットワーク。行政情報サービスをはじめとして、生活、経済、娯楽、等々のさまざまな情報の革命的取り扱いと伝達が成される、っていう触れ込み。
ロンドン全土で試験稼働が行われて、去年のうちにパリ、バグダッド、香港、シアトル、シャッガイなんかで本格的な稼働が行われてる最中。
実際すごいよ。
まだ新聞とか雑誌や本の情報化は完全には成されてないけど、それでもさ、学園の公共情報や天気予報みたいなものは常時更新されてるし、これは学園都市固有のものなのかも知れないけど、学生同士が好きに発言する様子がずらーっと並ぶソーシャル・ネットワーク・サービスなんてものは、もう、あのお店がおいしいとかあの服がかわいいとか個人の感想から、委員会のお家騒動なり統治会メンバーの方々の動向なんて不確定な噂までが渦巻いて、繰り返されて、もう、すごいったら。
そう。不確定なんだけどね。
あくまで、不確定。
まるで第三報道部のタブロイドみたいに。
わかるかな。
あ、もう気付いた？
そうさ。理由、因果関係はまだわからないけどね。
きみが今朝見たタブロイドの時系列を無視した記事の羅列は、偶然にも、すべて、ゆうべウォレスのソーシャル・ネットで突発的に話題になった出来事なんだよ。全部。そう、全部。
どれもこれもが昨日起きた出来事みたいにね。

†　†　†

「気味の悪い話だろ？
誰か仕掛け人がいるんじゃないかって僕は踏んでるんだけど」
「七不思議みたい。やだこわいーこわい！」
「イズミ暴れるなって、爪で引っ掻くな！」
「パパＪＪはどうかな。何か、風紀警察で掴んでない？」
「……」

「黙(だんま)りなんて男らしくないなぁ」
「くっつくな。まあ、話題にならないこともない。何せウォレスには報道関係部活と違って報道協定なんてものもない。学生たちの他愛ないお喋りがそのまま載っかってるだけだ」
眉間に寄せた皺をほぐしながらＪＪが紫煙を吐く。
くわえたままだった煙草に、白い彼が指を鳴らして火を点けてやったのは、その様子に多大な疲労を感じ取ったためだ。どうやらこの男、昨夜から眠っていない。ソーシャル・ネットの奇妙な動きに風紀も何らかの対応を開始しているということだろう。
「たかがお喋りと看過できない状況でもあるか」
「まあな」
「何だ」
「お前らにも関係があるから一応言っておく」ＪＪの視線は彼には向けられない。あくまで彼への情報提供ではなく、後輩たちを案ずる先輩としての言動だ、と自分に言い聞かせているのか。「ウォレスの試験敷設は何せ急だった。地区を限定して慎重に開始すべきだったって声もあるが、学園都市の立法的安全の保障とやらの手札を使ったフランス政府のごり押しにさしものレディ・ナイチンゲールも折れちまったらしい。で、だ」
「テロルか」
「ああ。反カダス主義者が学園に入り込んでるって情報がある」
なるほど。
彼は内心で深く頷く。
ウォレス情報網は、正確にはカダスと欧州および合衆国による超国家的計画ではあるが、一般には『カダスからの新技術の強行的敷設』に映っているのは明確な事実。そして、この蒸気機関文明たる一九〇九年の現代では、カダス及び蒸気機関技術の拡散に対するさまざまな不満は機関打ち壊し(ラッダイト)運動に見られるようなテロルとして結実することも、ままある。
機関は文明と国家を豊かにする。
そして、いかに各国が否定しようとも、蒸気病や大気汚染を始めとする機関技術の発達に伴う害悪は厳然として存在するのだ。
数年前より世界の大都市に発生するようになった空の《隙間》やローマ教皇による『太陽発言』もそれを後押しするものではある。
だが——
「あん？」
「クン・ヤンの者どもでもあるまいに」
「クンヤ……テスラ君、なにそれ？」
「下らん」
反カダス。反機関。
彼は、ひとつの名を脳裏に浮かべてしまう。
崑央(クン・ヤン)——
オリエントの宗教思想(ブッディズム)に倣って地下のマガイ(魔界)と呼ぶ者もいる。
ヒマラヤの山嶺の地中に潜む、狂人どもの巣窟だ。
蒸気機関文明とその象徴たるカダスを憎悪し、暗がりにて刃を研ぎ澄ませる復讐者(テロリスト)たちの本拠。黒の蓮華座。極彩色の塔。中世期の暗殺者技術(ニンジャ)を継承する、狂信的な反カダス原理主義者たちの地底修練場。
指導者たる《黒い仏(フー・マンチュー)》は、シン国の悲劇として歴史に記されるかの事変の生存者であるとされ、それを否定しないことで結果的に自らのテロルを正当化している。
前世紀の悲劇のひとつ、北シン機関事変(ラッダイト)。
今や多くが語られることもない過去の事件だが、彼は、ニコラ・テスラは何もかもを忘れない。
数多の死があった。無念と、怨嗟と無慈悲とが交差して。
あすこから血涙の悪鬼が生まれたとしても、何ら不思議はない。
信念を狂気へと変え、我が身と同じくひとを捨てた者。
（……反カダス主義、か）
瞼を閉じて記憶を再生させる。
マガイの暗殺者たちと刃を交わしたことは、幾度かあった。

魔人と化した《黒い仏》とも。あれは《結社》の魔人を思わせる難敵だった。十数年前の大英帝国に於いては《悪魔博士(ドゥーム)》と呼ばれ、サー・シャーロック・ホームズとさえ敵対したあの復讐鬼は、雷電に灼かれながらも血涙絶やさず——

「マスター？」

助手の少女の声。

記憶の再生を行いつつあった彼は、俄に現実へ意識を傾ける。

黄金色の瞳が自分を見つめていた。

迷わずに、その頬に手を伸ばす。

触れる。

この瞳から、たとえば赫い涙など、流させることがあれば。

自分は耐えられないだろう。

かの血涙の悪鬼と何ら変わらぬ存在に成り果てる。

ふと、そう考えて——

触れていた。周囲の目など一切気にはしなかった。

「わ、な、な、ちょっ、マスター!?」

「あれ。大胆だね、テスラ君。ほらパパ。大胆」

「あー、ったく、お前らまだ二年生だろうが。校則違反だぞ」

「ち、違います、ちょっと頬触られただけで」

「……ネオンはテスラ君と結婚するの？　ねえ。そうなの？　ねえ。そうなの？　ねえ。そうなの？　ねえ。なんで？　え。なんで？」

「おいイズミ怖いぞ突然どうした——」

「ネオン」

少女の名を呼ぶ。

「は、はい」

「今日、以降の授業は早退するぞ。来い」

「え」

「おや」

「おい」

「ネオン！」

「うぇ」

「あ、の、マスター、どうして、早退なんて……」

顔を真っ赤にして消え入りそうな声を出す少女に、何か自分は妙なことをしたろうか、と僅かに思案しつつ。彼は短く告げる。

何ら恥じることなく、堂々と。

「——第三報道部を締め上げる。

剣はペンよりも強く、しかしてペンよりも雷は強い」

第三報道部

何それ。

何なの、それ？

いつもの通りと言えば、いつもの通り。

そうよね。うん。いつもと同じ。

彼がよくわからないことを言って堂々としているのはいつものことなのだし、勘違いさせるような言動だってそう。いちいち反応してたら身が持たない。

そう、あたしは、ネオン・スカラは認識してたはずなのに。

何故いつも引っかかっちゃうんだろう。

どうして？

どうして、って。

理由は割とはっきりしていて——

考えると顔が熱くなる。耳まで熱さを感じるから、多分、頬だけじゃなくて耳の端まで真っ赤になってるんだと思う。

まだ寒い四月の夜気が、全然気にならないくらい。

「あの、マスター」

声を掛ける。彼に。



「マスター・テスラ」
　彼の名を呼んでみる。
　ずんずん歩いて、ひとりで行かないでくださいねって何度も言ってるのに、今日だって何度もひとりで行ってしまって。第三新聞のタブロイドを売っている路面機関車駅の売店、運輸委員の朝当番の学生、小規模印刷所、それから小規模出版系の部活や同好会を幾つも。歩いて、聞き込み。歩いて、聞き込み。
　こんなに地道にまるで探偵小説の探偵みたいなことをする彼の姿なんて、あまり、見たことないと思う。
　本当はシャルル先輩に話を聞きたかったみたいなのに、なぜだか電信通信器（エンジン・フォン）を掛けようともしないし、あたしが携帯秘書装置の機能で『手紙（メール）』を送ろうとするのも「今は駄目だ」と止めてしまって。
　だから、もうこんなに暗くなって、すっかり時刻は夜。
　夕食はどうするんです？
　そう訪ねたら「買い食いで済ませる。お前の手料理が食べられないのは大いなる損失だが」とか平気な顔で言う。白い彼。
　また、変なこと言って。
　あたしがあたふたしているうちに、すたすた進んで。
　もう。
　あなた、まるで変わらない。
　先月のあの日から、何かが変わった実感は確かにあって、それがどんな風にあたしとあなたを変えていくのか、ちょっと怖くて、でも、とても楽しみで――
　そんな風に、どきどきしてたのが莫迦みたい。
　ほら。今だって、全然変わらなくて。
　もう。
「もう、マスター！」
「何だ」今度はぴたっと止まってくれる。なぜ？
「ちゃんと教えてください。第三報道部がおかしくなってるってことは、あたしも何となくわかります。でも、どうして丸一日こうして歩いてるんです？　今日発売のタブロイドを、売られた場所から運んだ人、刷った場所に編集の下請けをした小部活まで辿ってるのだって、わかります。でも」
　でも、それってておかしい。
　一気にまくし立てる――
「そんな、麻薬の取引を探るみたいな調査しなくたって、第三報道部の部室棟へ行けばいいじゃないですか」
「ふむ」それもそうだな、みたいな顔？　違う？
「ふむ、じゃなくて……」
「どうした。ネオン」
　まじまじと。
　あたしを見つめてくる、彼。
　学生用居住区域の一角、裏路地の暗がりの中で機関街灯（エンジンライト）の明かりの中で立ち止まって、白い彼があたしに振り返る。
　視線、まっすぐ。
　あたしの胸へ――
　胸？
　え？
（え。な、なんで胸見てるの）
　また、さっと頬が熱くなる。
　ああもう！
　ちゃんと考えて。ネオン。彼が見てるのは本当に胸？　ううん、違う、違うと思う。胸、上半身。ずっと彼の瞳を見てるのだから少しくらいはわかってくる。特に、先月のあの日からは意識して見つめてる。だから、わかるよ。
　彼が焦点を定めて見つめる時と、焦点をややぼかして相手の像を捉えて見ている時の差。今はどっち？
　多分、後者。
　あたしの上半身。肩の動き、胸の動き、そういうものを見てる。
　多分、あたしの息が切れていないかどうかを見てる。

——心配してくれてる？
「……ありがとうございます」
「会話が繋がっていない」
「ちゃんと答えてくれると思ったから、言うべきことを言いました。
大丈夫ですよ、苦しくないです。早足ぐらいで疲れません」
「ん」
彼は視線を今度はまっすぐあたしの瞳へ向けて、頷いて。
「第三報道部に部室はない」
「へ」
「正確にはあるが、ない。
前にな。ああいった記事を書くのはどういう莫迦かと興味を抱いて登録上の部室棟へ顔を出した。去年のことだったな」
「行ったんじゃないですか。もう。
教育区域にありますよね、第三報道部の部室棟？」
名前は確か、第三報道部中央編集部ビルディング。とか。
「まあな」
「……」まあな、じゃわからないです。
「何年か前には明確に編集部員が出入りしていたそうだが」
——何年か前？
「私の見たところ、二年だ。
第三新聞中央編集部に人の出入りした形跡はない」
「それじゃあ……」
「そうだ。第三報道部のタブロイドは発行され続けているが、第三報道部そのものはどうやら通常の部活形態を取っていない」
だから、聞き込みを続けたの？
ようやく合点がいって、あたしは「そっか」と小さく息を吐きつつ呟いてしまう。それなら彼の行動だって納得できる。
「それなら——」
今行こうとしているのは何処なんですか、と。
言おうとしたら。

「いたいた。ようやく見付けたぜ。
お前らかァ、第三報道部を探してる連中ってのは？」
声。響いて。
路地裏の壁に手を当てながらこちらを睨む、覆面(マスク)姿のひどく大柄な男子学生がいた。ロダン先輩ほどじゃないけど、腕も脚もとても太い。独特の気配を纏う覆面。同じく独特の衣装(コスチューム)。
あたしは確信する。
きっと、あのひとは怪学生(ヴィラン)だ——
「白い男と桃色の髪の女ね。
女は俺の好みだな。いい女だ、いただいていこう」
言葉の直後。
覆面学生はこちらへと歩き出す。
ぴたりと掌を当てていた壁を窓枠ごと音もなく剥ぎ取って、軽々と掲げながら——！

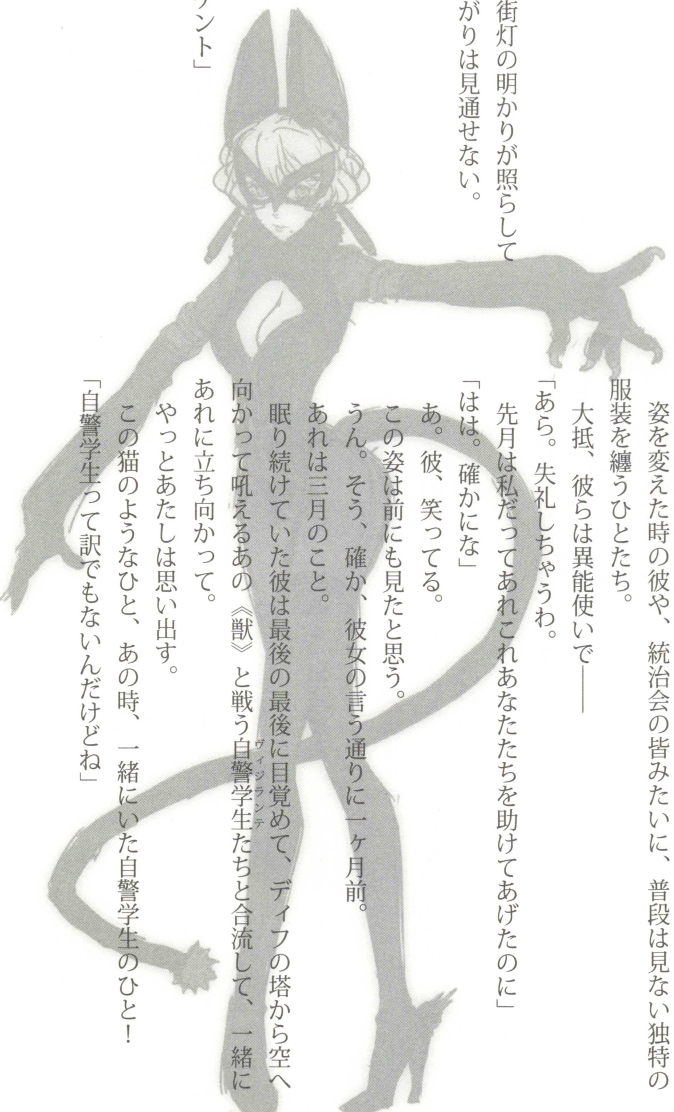
†††

「……誰が貴様なぞにくれてやるか」
「マスター、あの、そんな風に上に乗ったら苦しいですよ」
「私は苦しくない」
「下になってるその人がです……」
あっという間の出来事だった。
窓枠ごと剥ぎ取った壁を武器のように振り回しながら襲い掛かってきた覆面姿の異能学生を、彼は、マスター・テスラはあっという間にのしてしまって。
壁を左手で払って、そのまま右手で異能学生の顎をパンチ！
少しだけ雷電が光って、眩しさに瞼を細めたら、その瞬間にどさりと重い音。大柄な学生はその場に倒れ伏して。
ちょうど舗装道路の上にずんと落ちた壁の上に重なって。
その背中に、何の遠慮もない風に彼が腰を下ろして。

　脚まで組んで。
「だめですよ、マスター。そんな風に」
「駄目なのはこいつだ」
「そのひと白目剥いてます」
「ん」
「どいてあげてください」
「やれやれ。お前は、優しいな」
「しみじみ言ってないで、そこからどく！」
　大きな声で言うと、彼は肩を竦めながらぱっと降りる。
　ああ、よかった。
　怪我なんてして欲しくない。
　血、流して欲しくない。誰にも。
　見たくない――
「甘いのねえ。でも、丁度いいのかしらね。鋼鉄の男（マン・オブ・スティール）は強すぎるものね」
「誰？」
　あたしは誰何の声を掛ける。
　暗がりの――ううん、どこだろう。機関街灯の明かりが照らしている範囲は狭くて、路地の多くを占める暗がりは見通せない。
　声――
　どこ？

《視界右上》

　え？
「《猫婦人（シャダム・ココ）》か」
「正解。勘がいいのね、流石はクラーク・ケント」
「私はニコラ・テスラだ」
「はいはい」
　視界の右上から、声。



　そのまますらりと機関街灯の明かりの下へ飛び降りる。
　すらりとした、人影。
　一見しただけで女性とわかるのは、ぴったりとした樹脂素材のスーツを身に着けているから。長い脚、印象は、黒。黒い猫。猫のひと。彼が呼んだ通りの猫の女性（シャダム・ココ）。
　綺麗なひとだった。
　目元あたりを覆う仮面を付けているけど、わかる。
　しなやかな姿。
　大胆に開いた胸元、ヒールの高い靴に長い脚。やっぱり大胆に脚から腰、お尻のかたちまでくっきりわかる独特の衣装（コスチューム）。黒いしなる尻尾は、神経が通ってるみたいにゆらりと揺れて。
　明るい色の金の髪からは、ぴょんと立った二本の黒い耳。
「怪学生（ヴィラン）……？」
　自然と言葉が漏れていた。
　姿を変えた時の彼や、統治会の皆みたいに、普段は見ない独特の服装を纏うひとたち。
　大抵、彼らは異能使いで――
「あら。失礼しちゃうわ。先月は私だってあれこれあなたたちを助けてあげたのに」
「はは。確かにな」
　あ。彼、笑ってる。
　この姿は前にも見たと思う。
　うん。そう、確か、彼女の言う通りに一ヶ月前。
　あれは三月のこと。
　眠り続けていた彼は最後の最後に目覚めて、ディフの塔から空へ向かって吼えるあの《獣》と戦う自警学生（ヴィジランテ）たちと合流して、一緒にあれに立ち向かって。
　やっとあたしは思い出す。
　この猫のようなひと、あの時、一緒にいた自警学生のひと！
「自警学生って訳でもないんだけどね」

「え」
あれ？
「猫は気まぐれなの。わかって？
今日の私は神秘の猫。ダーリンがあなたたちを待ってるわ。
あと、それ、そのままにしないほうがいいと思う」
つい、と猫のひとが指さすほうを見る。
何を指さしたの？

《端末を》

「携帯秘書装置（ポケット・セクレタリ）……」
あたしはぽつりと言葉を漏らしながら、それを見付ける。
道路にずんと落ちた壁の、そのまた上に倒れ伏した大柄な怪学生の近くに落ちていた、手帳よりやや大きなノートぐらいの大きさの機関機械。あの大きさと薄さは、憶えがある。
あたしも持っているもの。
携帯秘書装置。
まだ気を失ったままだよね、とおそるおそる近付いて、そうっと端末を手に取る。
気晶画面（エア・モニター）を見ると『詩集同好会を守れ。白い男と桃色の髪の女を止めろ。報酬はゴールド二枚』と、端的に書かれた英文が表示されてるのがわかった。
「……依頼されてる？
誰から……マスター、このひと、誰かから、って」
振り返って彼のほうを——
「しかし、猫とはな。前も思ったが実に良い」
「あら、あら。何かしら」
「その衣装（コスチューム）だ。良い尻のかたちを——」
「マスター！」
もう！
ちょっと目を離したすきに！
ニコラ・テスラ！

†††

詩集同好会。
学園都市に数多くある小規模編集系部活のひとつ。
そこは、明かりも点いていなかった。時刻は深夜二三時。部員は帰ってしまっていても何も不思議じゃない。
怪学生の持っていた端末に記されていたその場所は、やっぱり、彼の——マスター・テスラの目的地そのものだった。
謎めいた言葉の猫のひとと別れたあたしたちは、ふたり、無人の詩集同好会の部室棟、つまり、学生用居住区域の裏路地にひっそりと建った小さな雑居ビルディングの四階へ。
そこには、ひとり。
先客の姿。
猫のひとがダーリンと呼んだひと。
暗がりの部屋の中で、なお暗い色を湛えた黒いひと。
体、黒鋼で覆って。
顔、仮面で隠して。
腰にはサーベルを帯びたそのひとを、あたしは知ってる。
四階部室の窓辺に立って、黒い人影そのもののようにしてあたしたちを待っていた、《Z》のひと。
「ミスター・ゾロ！」
名を呼んでも黒鋼の仮面は微動だにしない。
こっちを見てくれない？
あれ？
あの時——先月、黄金の薔薇を彼が倒した後の嵐の一週間——《落とし子（スポーン）》を名乗った異能学生たちの反乱事件の時、巨大な獣が空に吼えた時、どちらの時も、あたし、この黒いひとの姿を見た。

助けて貰ったこともあった。
黒い鎧の衣装(コスチューム)を身に纏ったひと。
でも、このひとはあたしを覚えてない、の、かな?
ちらりとも黒い仮面はこっちを向いてくれない。
あれ?
なぜ?
「狐(ゾロ)か。いつ猫とつがいになった」
「……冗談を聞いている時間はない。鋼鉄の男」
彼のほうは見てるのに。
見てる……よね?
「ミス・スカラ・スミリヤ。その後、無事なようだな」
「あっ、は、はいっ」
あ。見てくれた。
黒い仮面が傾いて、こっちを向いてくれる。少しだけ。
「あの時は、ありがとうございま」「それで。猫はお前がここで待っていると言っていたが」「あっ遮らないでくださいマスター」
「見ろ」
黒いひとが、部室の机に置かれた端末を指さす。

《端末を》

あ——
また、端末。
また、携帯秘書装置。
「第三報道部は自らの情報網をウォレスへ載せ替えた。そして、今朝、あの時空を破断させた奇妙な紙面を生んだ」
黒いひとは何かを彼へ投げて寄越す。
電信器(フォン)?
「防護済みの特別製だ。詳しい話は電信越しの奴(オーギュスティーヌ)に聞け」

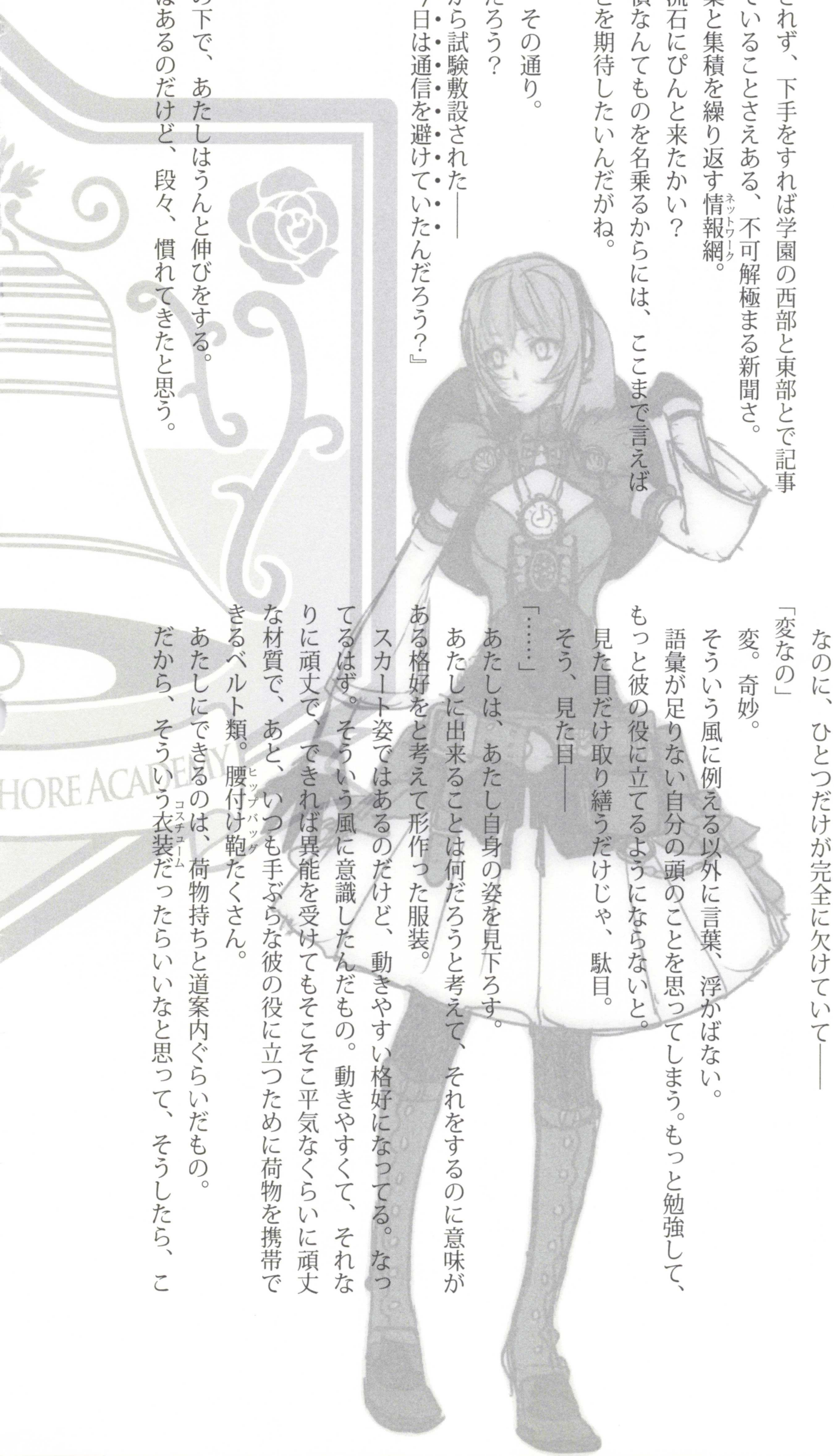
† † †

『やあ、鋼鉄の男。ニコラ・テスラ。
随分と遅いご登場だね。僕と僕のゾロはすっかり待ちぼうけてくたびれてしまったよ。超人(スーパーマン)の名が聞いて呆れるじゃないか。
推理してやろうか。不要かい?
それじゃあ結論、いいや、まずは説明が必要だろう。
第三報道部。きみはその正体をまだ掴めていないだろう。僕とゾロは一時間前には詩集同好会に辿り着いていたから、結論が出ているんだよ。
つまり、第三報道部は最早部活でも何でもないのさ。
んあー……まあ、これは矛盾でも言葉遊びでもないよ。
確かに部員は存在する。だが、部活ではない。部室もない。第三報道部。その正体は明確な部活ではなく、学園都市に何かしらの理由で作られ、残されたある種の情報網(ネットワーク)とでも言うべき存在だった、という訳だ。
学生街の公園で散歩する学生、いつも落第街の路地に座り込んで酒瓶を抱えた不良学生、噂好きの女子、友達の友達の話をする男子、他にもあれこれと……学園中に存在する噂好きの《耳》と《口》が第三報道部の末端部員と言えるだろう。
これを正式な第三報道部員、こちらは正規の入部手続きを果たした部員記者たちが、編集長の指示も編集部での打ち合わせもないまま各自が思い思いに喫茶店なり自室なりで記事を作成し、郵便や電信などでどこかへと送り付ける。
彼らが『第三報道部中央編集部』と信じる、ただの転送用の運輸委員会ビルの私書箱にね。
そう。その通りだ。
実際のところ、中央編集部などというものは今や存在しない。
私書箱に届いた記事は、二十年契約などというふざけた約束事が

交わされた各部へとそれぞれ自動的に振り分けられる。編集業務に長じた小規模出版系の部活や同好会へね。
たとえば、きみが立っているそこのように。
数多の編集系小部活では『第三報道部から委託された』という意識の下で記事の編集作業（パッチワーク）が行われ、やがて、学園都市人工島各地の小規模印刷所で刷り出され、あの無邪気な噂の集合体たるタブロイドが僕ら学生の手元へと届く。
第三新聞（タブロイド）――
すなわちそれは、明確な意思の下で編み上げられたものでも何でもなく、面白そうな噂を書き連ねた記事の群れをひたすらに貼り付けて送り出す、機械仕掛けの玩具箱めいた、自動的なものだったんだよ。
紙の仕様も統一されず、下手をすれば学園の西部と東部とで記事内容が一部異なっていることさえある、不可解極まる新聞さ。
言わば、噂の収集と集積を繰り返す情報網（ネットワーク）。
ふふ……ここで流石にぴんと来たかい？
きみも一応は探偵なんてものを名乗るからには、ここまで言えばわかってくれることを期待したいんだがね。
ん？
……うん。ああ、その通り。
何かに似ているだろう？
たとえば、今月から試験敷設された――
だからこそ君も今日は通信を避けていたんだろう？』

情報空間（クラインの壺）

黄色がかった空の下で、あたしはうんと伸びをする。
不思議な光景ではあるのだけど、段々、慣れてきたと思う。
もう半日はここにいる。
どこまでも広がる黄色がかった空。
どこまでも続く鈍い鉄色の山の峰。
黒い直方体が連なる林。
雲のかわりに浮かぶのは、大小さまざまな半透明の立方体の群れ。
奇妙な世界――
あたしたちの世界に似た、でも、何もかもが異なる世界。
灰色の地面に立つ自分自身を感じるし、風もわかる。
見える。
聞こえる。
触ることだって、できる。
なのに、ひとつだけが完全に欠けていて――
「変なの」
変。奇妙。
そういう風に例える以外に言葉、浮かばない。
語彙が足りない自分の頭のことを思ってしまう。もっと勉強して、もっと彼の役に立てるようにならないと。
見た目だけ取り繕うだけじゃ、駄目。
そう、見た目――
「……」
あたしは、あたし自身の姿を見下ろす。
あたしに出来ることは何だろうと考えて、それをするのに意味がある格好をと考えて形作った服装。
スカート姿ではあるのだけど、動きやすい格好になってる。なってるはず。そういう風に意識したんだもの。動きやすくて、それなりに頑丈で、できれば異能を受けてもそこそこ平気なくらいに頑丈な材質で、あと、いつも手ぶらな彼の役に立つために荷物を携帯できるベルト類。腰付け鞄（ヒップバッグ）たくさん。
あたしにできるのは、荷物持ちと道案内ぐらいだもの。
だから、そういう衣装（コスチューム）だったらいいなと思って、そうしたら、こ



ういう姿になっていて。

「……似合ってる、かな」

くるりとその場で回ってみる。ドレス状にふわりと広がった形のスカートが揺れる。動きやすさを意識したから、男性用のズボンになっていても仕方ないと思ったけど、スカートになってくれたのはちょっと嬉しい。

うん。可愛い服。

でも、ちょっと恥ずかしい。

どうして胸元、こんなに開いてるんだろう？

ダイムノベルはこんな風じゃなかったと思うのにと――

「戻ったぞ」

「マスター。何か、見つかりました？」

「特には。妖蛆の素体らしき情報体(データ)ぐらいか」

「見つけてるじゃないですか、な、なにそれ。うじ？」

「恐らく、旧図書館地下書庫の情報あたりと繋がり始めている。だから地下書庫なぞ作るべきではないと私はいつも言うのだ」

「？？」

「それなりに危険が多い。書籍に記された空想さえ条件が揃えば形態を得る。ウォレス情報空間、どうにも侮りがたいものだ。ネオン、いつ現実(そと)へ戻っても構わんぞ」

黒い林から戻ってきた彼――

あたしの、ニコラ・テスラ。

立方体の岩のようなものに腰掛けながら、取り出した紙巻き煙草にぱちんと指を鳴らして火を点けて、息吐いて、さらりと言う。帰れ。なんて。帰らないって、わかってるのに？

「帰りません」

「ついて来なくとも良いと言ったろうに」

「ずっと一緒です」

努めて、さらりと。

彼が帰れと言うのと同じくらいに軽く。

言えてるかな。

言えてるよね？

「ん」

「あたし、マスターとずっと一緒にいます。

そう言ったでしょう？」笑顔も自然になるよう気を付けて。

「……」

何も言わずに紫煙を吐く彼。

よし。言葉、止めた。

帰れだなんて言わせないんだから。

「それより」もう一度くるりと回って「まだ言って貰ってないと思うんですけど、この服、似合います？」

「美しい」

「う」怯みかけるけど、なんとか我慢。顔熱いのも我慢。

「美しいぞ。合衆国西部(ウエスタン)の銃使い(ガンマン)の装いか？」

「そうなんです。本当はお揃いにしたかったけど……。あなたの服やマフラーがどんな国のどんな様式の服かわからなくて、きちんと想像できなくて。だから、あたしの知る中で一番動きやすそうな女の子の服を考えたんです。ダイムノベルの主人公」

何度か読んだ合衆国製のダイムノベル。

どうしてか、胸に残って。

西部劇のガンマンの少女。

早撃ち(クイックドロー)が誰より得意な二丁拳銃使い。

「ど、どう……ですか？」

「美しい」

う。

うう。

「そしてお前の胸元を飾る我が電磁時計(テスラクロック)。

実にいい。似合っている。衣装持ちの自警学生や怪人学生の向こ

うを張って凝るならば、それなりの装備も必要だからな」
「ふふ」
つい、思い出して笑ってしまう。
この奇妙の世界へと《意識投入（ジャックイン）》とかいうことをした、数時間前。
現実（そと）での午前一時頃。博士（ドクトル）の仰った通りに意識してこの衣装を形作ったあたしの姿を見て、彼、胸元が開いているのがいけない、なんて真顔で言って、どこからか取り出したこの機関機械を首に掛けさせて。
他にも、計器類。機械類。
ベルトや肩の革部分にぺたぺた貼って。
『私のとっておきの電磁兵装（テスラマシン）だ。
武装ではないが、窮地にあってはお前の身を守るだろう』
そんな風に言って――
「ふふ……」
思い出すと、何だかおかしい。
自分のことみたいに誇らしげな顔をして、あたしを見るあなた。
あたしは、そんなあなたを見て、可愛いなと思ったよ。
子供みたい。おじいちゃんなのに、ね。
「ん。随分、衣装と我が電磁兵装が気に入ったようだな。
ふむ。ならば、お前にも二つ名のひとつも欲しいところだ」
「へ」
「その姿。外連（ケレン）と美しさの同居。
自警学生や怪学生にも引けを取らん。
ならば、あれらが名乗るような二つ名がお前にあってもいいだろう。話によれば、どうやら統治会の面々にもそういうものがあるそうだ。やれ《白銀の剣（シルバーサムライ）》だの《銀の靴（クイックシルバー）》だの《秘密兵器（ウエポンX）》だのと」
「い、いいですそんなの」
――そう。名前なんて、どうでもいい。
「そうだな、お前ならばそう……」
「いいですってば」
――あなたに可愛いって言って貰えるのなら。
「お前は《輝きの娘（パワーガール）》を名乗るがいい」
「名乗ったりはその」
――ネオン、ってあなたが呼んでくれれば。
「私の隣に立つに相応しい、良い名だぞ」
「名乗りません。
ずっと一緒にいるけど――絶対、名乗ったりはしません！」
すうっと息吸って、吐くのと一緒に大きな声で。
周囲には誰もいない。
夢の中のような場所だとわかっているから。
遠慮なく、大きな大きな声で――

†††

『情報空間。
これからきみたちが赴くのは、カダス王侯連合のとある積層都市（インガノック）でそう呼称されていた空間だ。否、正確には何処の空間でもない。
情報と機関動力（エネルギー）によって構成された零（ゼロ）と一（ワン）の数（すう）の領域を視覚化した疑似領域という表現が相応しいかも知れないが、やはり正確には我々の存在する現実と地続きであって、別の世界という訳ではない。
世界の壁を取り払うのは哲学なり天文学なりの領分であって、機械工学ではない。あくまで概念的な意味での異なる場所だ。
実際には、きみたちの意識は情報体（アバター）となって学園都市を覆うこの無形の情報網（ネットワーク）へと没入（ジャックイン）することになる。
意識の投影。機械の見る夢の中へ行くようなものだ』
半日前――
四月二三日から二四日へと日付が変わる頃。
突然来訪したあたしと彼を出迎えた、P博士の言葉。
第二先端科学部顧問、フェルナンド・ポルシェ博士。
正真正銘の碩学さま。カダスの碩学位をお持ちの偉い先生で、彼

の話だと、あの《Z》のひとのスーツを作ったのだとか。
アンヌさんが付けている異能検知器の原型を作ったのも彼。
博士は、ベッドのような機械をあたしたちに見せながら、こんな風に説明してくれた。携帯秘書装置と機関動力管で接続された、大きな機械。
言葉の意味は、正直なところ——
よく、わからなくて。
あたしは目を白黒させるばかりだったのだけど。
『本来、高度に情報化された都市でもなければ情報空間など成立し得ない。これはそう在らんと碩学によって形作られたものではなく、あくまで、副次的なものなのだ。都市に張り巡らされた機関動力の網、そして無数の情報の網、これらが重なることで初めて、自動的に形成される。無論視覚化などはされんがね。
かの積層都市以外では観測されたことのないものだし、観測の事実も一般市民には知られていない。だが。ウォレス情報網を試験敷設された都市に於いても情報空間は現在進行形で形成されていく！
すなわち！
その意味するところは！』
博士の言葉に熱が籠もって。
あたしは、いよいよ意味がわからなくて。
対して彼は、ニコラ・テスラは、大きく頷いて。
『同じく無形の情報網であった第三報道部の構造。
それらが、何かしらの要因でウォレス情報網(ネットワーク)——いいや、ウォレス情報空間(メタスペース)と接続を果たしてしまったと言う訳か』
『その通り(Exactly)！
ふたつの情報網は数学的奇跡により結びつき、そして、大いに混乱している。朝のタブロイドに見られた時間の融解と混濁がまさしく悲鳴の如き混乱と混沌を証明している』
『人為的なものではないのか』
『さて。何かしらの意思は働いているだろう。
現に、きみたちを襲ったという異能学生は明確に情報網からの指令を受けていた。きみたちの持って来た携帯秘書装置を解析したが、あの英文は特定の場所(アドレス)から送られたウォレス手紙(メール)ではなく、自然発生的にウォレス情報網からもたらされたものだ』
『ならば——』
『意思あるものは、ウォレス情報網の中にいる。
そして、それを探るには情報空間へ没入することこそ最適解』

†††

——情報空間。
そこは本来、限りない数(すう)の羅列でしかないものだ。
そこに在るすべては仮初めのもの。
であるが故に情報体として没入するきみたちは、大脳の計算能力が許す限りあらゆるかたちを成すことができるだろう。
強く意識することで、如何様にも形態を取れる。
仮初めの数式の空間を自らの頭脳という計算機で弄ればいい。
そう、博士は仰っていて。
黄色がかった空の下で、あたしはなるほどと頷く。
意味をはっきり理解できた訳じゃないけど、ほら。実際にあたしも彼も、ちゃんと服装を形作れてる。
彼は煙草だって作れていて。
紫煙だって吐ける。
つまり。ちゃんと考えることができれば、意識できれば、何かを作ったりはできるということ。この胸の機械だってそう。彼がそう意識したから生成された、の、よね？
ウォレス情報網の中に、あたしたちはいて。
あやふやでかたちの定まらない夢の中のようなもの。
そういうこと——
驚いていないと言えば嘘になるけど、でも、それほど驚いた気が

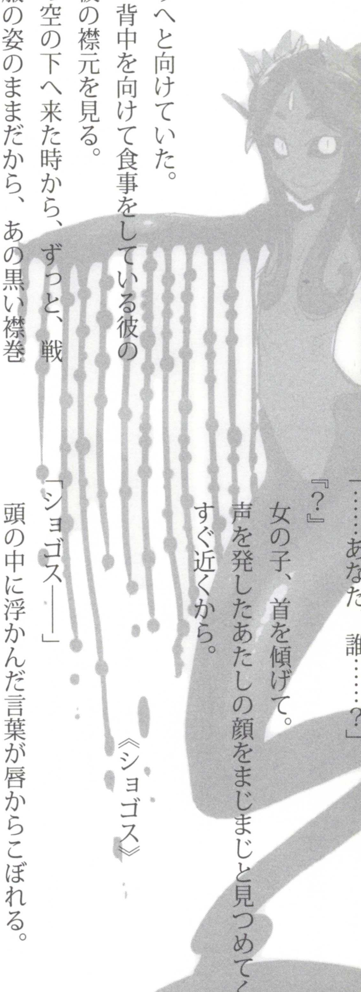
しないのは、すっかり異能騒ぎのある学園生活に慣れてしまっているせい、かな。
現実と違う光景の場所も初めてじゃない。
数式空間。
図譜の中。
そして、黄金の仮面の空にも――
「……腹が減ったな」
紫煙を吐きながらぽつりと、彼。
彼が腰掛けている立方体の石、それもきっと、情報網に転がる無数の情報のひとつ。多分。
「お腹ってここでも空いちゃうんですか？」
「人間と違って、私は意識と肉体の境界が曖昧だからな」
「？」
「つまり腹が減った」
「それじゃあ、何か用意してみますね」
「頼む。私の頭脳では料理に関する情報が足りんだろう」
「はい」
頷いて、やってみる。
意識する。
衣装などを形作った時と同じに。
複雑なものを考えて失敗するのは嫌だから、簡単なもの。
いいよね。ある意味、ふたりで街の外に出たようなものなんだから、ピクニック的なものだと考えれば、簡単な――
「あ。できた」
簡単な、サンドウィッチを幾つか。
ローストビーフと薄く切ったチーズやレタスをバゲットに挟んで、先日の潮騒通りで見つけた西欧調味料同好会のお店で買ったものと同じ味を意識した粗挽きのマスタードを添えて。
ツナとトマトを挟んだものにはバジルにオリーブ油を足して。
あ、できる。
ほら。意識してみたそばから、ぽん、ぽん、と。
けっこう簡単？
ピクニック用の大きな籠（バスケット）まで出て来た！
「ほう。見事なものだな。
やはり新しい技術というのは若人に向くものか……」
「ふふ。面白いですね、これ。はい、マスター」彼にバスケットごと手渡して「たっぷりめしあがれ？」
「お前は食べないのか」
「今日のお昼はイズミたちと約束してるの、忘れちゃいました？
ここで食べたら、お昼食べられなくなっちゃいます。マスターと違って幾らでもお腹に入ったりしません」
「……お前、情報体（アバター）の仕組みは何も理解していないな」
「？」
「いや。いい。有り難くいただこう」
あたしの近くの丸い無機物（オブジェクト）に腰を下ろして、バスケットの中から取りだしたサンドイッチに早速かぶりつく、彼。マスター・テスラ。
ふふ。おいしそう。
あんなに大きな口開けて、かぶりついて。子供みたい。
「ふふ」
「何だ」
「いいえ、何でも」
「そうか」
ん。目線、逸らした？
何だろう。食べてるところを見られるの、恥ずかしいの？
「……」
んん？
「……」
ん――
「……」
あっ。

マスター！
このひと、い、今、視線、あたしの胸元――
「私は悪くない」
「……す、すみません。胸元開いてる衣装出したの、あたしですから……えっと、すみません」
「私は構わんのだがな。そうやって屈んで覗き込まれると」
「し、失礼、しました」
そっと彼から距離を取る。
なんだか、気まずい。
視線を向けられているのも何だか恥ずかしいような気がしてきてしまって、あたしは彼の背後に回って、少し距離を取って。地面にぺたんと腰を落とす。
普通の地面とは違って、つるつるの平面の地面。
空間すべてが情報網の具現、ということなら、地面は何を顕してるんだろう。わからない。
「とりあえず、と」
意識して、あたしはノートを取り出す。
情報空間へ入ってから数時間。観察してわかることや彼が調べてきた場所については、こうしてメモを取っている。空模様、何も変わらず。鉄色の山嶺、特になし。黒い林の隣にある建物のような立方体には入口なし。空の立方体、未確認。黒い林、やや危険。
「んー……」
空を飛べたら浮遊立方体も確認できるかな。
そもそも、どこまで広がってるんだろう。学園都市と同じくらいの大きさだとしたら、ふたりで、というか実際にはマスターひとりでどこまで調べきれるんだろう。
「うまいぞ」
向こうから、彼の声が響く。
あたしはノートから目を離さずにありがとうございますと返答しつつ表情を努めてきりっと保つ。だって、いちいち赤くなったり、嬉しいですって顔に出してばっかりだと、いつまで経っても子供扱いされ通しな気がするもの。うん。
「ドクトルは自分の作った新しい機械を使いたかっただけだ。敢えて乗ってやるのも莫迦らしいかとは思ったが、ふむ、これを味わえた上にお前のその姿を見れたのだ。無駄ではなかったな」
「はいはい」
あえて、ちょっと冷たい反応も。
うん。ええ、ええ。
今のは、大人っぽくいけたかも知れない。
「地図、作っておいたほうがいいかな」
ノートに、目に見える範囲の地図を描き入れる。
もう少し手元が明るいと嬉しい。黄色がかった空は夜ほどに暗くはないものの、昼日中のように明るいかと言うとそうでもなくて、明るくもなくて暗くもない、奇妙な感じ。
と――
ふと、手元が不意に明るくなる。
明かりを掲げてくれた？
マスターが？
「あっ……」意識してノートから目を逸らさない。いちいち喜んだりしないの。ネオン。「……ありがとうございます。マスター」
『……』
「……」
『……』
「…………」
ん？
マスターじゃない。
マスターがあたしを覗き込むなら、もっと大きな影が差すはずだもの。影、小さい。女の子ぐらいの大きさの影。
「へ」
あたしは顔を上げて――

硬直してしまう。
知らない顔が、そこにあったから。
印象は、緑色と黒色。艶のある光沢。
ふんふんとあたしの手元を覗いて頷いている、女の子。
異国的(エキゾチック)な印象は、褐色の肌のせい？
インドのひと？
アフリカのひと？
オリエントのものに見える風変わりなランタンを掲げて、あたしの手元を照らしてくれている。の、かな。
え？
え、嘘、いつの間に？
何処から――

《襟巻(マフラー)》

あたしは自然と視線を彼のほうへと向けていた。
女の子の向こうに、ちょうど、背中を向けて食事をしている彼の姿が見える。襟巻。意識して、彼の襟元を見る。
彼は、情報空間――この黄色の空の下へ来た時から、ずっと、戦う時に纏う異国の服めいた白い服の姿のままだから、あの黒い襟巻を首に巻いている。
うん。繋がってる。
繋がってるね。
女の子の体の下半分は、ぐねぐねとうねりながら、彼の襟巻に繋がっていて――
襟巻からにゅるりと出て来た女の子。
何も着てない。
裸の、あたしより何歳か下に見える緑と黒と褐色の女の子。
へ？
なに、それ？



夢のような場所だとは博士も言っていた。けど。本当に、夢の中でしか見ることのないような女の子が、あたしの目の前にいる。
いる？
本当に？
『……』
大きな瞳があたしの手元を見てる。
変わった瞳。普通のひとの瞳孔とはかたちが違って、あたしの瞳に似てるような気がするけど、白目の部分が黒く染まっているから、完全に同じって訳じゃない。と、思う。
「……あなた、誰……？」
『？』
女の子、首を傾げて。
声を発したあたしの顔をまじまじと見つめてくる。
すぐ近くから。

《ショゴス》

「ショゴス――」
頭の中に浮かんだ言葉が唇からこぼれる。
すると、背中を向けたままだった彼が「襟巻がどうかしたか」と振り返って、ぴたり、と二秒ほど固まって。それから――
「実体化しているのか。莫迦な」
「マスター、あ、あの、この子、お知り合い……？」
「私の襟巻だ」
「？？」
「それよりお前、ネオン、なぜ名前を知ってる」
「え」
名前。名前？
それは、頭の中に浮かんだから――

《雷電の男》

頭の中に？
ううん、違う。違う。違う！
言葉は確かに浮かんでる。
あたしの中に。でも頭の中じゃない。ほら、今、あたしは白い彼を見ていて、言葉はその視線に混ざり込むように浮かんで、まるで文字が浮かぶみたいに言葉が、正確には文字じゃない、なんだろう意味そのものがふわりと――
視界に――
見える――！
「……ッ」
あたしは目元を両手で押さえながら、立ち上がる。
瞼を閉じようとして――

《暗がり》

「！？」
視界いっぱいに暗さの意味が浮かんで、押し潰されそうで、あたしは反射的に瞼を開く。何、何なの。何が起きてるの。
目、瞳。視線があたしの意思とは関係なくぐるぐると動く。
やだ。何。気持ち悪い！
視線、勝手に空を向いて――

《黄金残滓》

黒い林――

《単位数値》

鉄色の山嶺――

《学園経済》

浮遊立方体――

《誓約者（カヴェナンター）》

「マスター！
やだ、見える、ぜんぶ見えちゃう!!」
あたしは、叫んで。
何もない場所を探す。目に見えるもののすべての意味が、それが何であるのかが見えてしまう。よく、わからない。でも、多分そうなのだと思う。そのはず。
だから、ほら！

《自己の手》

あたしの手を見れば、こうして見える――
あたしは瞼を押さえることも閉じることもできないまま、あの女の子が不安げにあたしの周囲をぐるぐる飛んで、ただの襟巻に戻ってしまって、瞬きする間に近付いた彼があたしの肩を抱いてくれて、それでもあたしの目、瞳は、ただただ見え続けていて。
「――――ッ!!」
叫ぶ。
叫んで、瞳、揺れて。
あたしは、地面を見つめる――

見つめる――

《機関動力》

見つめる――

《動力数値》

見つめる――

《数値積層》

見つめる――

《数値層第二》

見つめる――

《数値層第三》

見つめる――

《数値層第四》

見つめる――

《数値層第五》

見つめる――

《数値層最終》

見つめる――

《発見／情報網中心核》

見つめる――

《確認／自己保存本能》

見つめる――

《発見／独立情報体》

何かが、見えた。
積層構造をした地面の奥の、ずっとずっと奥底にいる何か。
それは、身を守るように丸くなって、蹲(うずくま)って、あたしの視線を感じた瞬間に、高らかに鳴いた。
左右三つずつ並ぶ、六つの赫い瞳を輝かせて。

《自己保存本能》

「ネオン！」
「マスター、何か、地中深くに……いる……！」
あたしを抱き留める彼に、何とか告げる。
何かがいるの。
ただ地上を歩くだけじゃ辿り着けない、ずっとずっと奥深くの洞窟じみた暗い場所。でも、あたしの目――この瞳には、見える！
「地中……に……！」
意識して、あたしは地面を再度見つめる。
両目で――
服を形作ろうとしたのと同じように、強く、そう在ろうと強く意

識して。集中。想像を、かたちに。
もう一度、はっきりと見せて！

《発動／真実暴露(トゥルース)》

ぐわん――と。
刹那、地面に十フィート以上の穴が空いていた。
積層構造のかたちで幾つも連なる地面、地層、そういうものが、いっぺんに貫かれて、深い深い穴になる。柔らかなクリーム地に、すっと指を突き入れるみたいな、あっけない感覚。
大きくて、深い穴ができていた。
だから、ほら。見える。
あたしだけじゃなくて、マスターにも見えるはず。
「……なるほど」
地中深く、ずっとずっと奥深く。
情報空間の中心核。
そこに隠れて、丸くなっていたそれの姿が。
「意識の操作で黄金瞳が本格発動したか。
意識が実存となる情報空間に居続けさせたせいか。
……複雑な感慨だが、今は、礼を言うぞ。ネオン」
「よく、わからない、です……けど……。
あれが……事件の、首謀者、です……よね……？」
「そうだ」
あたしにも彼にも見えている。
ひどく不定形なもの。
ひどく暗示的なもの。

黄金になりきれない、奔流――

「殺人道化師(キラークラウン)の時と似ているな」

情報の海の中で蠢く、黄色――

「今回は、ふたつの情報網(ネットワーク)が《鐘》の残滓と結びついた。
その本体こそがあれだ」

未だ、かたちにはならずに――

「未だ明確な形態ではない。
だが、ひとたび現実へ出れば道化師の比ではない」

ただ、そこで蠢くだけの色――

奥底で煌めく赫色の六連瞳――

「ネオン。指示を頼む。
この虚(うつろ)の空間では、発動果たした黄金瞳(おうごんどう)が頼りだ」

「お前に名前をくれてやる。
かたちなく荒れ狂うもの。
かたちなき竜の如きもの。
――汝こそは欺瞞の竜、メタ＝クリッター・ジャバウォック！」

雷電、疾(はし)って――

友人たち

「いないねえ」
「いないな」
「カーテン開けたままだねえ。まぶしー。ってことは、朝になってからふたりどっかに行っちゃったってことでいいんだよね？」
「さて、どうかな。
　合い鍵で中に入りはしたが、そもそも鍵が閉まってたんだ。
　つまり、今頃はふたり仲良く朝帰りの最中ってことも充分」
「莫迦、莫迦！　そそそんなわけないじゃんまだアタシたちもネオンもテスラ君も二年生なんだしそそそんなのないよ土曜のお昼に遊びに行こうって言ってたのふたりが忘れるわけないんだしもーアルベールの莫迦！　莫迦！
　それよりさ、ほら、映像ラジオ（ビジョン）！
　へー。へー。前来た時は気付かなかったけど、テスラ君、映像ラジオなんて持ってるんだねー。すごい！」
「なんなんだよその気分（テンション）の変わりようは……。
　お前、最近変だぞ。イズミ。悪いもんでも食べたか？」
「点けてみようよ」
「あっお前勝手に」
「えい」
　映像ラジオのスイッチをオンに。
　最初に映るのは砂嵐。
　それから、ややあってから映り込むのは異国の服着た彼の姿。
　合衆国西部風の衣装を着た娘を片腕に抱きながら、赫色の六連瞳と相対して――
「……」
「……」
「……ねえ。この、映ってるのって、テスラ君じゃないかな」
「そうか？」
「これ、テスラ君だよ。絶対そうだよ」
「んー……ぼやけすぎてて判別が……映画のフィルムでも流出してるって感じだぞ。見ろよ、あの影の怪物」
「ネオンかなぁ、隣の子」
「そう言われてみれば、そう見えなくも、ないが……」

†††

「流石はニコラ・テスラ。
　見事に情報空間内でも戦えているようだ」
　学生居住区域の一角。
　旧、統治会公邸。
　現在では新たに設立させた常設査問委員会の施設として登録してあるその建造物、最上階執務室にて、彼はその光景を見つめる。
　映像ラジオの気晶画面（エアモニター）――
「システム・ウォレスの敷設と同時にドクトル・Ｐに発注した情報空間接続機器、無駄にならなかったようで何よりです。マスター」
　優雅に腕を組んで。
　彼は、一言。
「虚ろなりし欺瞞の竜。
　情報の海で溺れる獣。
　お前はどの程度保つかな。せめて一分、いいや二分」

†††

「……映像ラジオ、あなたも見ていて？」
『ああ。数分前に付けたところだよ。
　すべての回線（チャンネル）が同じ映像を流しているね』
「ええ」

『ん――』
ふたり、言葉少なく意思を交わす。
遠く離れていても。
電信での会話であったとしても、それでわかる。互いの所属では掴み切れていない情報である、ということが。
「大丈夫かしら」
『というと？』
「マスターのなさることだから、大事はないと思うのだけど」
『彼女が心配かい』
「……少し、ね。あの子(ネオン)に荒事は向かないわ」
『ひとりではそうかも知れない。
けれど、彼らはふたりだ。ひとりではないよ』
「ええ」
『心配はいらないよ。
きみの言う通り、彼女には鋼鉄の男がついている』

†††

「エーリッヒ、この映像……」
「うん。テスラさんと、ネオンさんだ。音が同じだよ」
「こわいわ……ふたりとも、一体……」
「うん。何か、不気味な……音になりきれていないものが、いるみたいだ。色彩に似てるかもしれない」
「無事でいると、いいのだけど」
「大丈夫。この音よりもふたりの音のほうが強い」

†††

彼女は、瞼を閉ざしていた。
たゆたう水の園。
静謐の祈りの場。
其処は統治会領域の一角にあって、たとえ統治会メンバーであろうと彼女以外には立ち入りを行うことのない、秘密の神殿だった。
そう。神殿。
祈り捧げるところ。
欧州宗教研究会の会長であり神学科の五年生である彼女は、果たしていずれの神に祈るのか。
古グリースの神々か。
古バビロンの神々か。
それとも、古きケルトの神々、精霊か。
否――
彼女は、ただ、雷をこそ想い祈る。
スミリヤの者になり得なかったが故に、雷に祈る。
どうか。
どうか――
「マスター。どうか」
あの子を――
「わたしたちの愛し子を、お守りくださいますよう」
そして――
「あなたの道行きが。
決して、大敵屠り続ける血濡れたものとならぬよう」

†††

「あれ？」
「だからね、それであたしはお姉ちゃんに言ったのよ。そんな風でいたらいつまでも幸せになれないんだから、もっと積極的になりなさいって。だってそうでしょう、そもそも――ん。なあに？」
「あのっ、ほら、そこの映像ラジオにっ」
学生街の路地。

お喋りしていたふたりの視線が、ひとりの指差したショーウィンドウの向こうに注がれる。
高価な映像ラジオの気晶画面が幾つか。それに、今月から学園都市全域で華々しく売り出されている携帯秘書装置のずらりと並ぶ気晶画面も。
すべての画面が、一斉に、同じ映像を流し始めて——
「エイミーさん、あれって……！」
「ふうん。探偵さんじゃないの。
映像ラジオなんかに出て何してるのかしら」
「携帯秘書装置の画面にも出てます！」
「そうね。何かしら？」

†††

「何だ、これは」
「見ての通りだろう」
「見てわからんから言っている。見てわかることを口にするほど、俺は速度を無駄にする男では——」
「マスターは今、どうやら映像ラジオの中にいるようだ」
「……それでいいのか？」
「撮影された光景には僕には見えない」
「ま、確かにな」
統治会領域、とあるメンバーの公邸にて。
そのふたりは、極東拵えの祭壇（ブツダン）じみた外装の映像ラジオを注視していた。そこに映っているのは、他ならない雷電魔人の姿と、彼らの旧い友人である少女の姿——
「不定形の敵か」
「そんなもの、あのひとの相手にはならんだろう。
雷電魔人は《非実体に有効》（スキル）の特徴を有している。
未だ倒せていないのはネオンの指示が遅いためだ。遅すぎる」
「何か、気になる」
「お前は考えすぎだ。ベルタ」
「ふむ……」
「何だ」
「目に見えるものだけがすべてではない、とサムライは言う。
貴公は、今よりも思慮深くあるべきだろう。ヴァルター殿」
「……考えておこう」

†††

「ふむ……」
暗がりの中で——
優雅な仕草で頬に指を当てながら、執務机の上に置かれた小型の碩学式高性能映像（ビジョン）ラジオを彼女は見ていた。気晶画面に映し出された光景は、まさしく彼女が現在その価値を検討すべく調査を行っていた《学園都市最初の転校生》の姿だった。
実に、興味深い。
異能に依らず雷電操る魔人学生とは。
彼女は——
公安委員長メイリン・ソンは瞼を細めて魔人を見つめる。
輝く男。雷電魔人。
数多くの調査書を目にしてきたが、動く姿は初めてだった。
「面白いものが映りましたね。
まるでシンの伝説に在る雷公（レイ＝ゴン）であるかのよう」
一旦、言葉を切る。
じっと気晶画面を見つめて。
ややあってから、小さく、呟くように一言。
「統治会の玩具にしておくのは勿体ない。
あれこれと、面白い使い方がありそうな玩具ですのに」


F. MENDELSSOHN
VIOLIN op.64

欺瞞の竜

欺瞞なりし竜――
メタ＝クリッター・ジャバウォック。
情報空間に在って、なり損ないの不定形のそれは絶えず形態を変化させ続けながら蠢いていた。
昆虫、液体、潜水艦、そして影の獣――
昨日のタブロイド一面に記された記事やそこにまつわる情報をそのまま体現するかの如き、百面相ならぬ百面体とでも言うべきか。
彼は、ニコラ・テスラはそのことごとくを雷光で掻き消しながら中心核を探る。
赫色の六連瞳。
その存在を彼も朧気には把握しているものの、薄い。
あまりに気配が薄過ぎる。
故に、彼の感覚では真正面から捉えて雷電を叩き込めない！
頼りになるのは――

「ネオン！」
「はいっ」
「予測地点でも構わん。お前の勘でいい。
赫い瞳の浮かびあがる場所を指さしてくれ！」
「やってるつもりだけどがんばりますっ」
「うむ」

些か気が焦るのは、少女の存在のためか。
助手の少女――ネオン・スカラ・スミリヤ。
健やかに育ったスミリヤの末娘。
幻想なりし我が身を救った、美しい娘。
今や彼を世界に強く繋ぎ止める何よりの輝きの源。
この虚の空間、ウォレス情報空間（メタスペース）なりし疑似領域にいつまでも少女を留めておくのは、たとえこの身が雷電とは言えども安心できるものではない。現在の彼の内心を正確に表現すれば、不安極まりない、というのが正しい。事実、黄金瞳の発動如きでこうも砕ける大地の脆さ、地中奥深くに隠れた《欺瞞の竜（ジャバウォック）》の不定形さと戦術の欠片もない無闇と放たれる直接攻撃の類――自らを構成する情報体の奔流をぶつけるという単純なもの――は、予測し難いが故に雷電防御（シールド）を常に張り続けなくてはならない。
現状の様子であれば雷電防御が破られることもあるまいが、防御力を上回る力をあれが放ってこないとも限らない。
（長時間の戦闘は避けたいところだが）
メタ＝クリッターの名を与えはしたが、《欺瞞の竜》はひどく不安定な存在だ。昨年九月の道化師よりは遥かに強力ではあるが、その危険性は先月の影なりしクリッターには及ばない。
だが。不安定であるが故に、あらゆる可能性を有する。
たとえば《幻異（シャドウ）》なりし影のように。
ならば。

「出ます！　一時半のあたり、仰角二五度――出た！」
「よし」

全身に雷電を溜める。
学園都市では滅多に行うことのない攻撃の準備動作。
溜めた雷電はその時間に比例して威力が倍加される。
今度は外さない。
確実に、此処で、かの竜を仕留めよう。

「穢れしもの（toxic spirits）へと拡大変容する前に！
私が砕く！
雷電光剣（フォースブレイド）！」

閃光！
光の剣、五本が少女の指さした空間の周囲に突き立つ。
黄色の奔流が激しく波打って――

「メタ＝クリッター・ジャバウォック！
もしも未だ、空が青ければ。お前も、広大な数（すう）の海にたゆたう無

辜の数式ひとつに過ぎなかったかも知れないが」
　全身に溜めた、雷電――
「残念だったな」
　道化師戦の実に五倍――
「雷刃――」
　解き放つ――
「《双雷公の神矢（レイゴン・アロー）》ッ！」

†††

　光、だった。
　ひどく眩い閃光が情報を掻き消していく。
　それは身をよじって逃げようとしたものの、逃げ切れるものではなかった。光はこの数式の身をすべて灼き尽くす恐るべき雷電であり、存在そのものを許さない圧倒的な処刑の刃だった。
　砕かれていく。
　灼かれていく。
　粉々に、すり潰されて、消えていく。
　生まれた時と同じなのか、とそれは思った。
　偶然か、皮肉か。
　初めての思考と呼べるものだった。
　数日前、情報空間の形成と同時に発生して以来、自己拡大と自己防衛の本能以外の何をも持たず、ただただふたつの情報網（ネットワーク）を自らの神経網へと換えるべく自己の拡大を続け、思考のための頭脳も回路も持たなかったそれにとって、初めての、思考。
　光が自分を埋め尽くしていく。
　ああ――
　まだ、死にたくない。
　誰か。
　たすけて。

†††

　声が――
　聞こえたような気がして、あたしは耳を澄ませる。
　白い彼が、マスター・テスラの全身が激しく発光して、彼の体とほぼ同じ大きさの雷電が凄い勢いで解き放たれて。黄色の奔流を灼きながら、赫色の六連瞳を呑み込んで。
　視界が真っ白に染まる。
　その時だった。
　あたしの、ネオン・スカラの耳に何かが聞こえて。
　耳を澄ませる。何？
「声……」
　呟くけど、何も聞こえない。
　それならとあたしは瞳に意識を集中させる。
　見える。
　見える。
　あたしには見えると強く意識すると、視界に、意味が見えてくる。
　さっきのように何もかもが見えることはもうなくて、強く、強くそう努めないと、何も見えてこない。
　だから、彼への指示は遅れてしまって、何度も彼は雷電を何もない奔流へ放つことになってしまったのだけど――
　もう一度。
　あたしは意識する。
　ほら、見えてくる。
　言葉よりもはっきりと認識できる意味が――
《発動／真実暴露（トゥルース）》

見える——

《数式残滓》

見える——

《思考》

見える——

《言語化》

見えるものが、今度は聞こえる。
声のかたちになる。
声にかたちなんてないのだから本当は違うのだろうけど、あたしにとっては、そう。聞こえてくる。そういう感じ。
誰かが、何かを伝えようとすること。
それなら、それは、言葉なのだと思うから。

『たすけて』

え——

『たすけて』

何——？

『たすけて』

『うまれたばかりなのに』

『しにたく』

『ない』

誰の、声？
助けてって、言ってるのは——

誰——？

「マスター、駄目……！」
あたしの唇から声が出ていた。
喉が、少し痛い。
迸る雷電の轟音よりも大きな声になるように、声、張り上げて。
何を言うの。ネオン。
何をするの。ネオン。
彼は間違ったことをするひとじゃない。
わかってるでしょう？

——ええ。わかってる。
——マスターはきっと間違ったことなんてしない。

——でも。
——助けてと聞こえたの。
——だから。
——あたしは迷わない。

手を伸ばす



——こうするの。
——彼が、あたしにそうしたように。

ネオン・スカラの手記より

四月二四日、土曜日。

イズミとアルベールには改めて謝っておかないと。
約束のお昼より二時間も遅くなってしまって、ふたりを心配させてしまったから……。

マスターは少し怒ってるみたい。
あたしが雷電の前に飛び出そうとしたから。
でも、こうして無事でいるし、飼うのは駄目とも言っていないから、多分、大丈夫なのだと思う。
追い出したりしないよね？

あの後、色んなひとから電信（フォン）があって。
まさか映像ラジオに映っていたなんて……うう……。
でも、ぼやけていたみたいだから……。
多分大丈夫、って、ジョウお姉ちゃんは言ってたけど――

うー……。これで《輝きの娘（パワーガール）》なんて自警学生扱いされるようになったらどうしよう。マスターの機嫌が直ったら、相談しないと。

それより、何より、誰か詳しいひとに聞かないと。
まだウォレス情報網の有料情報書庫（データベース）機能は本格稼働していないし、専門書を家にいながらすぐに買う、なんてこともできないし。

この子、今日ずっと何も食べてない。
心配。元気はあるみたいだけど、何か食べないと。

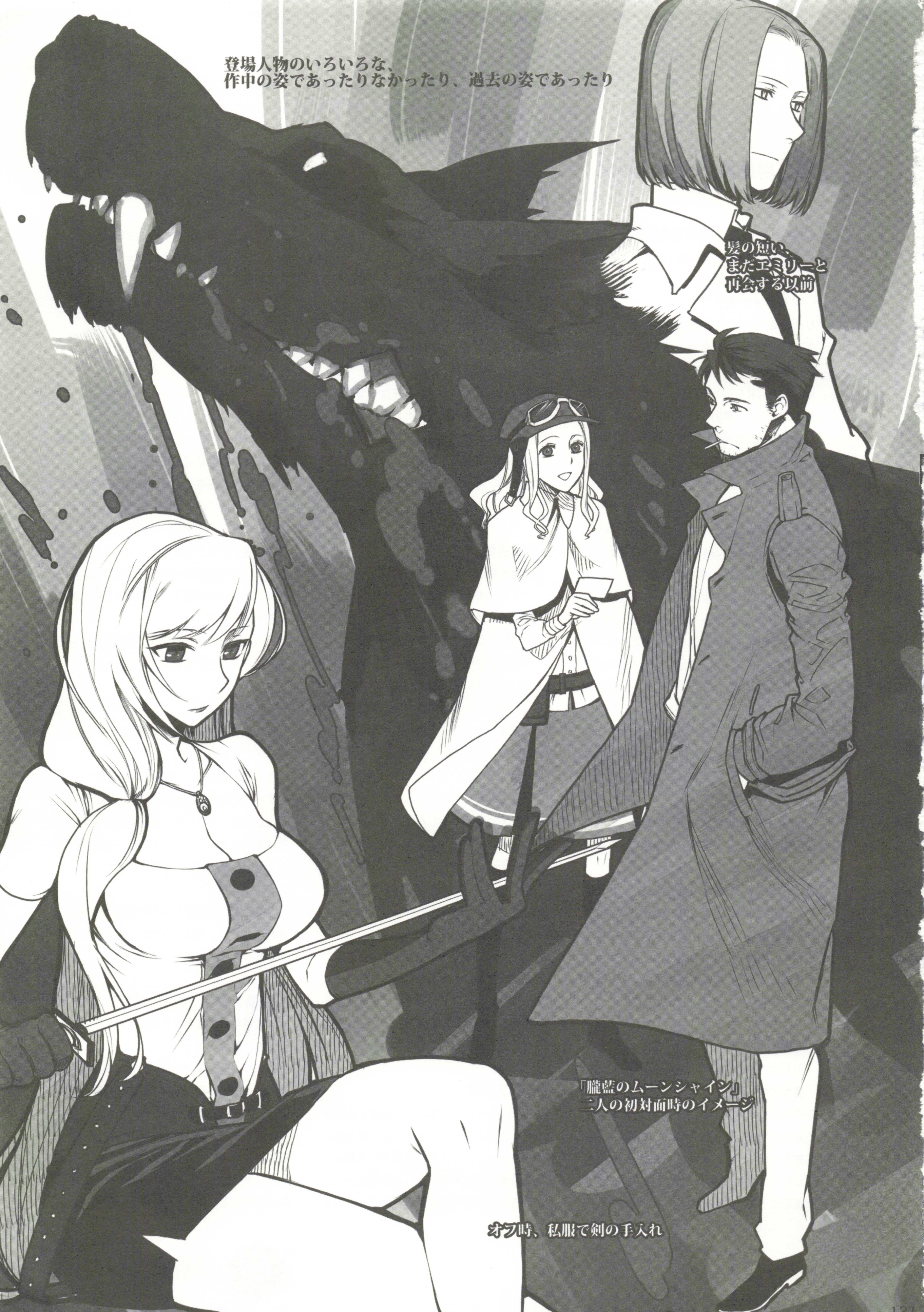
情報空間から出たら消えてしまうのかと思ったけど、ちゃんと、かたちを伴ってあの子は出てきて。
爬虫類は苦手なほうだけど、この子は大丈夫。
本物のトカゲと、なんだか違う外見だし。
頭部も大きくて、なんだか印象がトカゲとちょっと違う。
でも、トカゲ？

一部分はトカゲっぽいのだけど。
ううん。
ともかく――

――鋼鉄のトカゲの赤ちゃん。
――この子、何を食べるんだろう？

To be …


「欺瞞の竜」
マッピング中イメージ
レディ・ナイチンゲール
二年前
猫婦人
シャダム・ココ
プロトタイプの戦闘スーツ


登場人物のいろいろな、
作中の姿であったりなかったり、過去の姿であったり
髪の短い、
まだエミリーと
再会する以前
「朧藍のムーンシャイン」
二人の初対面時のイメージ
オフ時、私服で剣の手入れ

用語集（１９０９年度対応）

○マルセイユ洋上学園都市

通称は学園都市。１０万学生を擁する巨大学園にして機関都市。

マルセイユ湾上に存在する人工島であり、要塞の如き防壁に囲まれている。設立は１８５０年（当時の名称は洋上ガクトゥーン市）。世界全土（カダス除く）から自主的に素質ある若者を集めており、優秀な碩学を世界各国へ何人も輩出してきた。

基本的な修業年数は５年。研究科（研究部、研究院とも呼ばれる）に進めばさらに４年が加算される。

設立者不明、運営者不明の、極めて不可思議な洋上施設であり、実質的には学生のみで運営されていたが、１９０９年現在ではフランス政府による運営補助が計画中。

１９０８年以前では外部に対して完全に孤立しており、マルセイユからの物資（食料・衣料・その他）を受け取る以外での交流は殆ど行われていないかった。入学したが最後、学生が外に出ることができるのは卒業時のみ――

碩学輩出の結果として各国に強力なコネクションを有しており、１９０９年現在でも各国政府は軽々しく学園都市に手が出せない状態となっている。

学園中央に巨大な機関塔『統治塔』と不可思議な尖塔『ディフの塔』を有し、地下の大機関二基によって島全土の動力を賄っている。ほぼ完全な機関化（自動機械化）が成されている、世界初の自動化機械都市でもある。

カダス地方の帝国との繋がりを有しているらしく、卒業生にはカダスにおける学位が与えられる。特に成績優秀な卒業生はカダスの碩学位が与えられるという。

○異能（アート）

別名は《ガクトゥーンの祝福》。

優秀学生に発現される特殊な能力。特定の条件によって発動する、物理法則さえ無視する超常の力である。何もないところから炎を発生させたり、手も触れずに蒸気自動車を分解したり、空中を歩行したり、等々。詳細及び原理は不明。成績優秀者の中でも選ばれた者へのみ与えられる、学園都市からの祝福であるという。

統治会メンバーは全員がこれを必ずひとつ身に備えていると囁かれている。

学園に伝わる噂のひとつだが、明確な事実として認識されている。学園の公式記録にもはっきりと記載がある。

特筆すべきこととして、学生たちの多くが異能の存在を奇異に思うことがない、という不可解なものが挙げられる。学園都市に慣れた上級生だけでなく、入学して数日の新入生に至るまで、異能の存在を耳にしても目にしても……。

○旧図書館

正式名称はユーゴー記念図書館。

かつて学園都市が洋上ガクトゥーン市と呼ばれていた建設当初に用いられていた施設であり、名称には初代館長にして初代フランス第３王朝首相ヴィクトル・ユーゴー伯爵の名前が用いられている（建設当初の学園都市こと洋上ガクトゥーン市の運営には碩学振興政策を推進するフランス政府が深く関与していたとされる）。現在では一般学生立ち入り禁止。

どうせゴッスの『オンパロス・カダシア』などがあるんだろう、と言ってなぜかテスラは頑として近寄ろうとしない。

○落第街

その名の通り、落第学生たちの群れる場所。

旧独立学生区と呼ばれる静かな区の地下空間に存在する、地下街である。

学園通貨とでも呼ぶべき独自の通貨で運営される闇市があちこちにひしめいており、学園校則では禁じられているさまざまな嗜好品や学園都市の外の情報などはここで手に入る。

一種のスラムと化している区域。

○ディフの塔

学園都市の象徴、学園中央に位置する奇妙な黒色の尖塔。シャトー・ディフ。本来的にはシャトー・ド・イフというフランス語が元であるため『イフの塔』という名称が正しいが、現在の学園都市では慣例的にディフの塔と呼ばれている（第２代統治会のリーダーの発音に訛りがあり、それに倣ったのが始まりとされる）。

数千フィートの全長を有すると言われるが、正確な数値は不明。

出入り口がないため誰ひとり入ることができない――と、されている。

○怪学生（ヴィラン）

別名は怪人学生。１９０８年から発生し始めたある種の異能学生たち。

異能学生の悪事といえば普通、突発的なものか、落第街におけるギャングやマフィアじみた違反（イリーガル）学生の元締めたちの用心棒じみたものと相場が決まっていたが、１９０８年６月を境に一部の異能使いたちが『怪学生』を名乗り、著しい校則違反――犯罪を行い、風紀警察を悩ませている。

彼らの多くは覆面（マスク）を纏い、仮装めいた姿で学園都市の夜を跋扈する。

○自警学生（ヴィジランテ）

怪学生の発生に対応して登場した、一部の異能学生たち。

怪学生と同様に、覆面や衣装（コスチューム）を纏って活動するが、彼らは積極的に校則違反活動を行うことはない。むしろ、風紀警察の通常戦力では太刀打ちできない強力な怪学生たちと敵対し、彼らを風紀に引き渡す。大きな違いである。

１９０７年以前より彼らの活動は少数報告されていたが、著しく目撃例が増えたのは１９０８年以降のこと。

○映像ラジオ

学園都市全域に向けて放送されている公共ラジオ放送。

近年の先進各国で放送の始まったラジオ放送と基本的には同一であるものの、篆刻動画と呼ばれるリアルタイムの映像を音声と併せて放送する最先端技術を試験的に使用している。世界各国で未だ実用されていない技術であり、学園都市の特異かつ優れた先進性を端的に証明している。

登場人物紹介（PCゲーム『黄雷のガクトゥーン』に登場する人物です）

●ニコラ・テスラ
本編主人公にして学園都市最初の転校生。
自称７２歳の２年生（本編では１年生）。昨年、思弁的探偵部を設立して初代部長となった。現在も部長。雷電を操る魔人。
通称は《鋼鉄の男（マン・オブ・スティール）》や《雷電魔人》など。

●ネオン・スカラ・スミリヤ
本編主人公。ヒロイン。
２年生（本編では１年生）。
数年前から左右の両瞳が猫のものに似た黄金色の瞳へと変わった。
思弁的探偵部の部員（部長以外には彼女しか部員はいない）にして、ニコラ・テスラに銀貨３０枚で『買われた』身。

●アナベス・マードック
機関工学科の４年生（本編では３年生）。
女子。カナダ出身。
学園のさまざまな噂を扱う情報屋としてテスラを助ける。

●ジャン・ジャック（ＪＪ）
通称ＪＪ。風紀警察、警備部主任衛視。
４年生（本編でも４年生）。１１年留年している。

●アンヌ・ベアール
風紀警察、上級保安官。
５年生（本編でも５年生）。３年の時と５年の時に留年している。
通称は《鉄の魔女》。学生を守る鉄の壁。

●イズミ
ネオンの友人にしてクラスメイト。
２年生（本編では１年生）女子。
常に、猫の耳を模したカチューシャを頭に付けている。

●アルベール
ネオンの友人にしてクラスメイト。
２年生（本編では１年生）男子。
フランス・パリ出身。
３つの部活に所属している。

●ルイ・シャルル
史学科の４年生（本編では３年生）男子。
女子の多くから慕われているが、浮いた噂はあまりない。
エミリー・デュ・シャトレの知己。

●ジョセフィン・マーチ（ジョウ）
統治会《ソロリティ》の一員。
３年生（本編では２年生）。実は一度留年している。本編開始前、すなわち２年前は対異能学生の最前線で風紀警察と肩を並べる機会も多かった
異能学生としての通称は《秘密兵器（ウェポンＸ）》。

●フロレンス・アメギノ・ナイチンゲール
統治会《ソロリティ》の主宰。
神学科の５年生（本編では４年生）。博物学のカダス碩学位を有している。
異能学生としての現在の通称は《御前の女神》だが、２年前までは《嵐の女神（ストーム）》として知られていた。

●エミリー・デュ・シャトレ
統治会《ソロリティ》の一員。
４年生（本編では３年生）。フランス貴族シャトレ公爵家の現当主。
異能学生としての通称は《鷹の目（ホークアイ）》。

●ウィルヘルム・ライヒ
統治会《フラタニティ》の前主宰。
現在は研究部に進学（本編では５年生）。本編で統治会を退き、現在は、新たに興された常設査問委員会なる新組織にて顧問の座に就いた。
異能学生としての通称は《戦術士（ガンビット）》。

●ベルタ・モリ・ヴィーゲルト
統治会《フラタニティ》の一員。
現在は３年生（本編では２年生）。極東の文化に親しみ、自らをサムライと自称する。
異能学生としての通称は《白銀の剣（シルバーサムライ）》。

●ヴァルター・リッツ
統治会《フラタニティ》の一員。
現在は４年生（本編では３年生）。何よりも速度を重んじるという。
異能学生としての通称は《銀の靴（クイックシルバー）》。
最近は別の通称もあるという噂が……。

●エイミー・マーチ
上級数学科の２年生（本編では１年生）女子。
ジョウの妹。

●ミリー・ミリアム
中級数学科の２年生（本編では１年生）女子。
平凡な少女。

●オディール・ツァン
音楽科の５年生（本編では４年生）女子。
ドイツ系フランス人。フランスでは有名な天才ヴァイオリニスト。

●エーリッヒ・ツァン
音楽科の２年生（本編では１年生）男子。
オディールの弟。最近、ヴァイオリンを再び弾き始めた。
ヴァイオリンよりヴィオラが向いている模様。

●キザイア・メースン
学園都市における数少ない『教師』のひとり。博物学者。
２０代と思われるが、ニコラ・テスラは常に「魔女め」と呼んで距離を置こうとしている。

黄雷のガクトゥーンノベルアンソロジー

2013年2月末日発行
株式会社ビジネスパートナー／ライアーソフト

企画・ディレクション：桜井光
表紙：千枚葉
執筆：桜井光・鋼屋ジン・森瀬繚・禾刀郷・加納京太
挿絵：千枚葉・Ｌｅｍ・文倉十・霧生実奈・東麻姫
カバーデザイン・マップ作成：しまさらゆめき
編集：うさぎ旅館
印刷：マルダイ印刷

スチームパンクシリーズポータルサイト
http://www.steampunkseries.com/
ライアーソフトウェブページ
http;//www.liar.co.jp/（18歳未満閲覧禁止）

桜井光 & 千枚葉

鋼屋ジン & Ｌｅｍ

森瀬繚 & 文倉十

禾刀郷 & 霧生実奈

加納京太 & 東麻姫

~ What a shinning braves ~

—Brightness, the thing of which it thinks much. —What who envies

—However, nobody's fingertip had touched it until now.

黄雷のガクトゥーン

Novel Anthology

Liar-soft


Gahkthun Novel Anthology

桜井光 & 千枚葉

鋼屋ジン & Lem

森瀬繚 & 文倉十

禾刀郷 & 霧生実奈

加納京太 & 東麻姫

~ What a shinning braves ~
—Brightness, the thing of which it thinks much. —What who envies
—However, nobody's fingertip had touched it until now.

黄雷のガクトゥーン
Novel Anthology

Liar-soft